

茨城県教育財団文化財調査報告第224集

当 向 遺 跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

上 卷

平成16年3月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第224集

とうむかい 当 向 遺 跡 1

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

上 卷

平成16年3月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団



当向遺跡遺景



「新大領」須恵器蓋

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町堤ノ上地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である当向遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年4月から平成15年3月まで発掘調査を実施しました。

本書は、当向遺跡の調査成果を取録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字堤ノ上^{（1）}に所在する当遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成14年4月1日～平成15年3月31日
整理 平成15年4月1日～平成16年3月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治のもと、以下の者が担当した。
調査第二課第2班長 村上 和彦 平成14年4月1日～平成15年3月31日
主任調査員 小澤 重雄 平成14年4月1日～平成15年3月31日
主任調査員 田中 幸夫 平成14年4月1日～平成15年3月31日
主任調査員 近藤 恒重 平成15年1月6日～同年3月31日
調査員 早川 麗司 平成15年1月6日～同年3月31日
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員小澤重雄、同小野克敏が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。
小澤 第2章、第3章第3節4(1)の第1号住居跡～第130号住居跡、(2)・(3)、5・6、第4節
小野 第1章、第3章第1・2節、第3節1・2・3・4(1)の第131号住居跡～第219号住居跡
- 5 本書の作成に当たり、「新大領」銘ヘラ書き須恵器について、財団法人辰馬考古資料館学芸員の青木政幸氏に、栃木県産須恵器については、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター管理普及部主査の篠原祐一氏、同調査部主任の池田敏宏氏に御指導いただいた。
- 6 出土した銅剣・和鏡の分析を株式会社吉田生物研究所に依頼した。成果は付章として巻末に掲載した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標を原点とし、 $X = +40880.000\text{m}$ 、 $Y = +19400.000\text{m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。





大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地形に基づく緯度・経度を () を付けて併記した。
3 実測図・一覧表・遺物観察等で使用した記号は次のとおりである。

遺 構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-S B 欄跡-S A 地下式塙-U P 土坑-S K 井戸跡-S E
溝跡-S D 道路状遺構-S F ビット群-P g 柱穴-P
土 層 攪乱-K

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。
5 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・赤彩・施釉  炉  竈・粘土・黒色処理 
柱痕・抜き取り痕・油煙・煤 
土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△ 瓦■ 硬化面-----

- 6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
(1) 遺構全体図は400分の1、遺構は60分の1または80分の1に縮尺して掲載した。
(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。
(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。
7 「主軸方向」は、竈または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E、N-10°-W)。
8 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
(1) 計測値の単位は、法量がcm、重量がgで示した。なお、現存値は () で、推定値は [] を付けて示した。
(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品、金属製品、瓦ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。
9 遺構一覧表における計測値は、現存値は () で、推定値は [] を付けて示した。

水戸
県西

抄 録

ふりがな	とうむかいいせきいち							
書名	当向遺跡1							
副書名	北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	224集							
著者名	小澤重雄 小野克敏							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
当向遺跡	茨城県西茨城郡若槻町大字地ノ上字当向32番地ほか	08324 - 082	36度 21分 51秒 36度 21分 45秒	140度 3分 26秒 140度 4分 35秒	65 ~ 55 m	20020401 ~ 20030331	13,076㎡	北関東自動車道(協和~友部)建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
当向遺跡	集落跡	縄文	陥し穴 18基	縄文土器片、石鏃	弥生時代後期から平安時代にかけて断続的に営まれた集落跡が中心の複合遺跡である。古墳時代後期の住居跡から銅鏃が出土している。 調査区域の中央部から東斜面にかけて、平安時代の竪立柱建物跡が確認され、住居跡や土坑からは、石製の瓦方や「新大甕」とヘラ書きされた須恵器の壺が出土している。また、遺構には伴っていないが小形仏像鋳型が1点出土している。 新治郡衙や新治廃寺・堀ノ内竪跡群との関連が深い遺跡と考えられる。			
		弥生	竪穴住居跡 5軒	弥生土器片、土製品(紡錘車)				
		古墳	竪穴住居跡 43軒 土坑 4基	土師器、須恵器 土製品(土鏃・土玉・紡錘車) 石器、石製品(砥石・石製模造品) 金属製品(銅鏃・耳環) ガラス製品(丸玉)				
		奈良・平安	竪穴住居跡 147軒 竪立柱建物跡 18棟 溝跡 2条 槽跡 3条 土坑 19基	土師器、須恵器、瓦 土製品(紡錘車) 石器、石製品(腰帯具・紡錘車・砥石) 金属製品(刀子・鉄鏃・鉄鎌・紡錘車・紋具)				
		中・近世	竪穴住居跡 1軒 竪立柱建物跡 1棟 溝跡 10条 井戸跡 3基 槽跡 4条 道路跡 1条 土坑 10基 ピット群 3ヵ所 段切り遺構 1ヵ所	土師質土器(小皿・内耳鍋片) 陶器、磁器、銅製品(鏡)、古銭				
		不	不明	方形竪穴遺構 1軒 溝跡 1条 槽跡 1条	仏像鋳型			
	墓域	中・近世	地下式墳 8基 火葬施設 2基 墓壇 1基	土師質土器				
	その他	不	不明	土坑 342基				

目 次

- 上 卷 -

序

例 言

凡 例

抄 録

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 縄文時代の遺構と遺物	8
(1) 土坑	8
(2) 遺構外出土遺物	16
2 弥生時代の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居跡	17
(2) 遺構外出土遺物	26
3 古墳時代の遺構と遺物	27
(1) 竪穴住居跡	27
(2) 土坑	117
(3) 遺構外出土遺物	120
4 奈良・平安時代の遺構と遺物	122
(1) 竪穴住居跡	122

- 下 卷 -

4 奈良・平安時代の遺構と遺物	323
(1) 竪穴住居跡	323
(2) 掘立柱建物跡	378
(3) 溝跡	407
(4) 槽跡	408
(5) 土坑	411
(6) 遺構外出土遺物	425
5 中・近世の遺構と遺物	428
(1) 竪穴住居跡	428
(2) 掘立柱建物跡	430
(3) 地下式墳	431
(4) 墓壇	440
(5) 火葬施設	441
(6) 溝跡	442
(7) 井戸跡	446
(8) 槽跡	449
(9) 道路跡	451
(10) 土坑	453
(11) ビット群	459
(12) その他の遺構(段切り遺構)	461
(13) 遺構外出土遺物	463
6 その他の遺構と遺物	464
(1) 方形竪穴状遺構	464
(2) 溝跡	465
(3) 槽跡	466
(4) 土坑	466
(5) 遺構外出土遺物	489
第4節 まとめ	509
付 章	529
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に現地踏査を、平成12年7月28日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年9月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に当向遺跡が存在する旨回答した。

平成13年7月12日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年7月13日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

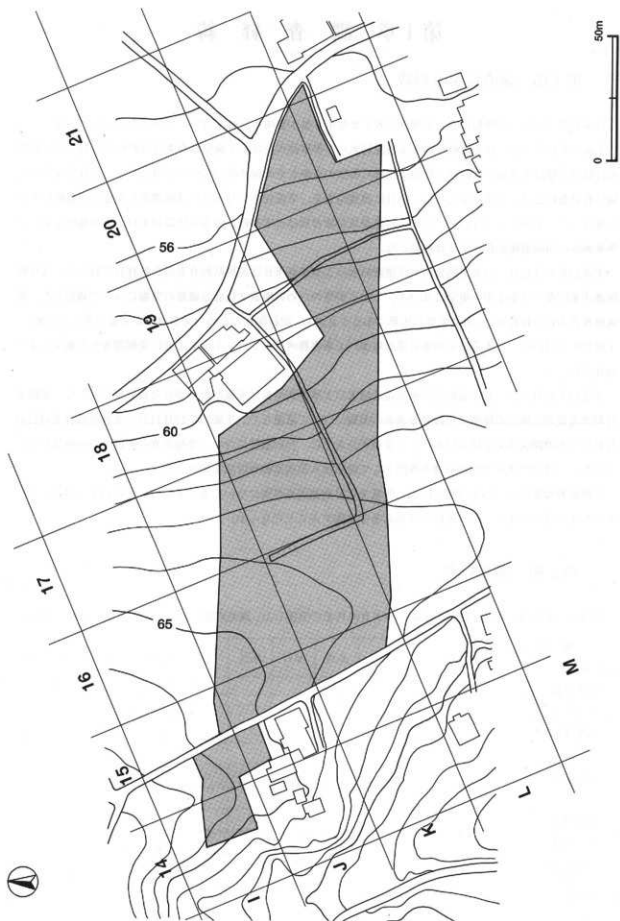
平成13年10月9日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成13年10月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、当向遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年4月1日から平成15年3月31日まで、当向遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成14年4月1日から平成15年3月31日まで実施した。調査経過については、下表のとおりである。

期 間 項 目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認												
遺構調査												
遺物洗浄 注記作業 写真整理												
補足調査 後片付け												



第1图 当向遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

当向遺跡は、茨城県西茨城郡岩瀬町大字堤ノ上字当向32番地ほかに所在している。

茨城・栃木・福島の3県に連なる八溝山地は、八溝・鷲の子・鶏足・筑波の山塊からなり、なだらかな山並みを形成している。遺跡周辺の地勢は三方を山に囲まれ、西側が関東平野に開けた盆地状の地形となっている。北は鶏足山塊から派生する支脈が仏頂山(430m)、高峯(520m)、兩巻山(533m)、富谷山(365m)と連なり、西側は小貝川の沖積地が広がっている。南は御嶽山(231m)、雨引山(409m)、燕山(701m)と筑波山塊の山々がそびえている。東は榎峰(263m)を境に、酒沼川水系が笠間盆地を経て太平洋に流れている。岩瀬盆地では鏡ヶ池を水源とする桜川が、竹輪川などの支流を合わせながら中央を西へ流れ、盆地の南西部向きを変え、筑波山の西側を南に流れている。この二つの水系は、八溝山地を東西に貫く低地帯を形成している。

盆地の周縁部には、浸食により開析をうけた尾根とそれに続く台地が広がっている。盆地内部には残丘状の丘陵が点在し、その間は桜川とその支流によって形成された沖積地が広がっている。

当向遺跡は、岩瀬市街地から西に約5kmほど離れた盆地の外縁部に位置している。当遺跡は、背後に標高約280mの丘陵をひかえ、そこから南へ緩やかに延びる標高55~65mの尾根上に営まれている。遺跡の南側には桜川に続く沖積地が広がり、東と西はこの沖積地から山裾に向かって延びる谷となっている。

第2節 歴史的環境

岩瀬地域は、北関東の内陸部から太平洋岸へ至る交通路と、霞ヶ浦を北上して那須方面に至る交通路が交差し、起伏が緩やかな地形のため、古来より人々の生活拠点として最良の場を提供してきた。このため、多くの遺跡が所在している。

当向遺跡〈1〉では、縄文時代から中世にかけての遺構が確認されている。ここでは当遺跡と同時代の遺跡を中心に、分布の概要について述べる。

縄文時代では、集落は台地上や山麓付近に営まれている。盆地南西部の山麓には犬田神社前遺跡〈2〉、猪俣遺跡〈3〉が、盆地中央に位置する長辺寺山の西側斜面には長辺寺遺跡〈4〉が位置している。桜川右岸には高森遺跡〈5〉、高森西遺跡〈6〉があり、小貝川の沖積地に面した台地には、宮本A・B遺跡〈7・8〉、石畑遺跡〈9〉、中台遺跡〈10〉などの遺跡が点在している。岩瀬盆地東部に所在する養山遺跡〈11〉からは中期から後期の遺構が、松田古墳群〈12〉の下層でも同時期の遺構が調査されている。また犬田神社前遺跡〈1〉からも中期の遺構が確認され、岩瀬地域では中期以降に人々の活発な営みが行われていたようである。

弥生時代になると岩瀬地域は比較的早く弥生文化が波及しており、盆地北部の大泉地区から中期の特徴を持つ壺形土器が出土している⁽⁵⁾。後期には辰海道遺跡〈11〉、協和町養山遺跡〈12〉でも遺構が確認され、稲作が広がっていった様子がうかがえる。また南飯田遺跡と番匠免遺跡から出土した土器⁽¹⁾は、那珂川・久慈川流域の土器と類似性が認められ、この方面と交流のあったことを示している。

古墳時代に入ると、比較的早い段階から狐塚古墳〈13〉、長辺寺山古墳〈14〉など有力な古墳が築かれる。狐塚古墳は長辺寺山の山麓に築かれた全長約40mの前方後方墳で、短甲や銅鏡が出土している⁽⁷⁾。山頂に築かれた長辺寺山古墳は、全長約120mの規模を持つ地域最大の前方後円墳である。県内でも早い段階に埴輪を



第2図 当向遺跡周辺遺跡位置図（国土地理院5万分の1「真岡」）

樹立した古墳の一つで、中部高地方面と共通する特徴を持つことが知られている⁽⁴⁾。また、盆地東部に所在する松田古墳群等は、全長約40mの前方後円墳から鏡・直刀・銅劍その他が出土している。後期に入ると、山ノ入古墳群⁽¹⁵⁾、坂戸古墳群⁽¹⁶⁾、犬田山神古墳群⁽¹⁷⁾、稲古墳群⁽¹⁸⁾、青柳2号墳⁽¹⁹⁾、古郡台原古墳⁽²⁰⁾などが造営されている。終末期には裝飾古墳の花園3号墳⁽²¹⁾や、主頭大刀などが出土した協和町五塚古墳群⁽²²⁾が築かれ、新治国造の系譜をひく人物の墓と思われる。

また大規模な集落が営まれた辰海道遺跡は居館跡も確認されるなど拠点集落としての様相を持っている。金谷遺跡⁽²³⁾、犬田神社前遺跡は古墳時代を通じて集落が形成され、磯部遺跡⁽²⁴⁾や協和町裏山遺跡⁽²⁵⁾でも古墳時代の遺構が確認されるなど、前代よりも遺跡数は増加している。

奈良・平安時代に入ると岩瀬地方の大部分は、常陸国新治郡の坂門郷に編入される。協和町古郡地区には新治郡衙⁽²⁶⁾や新治庵寺⁽²⁷⁾といった郡の主要な施設が設けられている。これに伴って上野原瓦窯跡⁽²⁸⁾、富谷薬師台瓦窯跡⁽²⁹⁾、本郷瓦塚遺跡⁽³⁰⁾などの瓦窯が整備され、間中遺跡⁽³¹⁾では製鉄が行われるなど、開発が進められている。また須恵器生産も盛んになり、堀ノ内古窯跡群⁽³²⁾が下野国側の真岡市南高岡窯跡群⁽³³⁾や益子町西山・本沼窯跡群⁽³⁴⁾などの窯跡と共に周辺の集落に製品を供給している。

律令制が衰退すると各地で荘園が形成され、岩瀬地域でも蓮華王院を領主とする中郡庄が成立している。さらに平将門の乱以後武士の台頭が目立ち、岩瀬地域では大中臣氏系の中郡氏が中郡庄の荘官として勢力を伸ばしている。この地域には「回國雜記」を記した道興など様々な人物が訪れ、また門毛出土の経塚遺物⁽³⁵⁾や謡曲「桜川」の舞台とされたように中央文化の波及も見られる。しかし世情が不安定になると、争乱を招くようになる。南北朝期には中郡城をめぐる戦いがあり、その後も小栗氏の乱、結城合戦を始めとして多くの合戦が行われている。しかし、中郡氏が没落してからは有力な豪族が現れず、結城氏、真壁氏、笠間氏、宇都宮氏などの諸氏が勢力拡大のために盛んに進出を繰り返している。そのため、坂戸城跡⁽³⁶⁾、富岡城跡⁽³⁷⁾、富谷城跡⁽³⁸⁾、岩瀬城跡⁽³⁹⁾、小栗城跡⁽⁴⁰⁾などの城館が所在している。坂戸城跡は芳賀氏の流れをくむ小宅氏を城主とし、二つの交通路が交わる地点を見下ろす山上に築かれている。南麓に位置している金谷遺跡からは、この城に関連すると思われる遺構が確認されている。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- (1) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町 1987年3月
- (2) 黒澤秀雄 「一般県道西小滝真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 裏山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第73集 1992年3月
- (3) 茨城県教育財団 「松田古墳群」『年報』21 2002年6月
- (4) 茨城県教育財団 「犬田神社前遺跡」『年報』22 2003年6月
- (5) 茨城県史編纂会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 1991年3月
- (6) 瀬谷昌良・他 「玉塚古墳群・寺山古墳群・裏山遺跡—スプリングフィルズゴルフクラブ造成に伴う小栗地内遺跡群発掘調査報告書」 協和町教育委員会 1986年3月
- (7) 西宮一男 「常陸孤塚」 岩瀬町教育委員会 1969年3月
- (8) 大橋康夫・安悦久・水沼良浩 「常陸長辺寺山古墳の円筒埴輪」『古代』77 早稲田大学考古学会 1984年6月
- (9) 茨城県教育財団 「犬田山神古墳」『年報』22 2003年
- (10) 萩原義照 「稲古墳群7号墳」『岩瀬町埋蔵文化財調査報告書』第9集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- (11) 萩原義照 「岩瀬ひさご塚(稲古墳群2号墳)」『岩瀬町埋蔵文化財調査報告書』第7集 岩瀬町教育委員会 1991年3月
- (12) 伊藤重敏 「青柳2号墳調査報告」『岩瀬町文化財調査報告書』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月

- (13) 甲陽史学会 『常陸國上代遺跡の研究Ⅱ』 1988年1月
- (14) 伊東重敏・川崎純徳 『花園壁面古墳(第3号墳)調査報告書』『岩瀬町文化財調査報告書』第7集
岩瀬町教育委員会 1985年3月
- (15) 野村幸希 『磯部遺跡』 岩瀬町教育委員会 1972年3月
- (16) 高井第三郎 『常陸國新治郡上代遺跡の研究』 1944年10月
- (17) 高井第三郎 『茨城県西茨城郡富谷薬師台瓦窯跡』『日本考古学年報』4 1955年
- (18) 寺門義範 『岩瀬・間中-茨城県西茨城郡岩瀬・間中遺跡の発掘調査報告-』 岩瀬町教育委員会 1976年5月
- (19) 真岡市編さん委員会 『真岡市史 考古資料編』 真岡市 1984年3月
- (20) 栃木県教育委員会 『栃木県生産遺跡分布調査報告書』『栃木県埋蔵文化財調査報告』第89集 1988年3月
- (21) 茨城県史編さん委員会 『茨城県史 中世編』 茨城県 1986年3月
- (22) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 資料編』 岩瀬町 1983年10月

表1 当向遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平			中・近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平
1	当向遺跡	○	○	○	○	○	18	青柳2号墳				○		
2	犬田神社前遺跡	○	○	○	○	○	19	古郡台原古墳				○		
3	猪窪遺跡	○	○				20	丑塚古墳群				○		
4	長辺寺遺跡	○	○				21	金谷遺跡				○	○	○
5	高森遺跡	○					22	新治郡衝						○
6	高森西遺跡	○				○	○	23	新治廃寺					○
7	宮本A遺跡	○	○		○		24	上野原瓦窯跡						○
8	宮本B遺跡		○				25	富谷薬師台瓦窯跡						○
9	石畑遺跡	○			○	○	26	本郷瓦塚遺跡						○
10	中台遺跡	○	○				27	南高岡窯跡群					○	○
11	辰海道遺跡			○	○	○	○	28	西山・本沼窯跡群					○
12	裏山遺跡	○	○	○	○	○	29	堀ノ内古窯跡群						○
13	狐塚古墳				○		30	坂戸城跡						○
14	長辺寺山古墳				○		31	富岡城跡						○
15	山ノ入古墳群				○		32	富谷城跡						○
16	坂戸古墳群				○		33	岩瀬城跡						○
17	犬田山神古墳群				○		34	小栗城跡						○

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

当向遺跡は、調査によって、奈良・平安時代を中心とした、縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であることが確認できた。また、覆土中からは旧石器時代の遺物も出土している。

遺構は、縄文時代の陥穴18基、弥生時代の竪穴住居跡5軒、古墳時代の竪穴住居跡43軒、土坑4基、奈良・平安時代の竪穴住居跡147軒、掘立柱建物跡18棟、溝跡2条、橋跡3条、土坑19基、中・近世の竪穴式住居1軒、掘立柱建物跡1棟、地下式墳8基、墓壇1基、火葬施設2基、溝跡10条、井戸跡3基、橋跡4条、道路跡1条、土坑10基、ピット群3か所、段切り遺構1か所、時期不明の方形竪穴状遺構1基、溝跡1条、橋跡1条、土坑342基が検出された。

遺物は、旧石器（尖頭器、石刃、剥片）、縄文土器片、弥生土器（壺、高坏）、土師器（坏、高台付椀、碗、高坏、罎、甕、甔、壺、手握土器、ミニチュア）、須恵器（坏、高台付坏、壺、盤、高登、壺、甕、提瓶、円面硯、平瓶、捏鉢）、土師質土器（鉢、内耳鍋、播鉢）、瓦、陶磁器片、土製品（球状土錘、支脚、紡錘車、羽口、仏像鋳型）、石器・石製品（敲石、磨石、鎌、砥石、棗玉、紡錘車、石製模造品、腰帯具）、鉄器・鉄製品（鎌、刀子、鉸具）、鉄滓、銅製品（銅鋼、腰帯具、和鏡）、古銭、人骨、獣骨、種子等が出土し、遺物収納コンテナ(60×40×20cm) 119箱に収納された。代表的な遺物としては、古墳時代の竪穴住居跡の主柱穴から出土した銅鋼や、奈良・平安時代の土坑から出土し、「新大領」のヘラ書きが見られる須恵器坏蓋がある。

第2節 基本層序

テストピットは、調査区南端のL17/8区に掘削した。地表面の標高は61.6mで、地表面から深度23mまで掘り下げた。

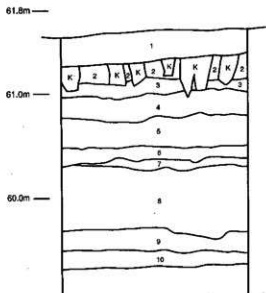
テストピットの土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから10層に細分される。

第1層は黒褐色を呈する腐植土層で、耕作土である。赤色粒子を少量含む。粘性・しまり共に弱い。層厚は23～30cmである。

第2層は暗褐色を呈するソフトローム層で、原植物の根が見られる。粘性・しまり共に弱い。層厚は7～14cmである。ゴボウトレンチャーによる攪乱を多く受けている。

第3層は褐色を呈するハードローム層で、粘性は弱いがしまりは普通である。層厚は7～15cmである。縦の割れ目（クラック）が発達している。一部にゴボウトレンチャーによる攪乱を受けている。

第4層は暗褐色を呈するハードローム層で、粘性は弱いがしまりは強い。層厚は20～25cmである。クラックが発達している。



第3図 基本土層図

第5層は暗褐色を呈するハードローム層で、粘性は弱いがしまりは強い。層厚は25~34cmである。第3・4層のようなクラックは発達していない。

第6層は鈍い黄褐色を呈するローム層で、粘土化した鹿沼バミスを少量含む。粘性・しまりは共に普通である。層厚は9~15cmで、クラックが発達している。

第7層は鈍い黄褐色を呈するローム層で、粘土化した鹿沼バミスを中量含む。粘性・しまりは共に普通である。層厚は3~10cmで、クラックが発達している。

第8層は黄褐色を呈する鹿沼層で、2~5mmの粘土化していない鹿沼バミスからなる。粘性は弱く、さらさらしており、しまりは普通である。層厚は55~70cmである。

第9層は黄褐色を呈する鹿沼層で、2~3mmの粘土化していない鹿沼バミスからなる。粘性は弱く、さらさらしており、しまりは普通である。層厚は12~22cmである。

第10層は黄褐色を呈する鹿沼層で、2~3mmの粘土化した鹿沼バミスからなる。粘性は強く、しまりは普通である。層厚は10~18cmである。下層は未掘のため本来の厚さは不明である。

住居跡・土坑等の遺構は、第3層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構

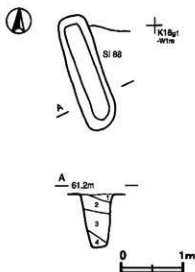
今回の調査では、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑18基を検出した。また、遺構外からは縄文時代の遺物が出土している。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

第60号土坑 (第4図)

位置 調査区中央部のK17g0区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第88号住居に掘り込まれている。



規模と形状 残存部は、長軸1.3m、短軸0.5mの長方形で、主軸方向はN-20°-Wである。深さは80cmで、短軸方向の断面は逆台形である。

覆土 4層からなる。全体的にしまりのある堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量
2	にぶい黄褐色	ローム粒子多量
3	暗褐色	ローム粒子少量
4	褐色	鹿沼バミス中量

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第4図 第60号土坑実測図

第78号土坑 (第5図)

位置 調査区中央部のL182区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

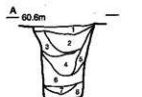
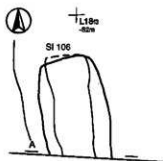
重複関係 第106号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため全容は不明であるが、長軸1.6m、短軸1mが確認され、残存部の形状から長方形と推定される。主軸方向はN-7°-Wである。深さは120cmで、短軸方向の断面は逆台形である。

覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	5 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック微量	6 褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子少量
4 にぶい黄褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	8 褐色	ロームブロック・産沼バミス少量



遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第5図 第78号土坑実測図

第100号土坑 (第6図)

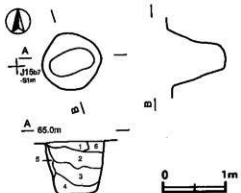
位置 調査区西部のJ15b7区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.2m、短径0.9mの楕円形で、長径方向はN-80°-Eである。深さは85cmで、底面は長楕円形、短軸方向の断面は逆台形である。

覆土 6層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック微量
5 褐色	ロームブロック少量
6 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

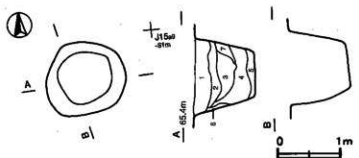
第6図 第100号土坑実測図

第101号土坑 (第7図)

位置 調査区西部のJ15a8区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 長径1.3m、短径1.2mの楕円形で、主軸方向はN-48°-Eである。深さは95cmで、短軸方向の断面は逆台形である。

覆土 7層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第7図 第101号土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-----------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 明褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 7 暗褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

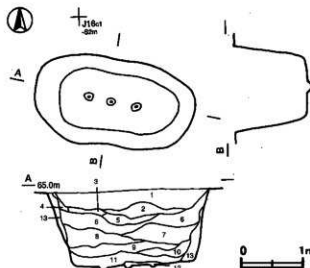
第111号土坑 (第8図)

位置 調査区西部のJ16c1区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 長径2.5m, 短径1.3mの長楕円形で、長径方向はN-78°-Wである。深さは120cmで、短径方向の断面は逆台形である。

ピット 3か所。深さは10cm前後で、長径方向に沿って1列に並んでいる。

覆土 13層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第8図 第111号土坑実測図

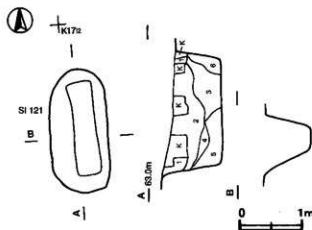
土層解説

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | 黒色粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 黒色粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・黒色粒子微量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・黒色粒子微量 |
| 10 暗褐色 | ロームブロック少量, 黒色粒子微量 |
| 11 褐色 | ロームブロック少量 |
| 12 明黄褐色 | 炭溜バミス多量, ロームブロック中量 |
| 13 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。3か所の小ピットには、逆茂木などを立てたものと考えられる。また、軸線と配置から、第208号土坑と対をなしていたと考えられる。

第205号土坑 (第9図)



第9図 第205号土坑実測図

位置 調査区中央部のK17z区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第121号住居に掘り込まれている。

規模と形状 上部に攪乱を受けている。長径2.0m, 短径0.9mの長楕円形で、長径方向はN-0°である。深さは90cmで、短径方向の断面は逆台形である。

覆土 7層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------|--------------|
| 1 におい黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |

- | | |
|----------|----------------|
| 3 灰黄褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |

- | | |
|--------|-----------|
| 6 灰黄褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第208号土坑 (第10図)

位置 調査区西部のJ164区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第30号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.3m、短軸1.5mの長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。深さは90cmで、短軸方向の断面は逆台形である。

ピット 1か所。深さ10cmほどである。

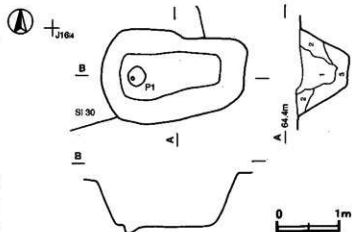
覆土 3層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・赤色粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・黒色粒子少量 |
| 3 褐色 | 黒色粒子中量、ローム粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。小ピットには、逆茂木などを立てたものと考えられる。また、軸線と配置から、第111号土坑と対をなしていたと考えられる。



第10図 第208号土坑実測図

第219号土坑 (第11図)

位置 調査区中央部のL17c7区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

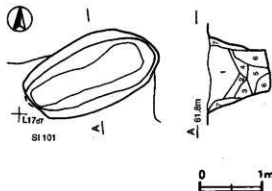
重複関係 第101号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.2m、短径1.2mの長楕円形で、主軸方向はN-60°-Eである。深さは100cmで、短径方向の断面は逆台形である。

覆土 7層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------|------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼バミス微量 |
| 7 にぶい褐色 | ロームブロック微量 |



第11図 第219号土坑実測図

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

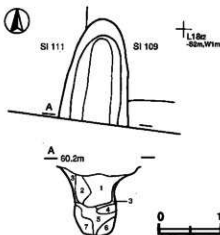
所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第221号土坑 (第12図)

位置 調査区中央部のL18f1区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第109・111号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南側が調査区域外に伸びているため全容は不明だが、長径1.6m、短径1.0mが確認され、残存部分の形状から長楕円形と推定される。主軸方向はN-5°-Eである。深さは100cmで、短径方向の断面は逆台形である。



覆土 7層からなる。全体的にしまりのある堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 暗褐色 | 炭化粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子中量、黒色粒子少量 |
| 6 | 黒褐色 | 炭沼パミス少量、ロームブロック微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子・炭沼パミス少量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

第12図 第221号土坑実測図

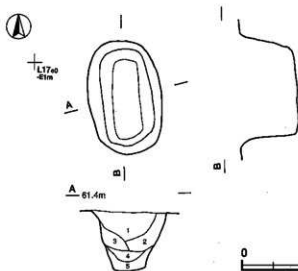
所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第244号土坑 (第13図)

位置 調査区中央部のL17e0区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 長径1.8m、短径1.2mの楕円形で、主軸方向はN-4°-Wである。深さは90cmで、短径方向の断面は逆台形である。

覆土 5層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



土層解説

- | | | |
|---|-----|----------------|
| 1 | 黒褐色 | 黒色粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量、しまり普通 |
| 3 | 暗褐色 | 黒色粒子中量、ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量、しまり強 |
| 5 | 暗褐色 | 黒色粒子中量、ローム粒子少量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第13図 第244号土坑実測図

第292号土坑 (第14図)

位置 調査区中央部のL18g5区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第310号土坑を掘り込み、第164号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.9m、短径1.6mの楕円形で、主軸方向はN-90°-Eである。深さは120cmで、短径方向の断面は逆台形である。

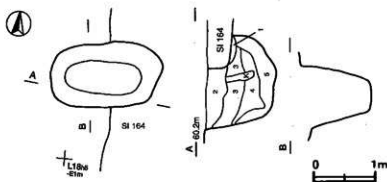
覆土 5層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|--------|-----------|
| 1 | にぶい黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 | にぶい黄褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。



第14図 第292号土坑実測図

第310号土坑 (第15図)

位置 調査区中央部のL18g5区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第164号住居と第292号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.4m、短軸0.6mの長方形で、主軸方向はN-24°-Eである。深さは50cmで、短軸方向の断面はU字形である。ピット 1か所。深さは10cmである。

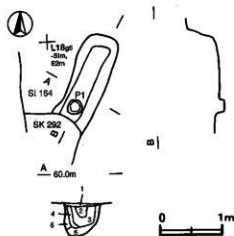
覆土 6層からなる。全体的にしまりのある堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|--------|-----------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 | にぶい黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。小ピットには、逆茂木などを立てたものと考えられる。



第15図 第310号土坑実測図

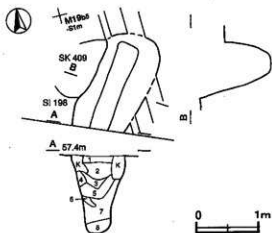
第410号土坑 (第16図)

位置 調査区東部のM19b5区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第198号住居と第409号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側が調査区域外に延びており、全容は不明であるが、長軸1.6m、短軸0.9mが確認され、残存部分の形状から長方形と推定される。主軸はN-36°-Eである。深さは110cmで、短軸方向の断面はU字形である。

覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。



第16図 第410号土坑実測図

土層解説

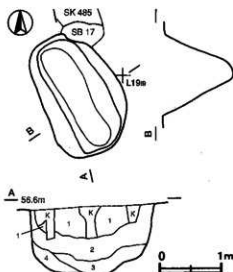
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 明褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片1点、土師器片9点、土師質土器片1点が出土しているが、攪乱による混入である。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

第418号土坑 (第17図)

位置 調査区東部のL198区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。



重複関係 第17号掘立柱建物、第485号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.0m、短径1.4mの長楕円形で、主軸方向はN-27°-Wである。深さは100cmで、短径方向の断面はV字形である。

覆土 4層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 近い黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック微量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

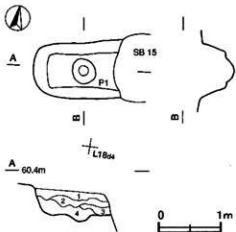
第17図 第418号土坑実測図

第430号土坑 (第18図)

位置 調査区中央部のL18c3区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第15号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 確認部分では長軸1.3m、短軸0.9mで、長方形と推定される。主軸方向はN-80°-Eである。深さは40cmで、短軸方向の断面は逆台形である。



ビット 1か所。深さ10cmである。

覆土 4層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 鹿沼パミス少量 |
| 4 黒褐色 | 鹿沼パミス少量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。小ピットには、逆茂木などを立てたと考えられる。

第18図 第430号土坑実測図

第446号土坑 (第19図)

位置 調査区東部のL192区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第176号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.2m, 短径1.1mの長楕円形で、長径方向はN-70°-Eである。深さは100cmで、短径方向の断面はU字形である。

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

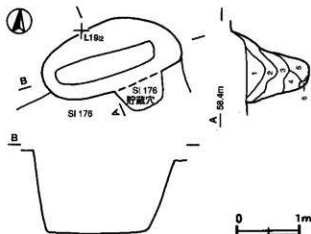
土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 明褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子少量 |
| 4 明褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子微量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子多量、炭化材微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。

また、軸線と配置から、第493号土坑と対をなすと考えられる。



第19図 第446号土坑実測図

第449号土坑 (第20図)

位置 調査区東部のL201区に位置し、斜面下部の低地に立地している。

重複関係 第440号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.2m, 短軸1.1mの隅丸長方形で、主軸方向はN-37°-Eである。深さは80cmで、短径方向の断面はU字形である。

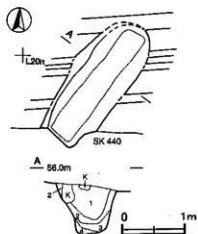
覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から、縄文時代の陥し穴と考えられる。



第20図 第449号土坑実測図

第493号土坑 (第21図)

位置 調査区東部のL19g1区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

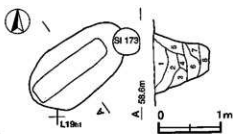
重複関係 第173号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.8m, 短径0.9mの楕円形で、長径方向はN-55°-Eである。深さは90cmで、短径方向の断面は逆台形である。

覆土 8層からなる。全体的にしまりがあり、レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |



第21図 第493号土坑実測図

5 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量
 6 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量，しまり強

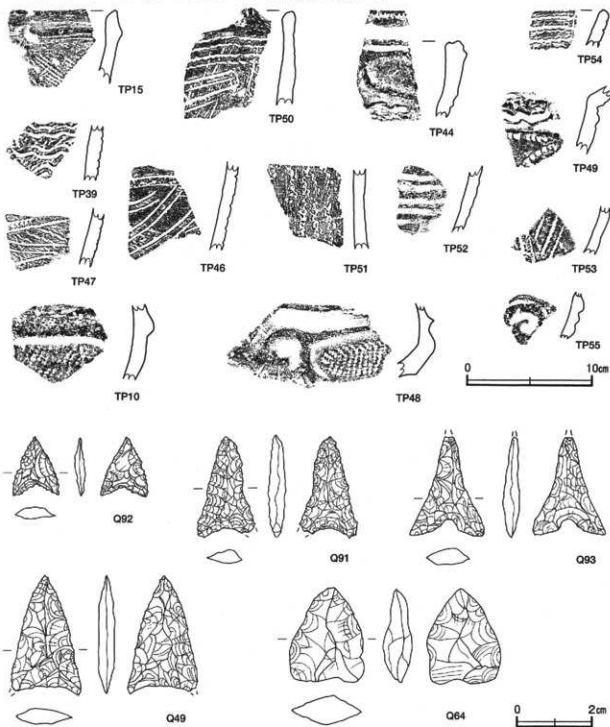
7 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
 8 暗褐色 鹿沼ガミス少量，ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 規模と形状から，縄文時代の陥し穴と考えられる。また，軸線と配置から，第446号土坑と対をなすと考えられる。

(2) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない縄文時代の主な遺物について，観察表で記述する。



第22図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	形状	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP10	縄文土器	深鉢	沈線に沿った隆帯。隆帯内に草節し及縄文	にぶい橙	石英・長石・雲母	普通	SI-25覆土	中期後半
TP15	縄文土器	深鉢	口縁部に隆帯貼付。下部に草節縄文Rしを施文	明赤褐	長石・雲母	普通	SI-124覆土	中期後半
TP39	縄文土器	深鉢	地文に燃承文。平截竹管による波状文を施文	にぶい橙	長石	普通	SI-121覆土	前期後半
TP44	縄文土器	深鉢	口唇に平截竹管による刺状文。口縁部に角形文を施文。下部に草節貼付	明赤褐	石英・長石・雲母	普通	SI-188覆土	中期前半
TP46	縄文土器	深鉢	地文に燃承文。平截竹管による平行沈線文と弧状文を施文	にぶい橙	長石・赤色粒子	普通	SK-97覆土	前期後半
TP47	縄文土器	深鉢	地文に燃承文。平截竹管による変形爪形文と平行沈線文を施文	にぶい橙	長石・雲母	普通	SK-97覆土	前期後半
TP48	縄文土器	深鉢	口縁部に先渚が連続した隆帯を貼付。口唇内を草節Rし縄文で光環	暗灰黄	石英・長石	普通	SI-41覆土	中期後半
TP49	縄文土器	深鉢	総行する人沈線文を施文。下部に隆帯を貼付。内側に角形文を施文	にぶい橙	石英・長石・赤色粒子	普通	SI-111覆土	中期前半
TP50	縄文土器	深鉢	波頂部に2本の刻み。地文に燃承文。口縁部を2段の変形爪形文で区画し。下部に平行沈線文	にぶい橙	石英・長石・雲母	普通	SI-108覆土	前期後半
TP51	縄文土器	深鉢	胴部に波状目紋文を施文	にぶい橙	石英・長石・赤色粒子	普通	SI-26覆土	前期後半
TP52	縄文土器	深鉢	胴部に横位の太沈線文を施文	にぶい橙	石英・長石	普通	SI-111覆土	早期後半
TP53	縄文土器	深鉢	胴部に斜位の変形爪形文を施文	明赤褐	石英・長石	普通	SI-26覆土	前期後半
TP54	縄文土器	深鉢	口縁部に横位の変形爪形文を施文	橙	石英・長石・雲母	普通	SI-26覆土	前期後半
TP55	縄文土器	深鉢	隆帯による渦巻文	にぶい橙	石英・長石	普通	SI-20覆土	中期後半

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q48	甌	3.2	1.9	0.45	2.00	チャート	断面レンズ状、基部に抉り、肩部欠損	SI-69覆土	PI-104
Q64	甌	2.5	2.0	0.72	2.75	チャート	断面菱形	SI-124覆土	
Q91	甌	2.7	1.5	0.42	1.30	チャート	基部に抉り、肩部欠損	SE-16覆土	
Q92	甌	1.55	1.25	0.25	0.28	黒曜石	断面レンズ状、基部に抉り	SI-11表採	PL-104
Q93	甌	2.1	2.0	0.45	1.14	チャート	断面レンズ状、基部に明瞭な抉り	表採	

2 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡5軒を検出した。また、遺構外からも弥生時代の遺物が出土している。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第93号住居跡 (第23図)

位置 調査区中央部のK169区に位置し、屋根上の平坦部に立地している。

重複関係 第138号住居・第246・247・248・249号土坑に掘り込まれている。

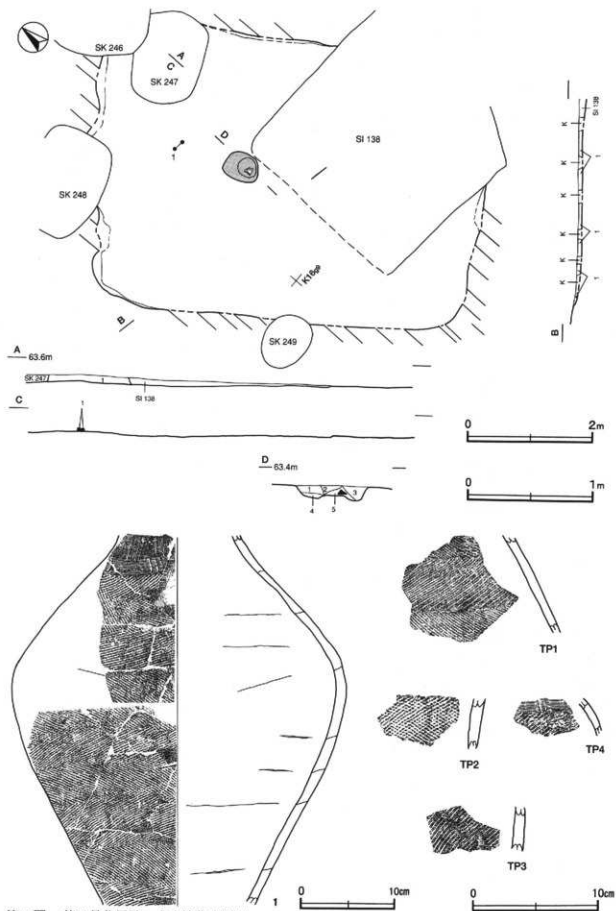
規模と形状 南西側の塚が削平されているが、残存部から長軸6.3m、短軸4.5mの長方形と推定され、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は2~10cmで、外傾して緩やかに立ち上がっている。

床 ほほは平床で、かの周辺がやや踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに設けられ、長径55cm、短径40cmの楕円形を呈し、皿状にくぼんでいる。火床部は地山のローム土が赤変硬化しており、中央から被熱した灰石が出土している。また、弥生土器の小片が灰の覆土から出土している。

炉土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量		



第23图 第93号住居跡・出土遺物実測図

覆土 単一層である。覆土は薄く、攪乱も激しいため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片50点（I1線部1、胴部47、底部2）、炉石1点の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片7点、後世の耕作などで混入したと考えられる土師器片118点（坏類58、甕類60）、須恵器片10点（坏類3、甕類7）、陶器片8点（碗）が出土している。弥生土器片は炉の北側に多く見られ、1は破片の状態で床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。

第93号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	弥生土器	甕	—	(38.6)		胴部に磨砕状工具による縦状文、胴部に附加条一種附加2条の縄文を羽状構成	にぶい褐色	石英・長石・石灰	普通	床面	10%

番号	種別	器種	文様の特徴			色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	胴部に附加条一種附加2条の縄文を羽状構成			にぶい褐色	石英・長石・雲母	普通	覆土下層	
TP2	弥生土器	壺	胴部に附加条一種附加2条の縄文を横位・縦位2方向から並文			にぶい褐色	石英・長石	普通	覆土下層	
TP3	弥生土器	壺	胴部に附加条一種附加2条の縄文を並文			にぶい褐色	石英・長石	普通	覆土下層	
TP4	弥生土器	壺	胴部に磨砕状工具による縦状文、下部に附加条一種附加2条の縄文を並文			にぶい褐色	石英・長石	普通	覆土下層	

第146号住居跡（第24図）

位置 調査区中央部のK16g4区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第39号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.0m、短軸3.7mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は15~25cmで、わずかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、広範囲に踏み固められている。

炉 中央部の西寄りに設けられ、長径60cm、短径40cmほどの楕円形を呈し、皿状にくぼんでいる。覆土は15cmほど堆積しているが、火床部はあまり硬化していない。

炉土層解説

- 1 灰黄褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量 2 にぶい黄褐色 炭化物・焼土粒子微量

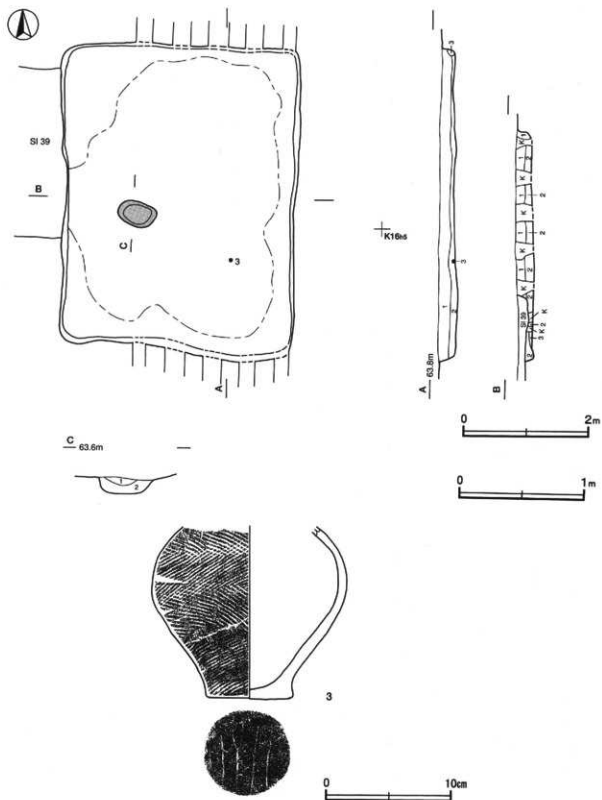
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 3 明褐色 ローム粒子多量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片13点（胴部12、底部1）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片3点、後世の耕作などで混入したと考えられる土師器片57点（坏類25、甕類32）、須恵器片2点（坏類1、甕類1）、陶器片4点が出土している。3は南東部の床面から横位で出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第24図 第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
3	弥生土器	甕	—	(13.6)	6.8	胴部に附部帯一種附部2本の横文を羽状構成。底部木葉痕。	にぶい橙	石英・長石・雲母	普通	床面	50% PL84

第161号住居跡 (第25・26図)

位置 調査区南部のL18h7区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第167・168号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南が調査区域外に延びているため、全形は不明である。確認されたのは長軸4.0m、短軸3.8mで、方形もしくは隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-3°-Wである。壁高は10~12cmで、外傾して緩やかに立ち上がっている。

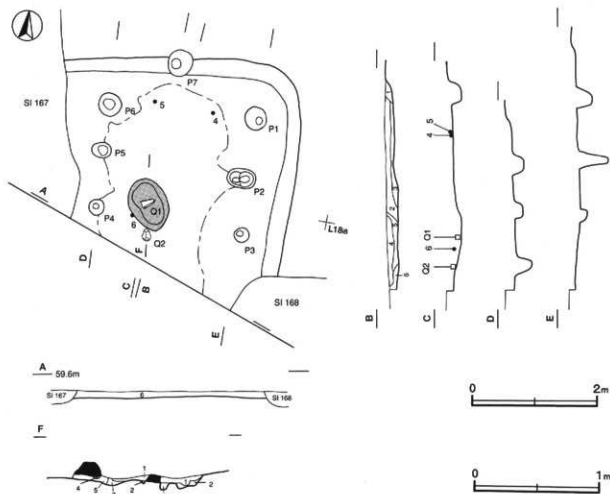
床 はほぼ平坦で、炉を中心にして中央部が踏み固められている。

炉 長径70cm、短径40cmの楕円形で、床面を皿状にわずかに掘りくぼめてある。火床部は赤変硬化しており、焼土が厚く堆積している。火床部中央から被熱した炉石が出土している。

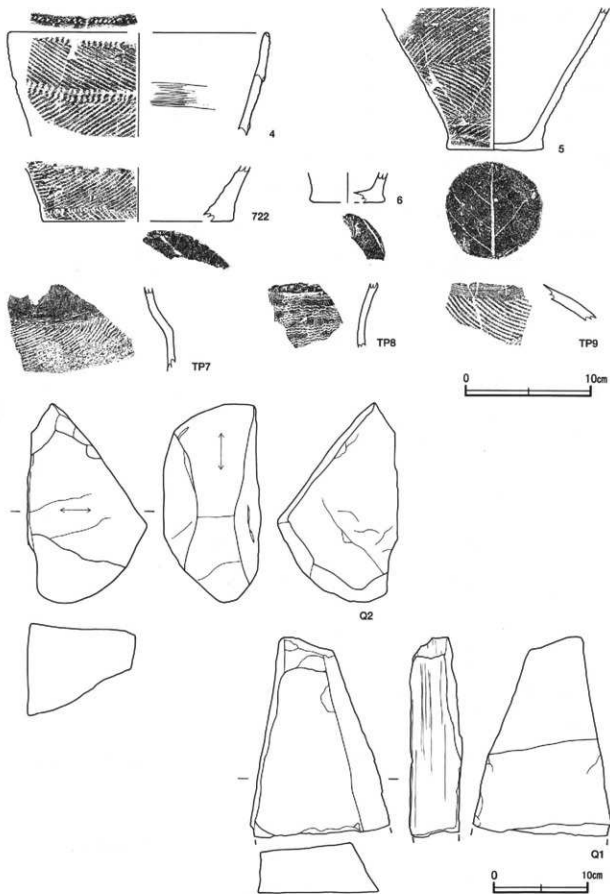
炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|----------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量 | | |

ピット 7か所。P1~P6は、配置から柱穴と考えられる。P7は北壁中央に位置しているが、性格は不明である。



第25図 第161号住居跡実測図



第26图 第161号住居跡出土遺物実測図

覆土 6層からなる。西の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量	4	黒	褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
2	暗	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	5	黒	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3	褐	色	ロームブロック少量	6	黒	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片87点（I1線部8、胴部75、底部4）、石製品1点（砥石）、珪石1点の他、後世の耕作などで混入したと考えられる土師器片16点（環頸12、燒頸4）、須惠器片1点（環）、陶器片1点が出土している。4は逆位、5は横位でそれぞれ床面より出土しており、本跡の廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、Q1は炉の中央から、Q2は炉の南側から出土している。

所見 確認できた柱穴の配置と数から、8～10本の柱を持っていたと推定される。時期は、出土土器から後期後半と考えられる。

第161号住居跡出土遺物観察表（第26回）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
4	弥生土器	壺	[20.7]	[8.2]		口縁部・肩部に施文、口部・腹部に一種類の施文を施文、腹部に施文を施文	に灰褐色	石英・長石・雲母	普通	床面	10% P1.84
5	弥生土器	壺		(11.3)	7.6	胴部に附加条一種類の施文を施文、底部に施文を施文	に灰褐色	石英・長石・雲母	普通	床面	10% P1.84
6	弥生土器	壺	(2.4)	[5.8]		胴部に附加条一種類の施文を施文	に灰褐色	赤色粒子・雲母	普通	床面	5%
722	弥生土器	壺	(4.3)	[15.2]		胴部に附加条一種類の施文を施文	明赤褐色	長石・赤色粒子	普通	覆上下層	5%

番号	種別	器種	文様の特徴			色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP7	弥生土器	壺	胴部に無文帯、胴部に附加条一種類の施文を施文			に灰褐色	石英・長石	普通	覆土下層	
TP8	弥生土器	壺	胴部に縦沈帯を区画、2～3条を1単位とする横丸底状文で光沢			に灰褐色	石英・長石・白色粒子	普通	覆土下層	
TP9	弥生土器	壺	胴部に附加条一種類の施文を施文			に灰褐色	石英・長石	普通	覆上下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	珪石	(21.4)	14.6	5.5	(1980)	砂岩	被熱痕有り	炉内	
Q2	砥石	21.1	12.5	10.3	2930	砂岩	砥面2面	床面	

第169号住居跡（第27回）

位置 調査区東部のL1819区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第151・170号住居、第26・27号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東壁が削平されているため全形は不明である。確認できたのは長軸4.8m、短軸3.8mで、隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-21°-Wである。壁高は12cmで、外傾して緩やかに立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉を中心にして中央部が狭み囲まれている。

炉 中央部やや東寄りにわずかに焼土の痕跡が見られるが、第170号住居の掘り込みでほとんど破壊されたものと考えられる。

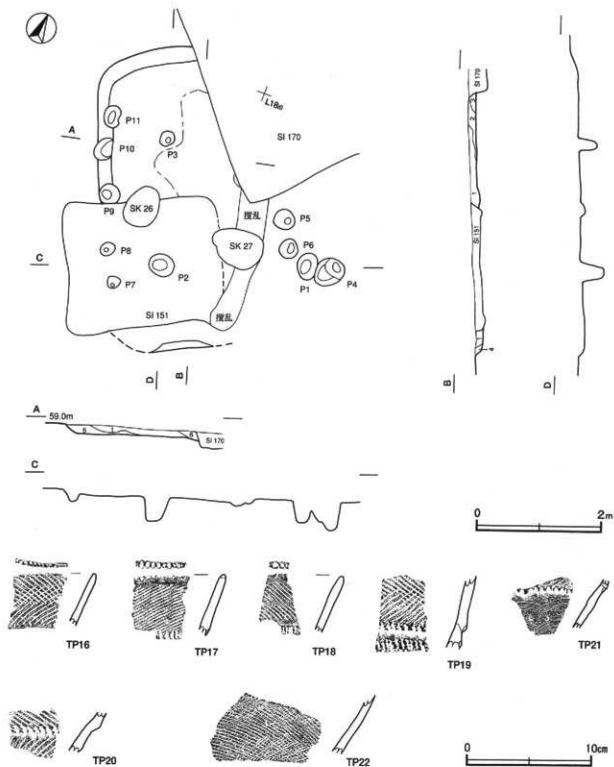
ピット 11か所。P1～P3は深さ30～50cmで、主柱穴である。他に対応する主柱穴は確認できなかった。P7～P11は深さ10～30cmで、配置から柱穴と推定されるが、西壁以外では確認できなかった。

覆土 6層からなる。西の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗	褐色	ローム粒子少量	3	暗	褐色	ローム粒子微量
2	黒	褐色	ローム粒子微量	4	暗	褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 弥生土器片27点(口縁部2, 胴部25)の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片1点が出土している。出土した弥生土器は何れも細片で, 覆土中に散在している。また, 重複する第170号住居からは, 本跡を掘り込んだ際に掘り起こされ, 埋没時に混入したと考えられる弥生土器片7点が出土している。
所見 時期は, 出土土器から後期後半と考えられる。



第27図 第169号住居跡・出土遺物実測図

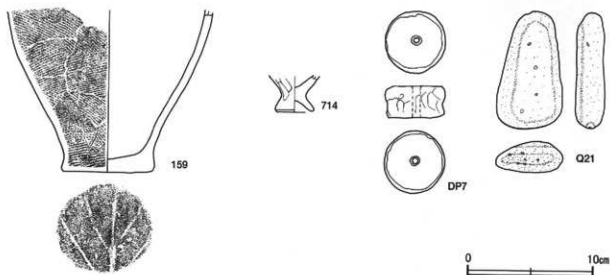
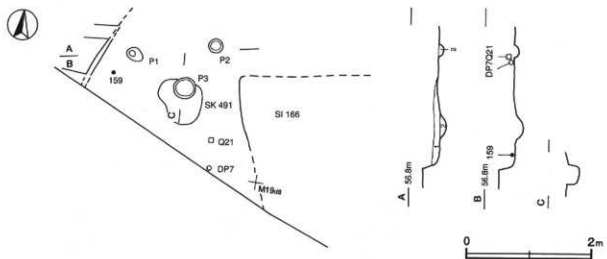
第169号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	種別	器種	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP16	弥生土器	壺	口唇部に縄文を施文。口縁部附加糸一種附加2条の縄文を羽状構成	にぶい褐色	長石・雲母	普通	覆土中	
TP17	弥生土器	壺	口唇部に縄文を施文。口縁部附加糸一種附加2条の施文。輪積み部分に縄文を押し	暗褐色	長石・雲母	普通	覆土中	
TP18	弥生土器	壺	口唇部に縄文を施文。口縁部附加糸一種附加2条の施文。輪積み部分に縄文による刺突	灰褐色	長石・雲母	普通	覆土中	
TP19	弥生土器	壺	附加糸一種附加2条の縄文を羽状構成。輪積み部分に縄文原体による刺突	にぶい褐色	石英・長石	普通	覆土中	
TP20	弥生土器	壺	附加糸一種附加2条の縄文を羽状構成。輪積み部分に縄文原体による刺突	橙	石英・長石	普通	覆土中	
TP21	弥生土器	壺	口縁部に附加糸一種附加2条の施文。下端に縄文原体による刺突。頸部に8本の腰曲状工具による連続文	にぶい褐色	長石	普通	覆土中	
TP22	弥生土器	壺	胴部に附加糸一種附加2条の縄文を羽状構成	にぶい褐色	石英・長石	普通	覆土中	

第202号住居跡 (第28図)

位置 調査区東側のM19c7に位置し、斜面裾部に立地する。

重複関係 第166号住居、第491号土坑に掘り込まれている。



第28図 第202号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状 南は調査区域外に延びており、全体に攪乱や削平を受けているため、全形は不明である。西壁のみ90cmほどの範囲が残存している。

床 ほぼ平坦である。

ピット 3か所。深さは、P 1が15cm、P 2が10cm、P 3が20cmである。性格は不明である。

覆土 2層からなる。覆土が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック散在

2 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 弥生土器片62点（口縁部2，胴部58，底部2），石器1点（敲石），土製品1点（紡錘車）の他、後世の耕作などで混入したと考えられる土師器片45点（坏類6，甕類34，高坏5），須恵器片3点（坏類）が出土している。159は西壁際の床面から出土している。Q21は使用面に赤色顔料が付着した状態で、覆土下層より出土しているが、本跡に伴うかどうかは不明である。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。

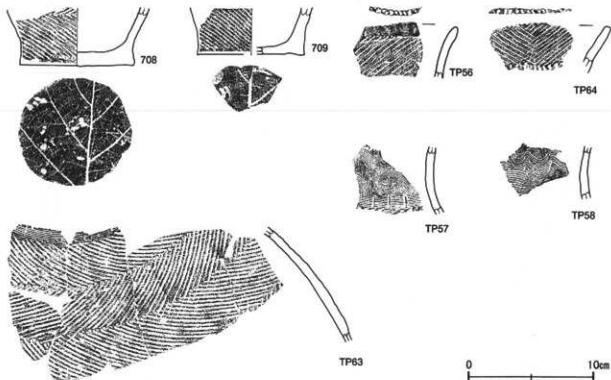
第202号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
159	弥生土器	甕	—	(129)	7.0	胴部附加委一種附加2委の縄文で羽状構成。底部木葉痕	橙	石英・長石・雲母	普通	床面	20%
714	弥生土器	高坏	—	(30)	2.9	外面筋ナデ	にふい粉	長石・雲母	普通	覆土中	10%✓

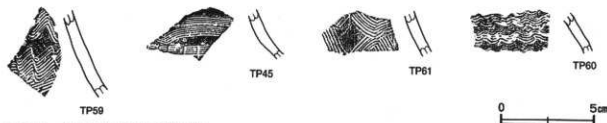
番号	器種	長さ(横)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D17	紡錘車	4.8	—	2.5	79.6	土	側面筋頭によるナデ，孔径0.5円筒形	覆土中	PL103
Q21	敲石	9.3	5.3	2.4	174.9	安山岩	打突面摩耗	覆土下層	赤色顔料付着

(2) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない弥生時代の主な遺物について、実測図と観察表で記載する。



第29図 遺構外出土遺物実測図(1)



第30図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第29・30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
708	弥生土器	壺	—	(4.6)	9.0	附加糸一種附加2条の羽状模文。底部本葉状	にぶい黄	石英・長石・雲母	普通	表採	5%
709	弥生土器	壺	—	(3.7)	[7.9]	附加糸一種附加2条の縄文。底部本葉状	にぶい赤黄	石英・長石・雲母	普通	段切り遺構	5%

番号	種別	器種	文様の特徴			色調	胎土	焼成	出土位置	備考
TP45	弥生土器	壺	頸部に10本単位の櫛歯状工具による連弧文。胴部との境に縄状文 口唇部に縄文原体を押圧。口縁部に無文帯を有し、下部は 附加糸一種附加2条の縄文			明赤褐	石英・長石	普通	SI-196覆土	
TP56	弥生土器	壺	頸部に8本の櫛歯状工具による連弧文で区画。頸部に櫛歯状 工具による連弧文。胴部に附加糸一種附加2条の縄文			明黄褐	石英・長石・雲母	普通	SI-97覆土	
TP57	弥生土器	壺	頸部に10本単位の櫛歯状工具による波状文			にぶい黄	石英・長石	普通	SI-200覆土	
TP58	弥生土器	壺	頸部に10本単位の櫛歯状工具による波状文			にぶい黄	石英・長石・雲母	普通	SI-200覆土	
TP59	弥生土器	壺	頸部に10本単位の2組の櫛歯状工具による波状文			にぶい黄	石英・長石・雲母	普通	SI-200覆土	
TP60	弥生土器	壺	頸部に4本単位の櫛歯状工具による波状文			にぶい黄赤	石英・長石・雲母	普通	SI-175覆土	
TP61	弥生土器	壺	頸部に櫛歯状工具による山形文			にぶい黄赤	長石・赤色矽子・雲母	普通	SI-178覆土	
TP63	弥生土器	壺	頸部下に櫛歯状工具による連弧文。胴部に附加糸一種附加 2条の羽状模文			にぶい黄赤	石英・長石・雲母	普通	表採	
TP64	弥生土器	壺	口唇部に縄文原体を押圧。口縁部附加糸一種附加2条の羽 状模文。口縁部下側に縄文原体を押圧			にぶい黄	石英・長石・雲母	普通	表採	

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡44軒、土坑4基を検出した。また、遺構外からも古墳時代の遺物が出土している。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第20号住居跡 (第31図)

位置 調査区西部のJ16d4区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

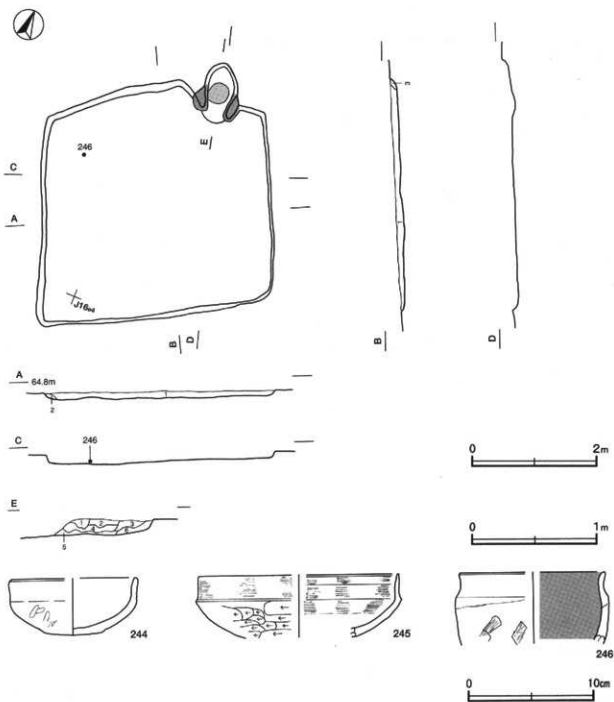
規模と形状 長軸3.8m、短軸3.7mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は10~15cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。竈付近の北東コーナーが住居内にせり出している。

床 ほほ平坦で、硬化面は確認できなかった。

竈 北壁の東コーナー寄りに位置している。規模は焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅は80cmである。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込み、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落し、竈内に構築材の砂質粘土が堆積している。袖部は、砂質粘土を地上上に貼り付けて構築されている。火床部は皿状にわずかにくぼみ、焼土が3cmほど堆積している。

甌土層解説

1 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック微量	5 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量



第31図 第20号住居跡・出土遺物実測図

覆土 3層からなる。北西側から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|------|--------------------|------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量 | 3 褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量，炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片86点(坏類23, 甕類63)の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片1点, 後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片1点が出土している。244は北東部, 245は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。246は北西部の床面から出土している。

所見 北東コーナーの張り出しは, 位置と形状から竈脇の棚状施設として利用された可能性がある。時期は,

出土土器から6世紀前半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表 (第311図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
244	土師器	環	[10.0]	4.3	[4.8]	長石	にぶい褐色	普通	体部内外面ナデ	覆上下層	20%
243	土師器	環	[16.0]	(5.0)	-	長石・灰色粒子・白色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	覆上下層	15%
246	土師器	碗	[11.6]	(5.8)	-	長石	にぶい褐色	普通	体部内外面ナデ	床面	5% 輪模痕

第25号住居跡 (第32・33図)

位置 調査区西部のJ163区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸4.7m、短軸4.3mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は21~31cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は竈部分を除き全周しており、断面U字形である。

竈 北端中央部に位置し、規模は焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅110cmである。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込み、ゆるやかに外傾して立ち上がっている。天井部は砂質粘土で構築され、奥行き30~50cm、厚さ20cmほどが煙道部に残存しているが、そのほかは前方へ向けて崩落している。袖部は、砂礫混じりの粘土を芯材、石材を補強材とし、外側に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は、床面が凹状にわずかにくぼみ、焼土が厚く堆積している。天井部付近から耳環が出土している。

竈土層解説

1	にぶい褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	15	灰黄褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子微量
2	灰褐色	砂質粘土粒子多量	16	赤褐色	焼土ブロック微量
3	にぶい褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子中量	17	暗赤褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
4	褐灰色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子中量	18	暗褐色	ローム粒子微量
5	灰黄褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	19	灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
6	黒褐色	焼土粒子微量	20	褐灰色	砂質粘土粒子微量
7	赤褐色	焼土粒子多量	21	にぶい黄褐色	焼土粒子少量
8	灰褐色	粘土粒子中量	22	暗褐色	焼土粒子微量
9	暗赤褐色	焼土粒子中量、しまり弱	23	褐灰色	粘土粒子中量、小礫少量、焼土粒子微量
10	暗赤褐色	焼土粒子中量、しまり中	24	灰褐色	砂質粘土粒子中量
11	褐灰色	粘土粒子多量	25	褐灰色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量
12	褐灰色	砂質粘土粒子少量	26	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
13	褐灰色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	27	暗赤褐色	焼土粒子微量
14	褐灰色	焼土ブロック・砂質粘土粒子中量			

ピット 7か所。P1~P5は深さ40~70cmで、配置から支柱穴である。P4は覆土の様子からP5より新しく、P5を作り替えたものと考えられる。第2層がP5の土層である。P6・P7は南側中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられるが、新旧関係は不明である。

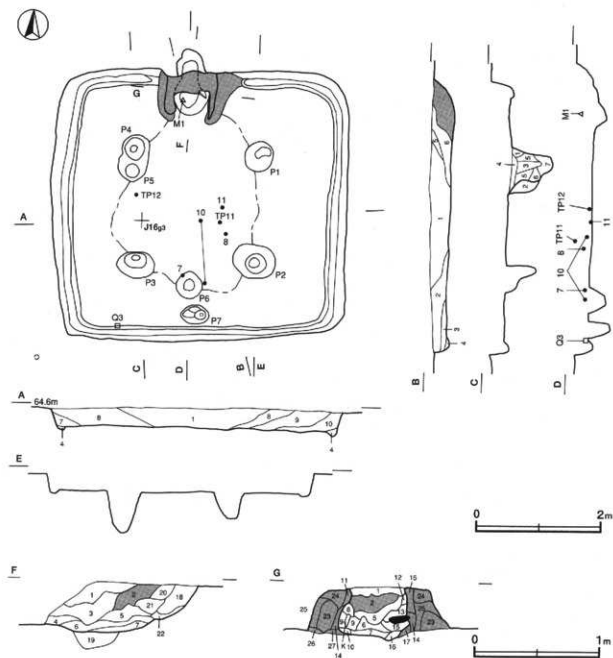
ピット土層解説 (P4・P5)

1	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	5	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量
2	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	6	褐色	ローム粒子中量
3	褐色	ローム粒子微量	7	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
4	褐色	ローム粒子少量			

覆土 10層からなる。壁際から順に埋没した自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	3	褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	4	褐色	ローム粒子微量

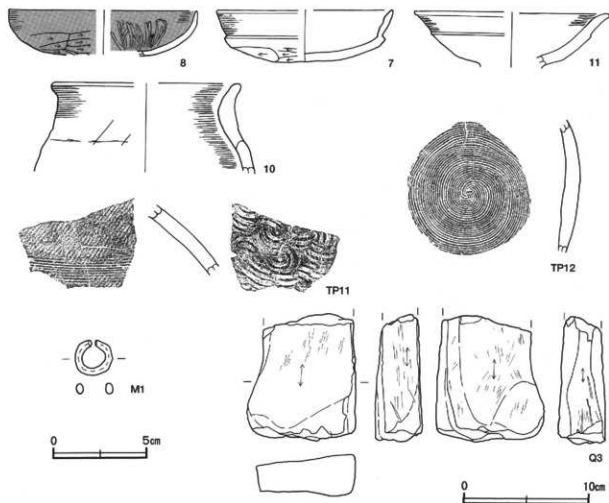


第32図 第25号住居跡実測図

- | | | | |
|------|------------------|---------|----------------|
| 5 褐色 | ローム粒子少量 | 8 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 9 におい褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 7 褐色 | ローム粒子中量 | 10 褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片289点（坏類42，甕類238，高坏9），須恵器片7点（坏類1，甕類5，提瓶1），石器1点（砥石），銅製品1点（耳環）の他，埋没時に混入したと考えられる縄文土器片5点が出土している。7・11・TP12・Q3は床面から，M1は竈上から出土していることから，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第33図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	坏	[139]	4.1	-	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面下部へラ削り	床面	30%
8	土師器	坏	[150]	(3.6)	-	石英・長石・雲母	黒褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラ磨き	覆土中層	10%
10	土師器	甕	[146]	(7.1)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面斜め方向のナデ	覆土下層	輪積板
11	土師器	高坏	[156]	(4.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	坏部外面ナデ	床面	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP11	須志器	甕	長石	灰	普通	外面斜位平行叩き、内面同心円状の当て具痕	覆土中層	
TP12	須志器	提軀	黒色粒子	黄灰	普通	外面様目整形、内面へラナデ、指痕押捺	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	(10.2)	8.6	4.0	(427.0)	粘板岩	砥面4面	床面	

番号	器種	外径	内径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	耳環	1.9	1.2	0.58	6.05	銅	鍍金	甕	PL106

第30号住居跡 (第34・35図)

位置 調査区西部のJ16b3区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第208号土坑を掘り込み、第28・29・31・150号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.3m、短軸5.2mの方形と推定され、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は8-10cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈の南側が踏み固められている。

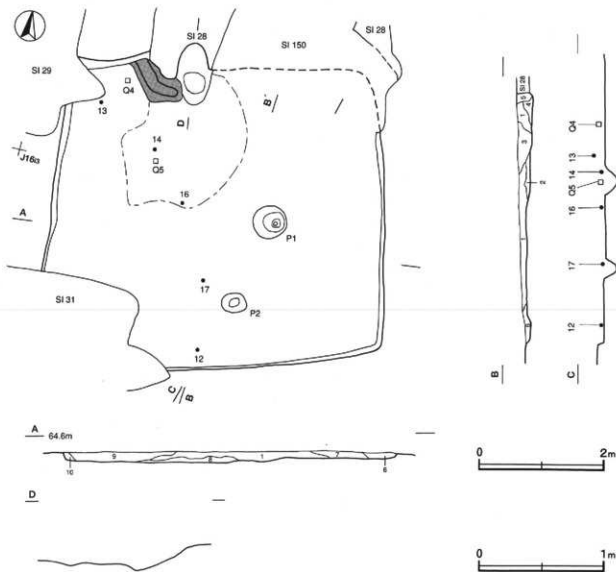
竈 北壁の中央やや西寄りに位置している。竈上部及び右袖部は、第28・150号住居の掘り込みで破壊され、左袖部の痕跡と考えられるロームの高まりがある。焚き口には皿状のわずかな掘り込みが見られ、煙道部は緩やかに外傾して立ち上がっている。

ピット 2か所。P1は深さ約20cm、P2は深さ約15cmで、性格は不明である。主柱穴は確認されなかった。

覆土 10層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子微量 |



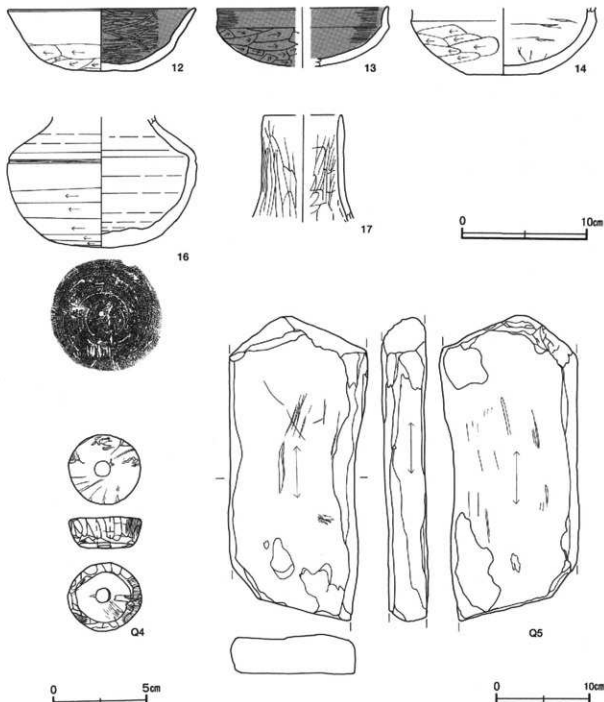
第34図 第30号住居跡実測図

- 5 褐色 rome粒子少量
 6 黒褐色 rome粒子微量
 7 褐色 romeブロック微量

- 8 褐色 romeブロック少量
 9 暗褐色 rome粒子微量
 10 褐色 rome粒子中量

遺物出土状況 土師器片154点(坏類52, 甕類97, 高坏4, 壺1), 須恵器片17点(坏類4, 甕類11, 壺2), 石器2点(紡錘車1, 砥石1)の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片1点が出土している。16は正位で床面から, 17も床面から出土しており, いずれも住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。12は南壁付近の覆土下層から逆位で, Q4は竈西の壁際から出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第35図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表 (第35回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
12	土師器	杯	11.8	5.0	-	雲母	灰黄褐色	普通	外部外面へう割り、内面へう割り	覆土下層	100%	PL84
13	土師器	杯	13.5	4.6	-	石英・長石・赤色粘土・雲母	にぶい赤褐色	普通	外部外面へう割り、内面ナメ	覆土中層	50%	
14	土師器	杯	-	5.3	6.0	石英・赤色粘土・雲母	にぶい赤褐色	普通	外部外面へう割り後ナメ、内面ナメ、当て具痕	覆土下層	50%	
16	須恵器	壺	-	10.6	-	石英・長石	灰	普通	外部外面へう割り、下部から外部内面へう割り、口の直縁に接合部内面へう割る、内面に接合部	壺面	50%	
17	土師器	壺	5.2	8.4	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	外部外面へう割り、内面に接合部	壺面	10%	

番号	器種	口径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	紡錘車	3.9-2.9	1.6	0.8	30.3	帆布	円錐台形、側面削り	覆土下層	PL104

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	(32.2)	14.7	4.8	(3560.0)	粘板岩	砥面3面	覆土下層	

第36号住居跡 (第36・37回)

位置 調査区西部のK16b4区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第5号溝、第47土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.8m、短軸5.6mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は20-35cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

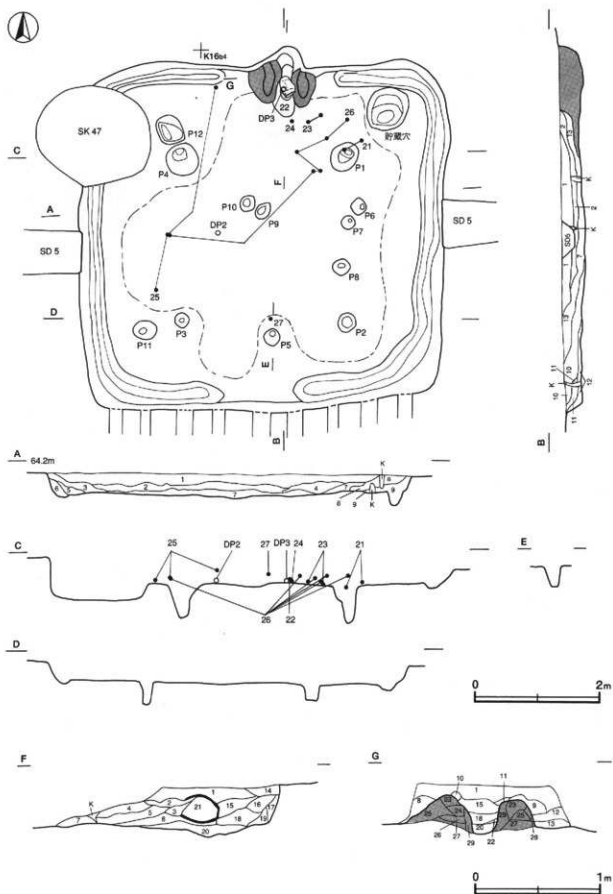
床 ほぼ平坦で、出入り口付近から竈前までよく踏み固められている。壁溝は竈・出入り口付近を除き巡っており、断面U字形である。

竈 北壁中央やや東寄りに位置し、規模は焚き口部から煙道部先端まで110cm、袖部幅110cmである。天井部は崩落し、砂質粘土を主とする構築材が前方へ流出している。袖部は残りがよく、火床部に面した内壁は赤変している。竈内から土製の支脚と土師器蓋が前方へ倒れた状態で出土している。

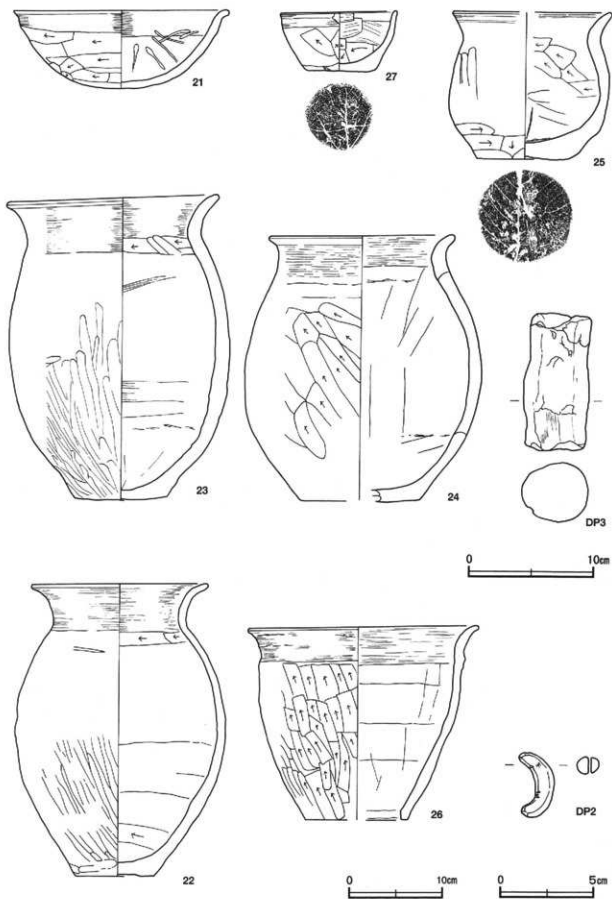
覆土層解説									
1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	15	褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量				
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	16	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子少量、炭化粒少量				
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	17	褐色	ローム粒子中量				
4	灰褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量	18	灰黄褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量				
5	褐色	砂質粘土粒子中量、ロームブロック微量	19	褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量				
6	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	20	暗灰黄色	砂質粘土粒子中量				
7	にぶい黄褐色	ロームブロック少量	21	褐色	砂質粘土粒子微量				
8	褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	22	褐色	砂質粘土粒子少量				
9	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	23	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量				
10	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量、ロームブロック少量	24	灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量				
11	褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	25	灰褐色	砂質粘土粒子多量、炭化粒微量				
12	褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・ローム粒子微量	26	暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量				
13	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	27	明褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量				
14	暗褐色	ローム粒子・炭化物微量	28	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量				
			29	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量				

ピット 12か所。P1~P4は深さ30-65cmの主柱穴である。P1とP4は掘り方が他の2つより大きい。P5は深さ32cmで、南側中央に位置していることから、出入り口施設に伴うものと考えられる。他のピットの性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、径70cmの円形で、深さ28cmである。北側に段を持っている。



第36图 第36号住居跡実測図



第37图 第36号住居跡出土遺物実測図

覆土 13層からなる。第13層は竈から流出した覆土である。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐	色	ロームブロック・焼土粒・炭化物微量	8	褐	色	ロームブロック・焼土粒子微量
2	褐	色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量	9	褐	色	ロームブロック・炭化物微量
3	褐	色	ローム粒子微量	10	暗	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
4	褐	色	粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	11	褐色	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
5	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量	12	明	褐色	ローム粒子・炭化物・砂質粘土粒子微量
6	褐	色	ローム粒子少量、炭化物微量	13	褐	色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
7	暗	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量				

遺物出土状況 土師器片360点（坏類63、甕類295、高坏2）、須恵器片3点（甕類3）、土製品3点（支脚2、勾玉1）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片5点が出土している。土師器甕類の多くは、竈や貯蔵穴周辺の床面や覆土下層から出土している。22・DP3は竈内から、23・24は竈前から運来で、DP2は中央の床面付近から出土していることから、これらは住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。26は破片の状態で覆土下層の広い範囲に散在していることから、埋没過程の早い段階で投げ込まれたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
21	土師器	坏	17.2	6.3	-	石英・長石・赤色 粘土・雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ 後へつぎ	覆土中層	50% PL84
22	土師器	甕	18.6	31.2	8.1	石英・長石・雲母	明褐	普通	体部外面上部へラ削り後ナデ、 下部へラ削り後ナデ、内面ナデ	竈	90% PL80
23	土師器	甕	16.6	24.3	7.2	石英・長石・赤色 粘土・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下部へラ削り、内面 へラナデ底面磨き	床面	80% PL80
24	土師器	甕	14.5	21.2	9.4	長石・赤色 粘土	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り後ナデ、内 面へラナデ	床面	60% 輪積痕 PL80
25	土師器	甕	12.4	11.7	7.4	石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り後ナデ、底 部木炭痕	覆土下層	55% PL80
26	土師器	瓶	24.0	20.8	10.6	石英・長石・赤色 粘土	褐	普通	体部内面ナデ、底部内面削り	覆土下層	50% 輪積痕 PL91
27	土師器	小形瓶	9.1	4.9	5.6	長石・赤色 粘土	にぶい褐	普通	体部内外面へラ削り後ナデ、 底部木炭痕	覆土下層	50%

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP2	勾玉	3.9	1.8	0.9	4.7	土	ナデ、孔径0.2	床面	PL103
DP3	支脚	10.9	3.2	4.8	340.0	土	ナデ、焼痕僅有り	竈	PL103

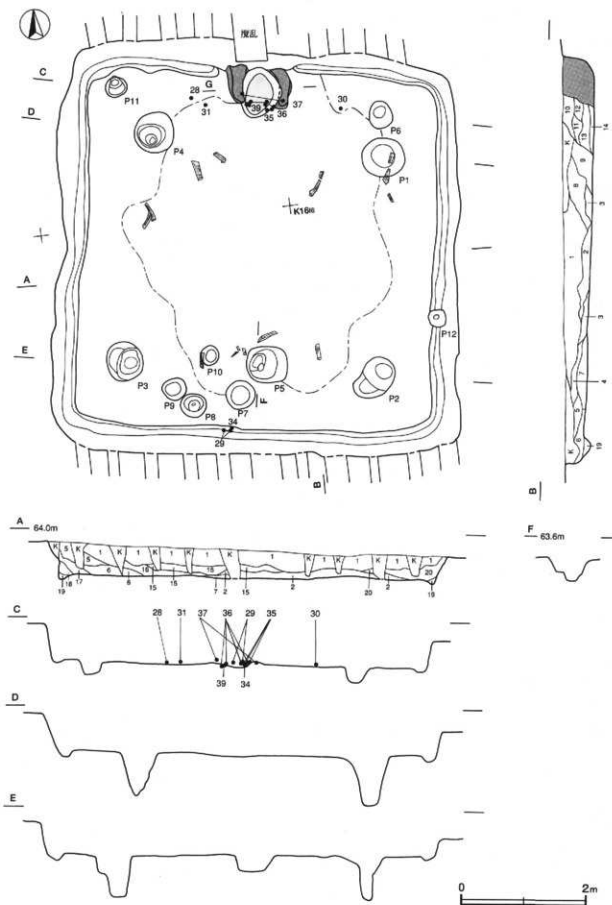
第37号住居跡（第38～41図）

位置 調査区西部のK16e5区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 長軸6.6m、短軸6.3mの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は28～58cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が出入り口付近から竈前まで踏み固められている。壁溝は竈部分を除き巡っており、断面U字形である。

竈 北壁の中央部に位置しているが、攪乱により上部が破壊されている。残存部の規模は、焚き口部から煙道部先端まで80cm、袖部幅は100cmである。袖部は、地上上に若干の砂質粘土が残り、補強材と考えられる土師器甕が両袖付近から出土している。火床部には焼土が厚く堆積しており、長期間使用されたものと考えられる。また、火床部上から3個体分の土師器甕が破片の状態で出土している。第6層は掘り方の土層である。



第38图 第37号住居跡实测图(1)



第39図 第37号住居跡実測図(2)

覆土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------|----------|--------------------|
| 1 におい青褐色 | 砂質粘土粒子中量, 炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 におい青褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土ブロック少量 | 5 におい青褐色 | 焼土ブロック少量, 砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 明るい赤褐色 | 焼土ブロック多量 |

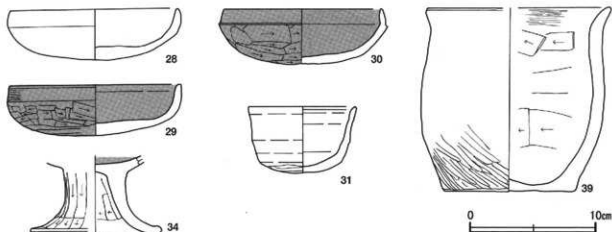
ピット 12か所。P 1～P 4は、深さ70～80cmで主柱穴である。P 8は深さ35cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットの性格は不明である。

覆土 20層からなる。第10～14層は、竈袖部の構築材が流れ出したものである。覆土下層からは、炭化物・炭化粒子が検出され、特に第7層は顕著である。覆土下層はブロック状の人為堆積、第1層は土砂の流れ込んだ自然堆積と考えられる。

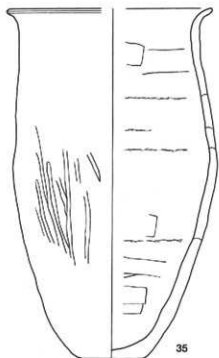
土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|-----------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 11 灰褐色 | ローム粒子中量, 砂質粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化物少量 | 12 褐灰色 | 砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, 粘性普通 | 13 褐灰色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 14 暗褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量 | 15 褐色 | ローム粒子中量, 炭化物微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック微量 | 16 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 7 黒褐色 | 炭化物中量, ロームブロック微量 | 17 褐色 | ローム粒子微量 |
| 8 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 18 褐色 | ローム粒子少量 |
| 9 黒褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 19 褐色 | ローム粒子中量, 粘性強 |
| 10 褐灰色 | ローム粒子中量, 砂質粘土粒子微量 | 20 におい青褐色 | ロームブロック微量 |

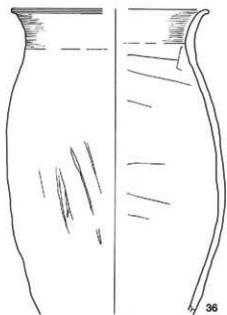
遺物出土状況 土師器片757点(坏類142, 甕類614, 高坏1), 須恵器片27点(坏類19, 甕類8)の他, 後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片2点が出土している。また, 覆土下層からは炭化材が多数出土している。28・30・31は竈周辺の床面から, 29・34は南壁際の床面から, 35・36・39は竈内からそれぞれ出土しており, これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また37は両袖からの出土で補強材として使用されたものである。



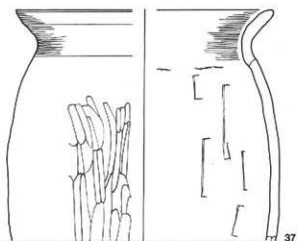
第40図 第37号住居跡出土遺物実測図(1)



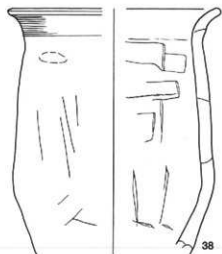
35



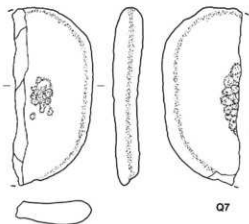
36



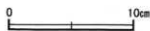
37



38



Q7



第41图 第37号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 検出された炭化材は、覆土中に焼土が確認されなかったことから、焼失によるものではなく遺棄もしくは投棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。

第37号住居跡出土土器観察表 (第40・41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師器	坏	13.1	4.0	-	白色粒子・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部磨子字、器面荒れのため調査不能	床面	93% PL84
29	土師器	坏	13.5	4.1	-	雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	床面	70% PL84
30	土師器	坏	12.5	4.5	-	長石・雲母	黄	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	床面	35%
31	須恵器	坏	8.4	5.3	-	白色粒子	灰	普通	ロクロナデ、底部ヘラ削り	床面	100% PL86
34	土師器	高坏	-	[6.3]	[10.0]	石英・長石・雲母	明赤褐色	普通	胴部ヘラ削り、裾部ナデ	床面	33%
35	土師器	甕	[21.2]	36.7	7.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下唇ヘラ削り、内面ヘラナデ	火床部上	70% 灰土付着 PL80
36	土師器	甕	[20.4]	[32.2]	-	石英・長石・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラナデ	火床部上	45%
37	土師器	甕	[30.4]	[18.5]	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ削り	袖部	40% 燻積炭
38	土師器	甕	[16.5]	[19.6]	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ削り後ナデ	覆土中層	30% 燻積炭 灰土付着
39	土師器	甕	[14.4]	14.7	10.3	石英・長石・雲母	明赤褐色	普通	外面磨滅のため調査不能、内面交互に削り・ナデ	火床部上	65%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	磨石	35.2	(6.4)	2.3	(2640)	安山岩	楕円形、中央部磨耗	覆土中	

第43A号住居跡 (第42～45図)

位置 調査区西部のJ16h7区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第43B号住居跡を掘り込み、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.6m、短軸8.0mの方形で、主軸方向はN-16°-Eである。壁高は35～63cmで、各壁ともほぼ直立している。

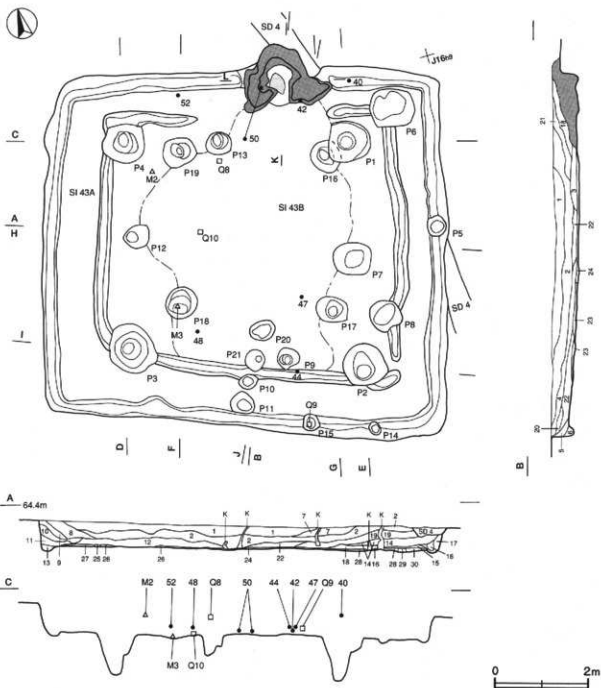
床 ほぼ平坦で、中央部が出入り口付近から竈前面まで踏み固められている。砂質粘土や炭化物が含まれるローム土で貼床されている。壁溝は竈部分を除いて巡っており、断面U字形である。

竈 北壁中央やや東寄りに位置し、上部を第4号溝に破壊されているほか、全体に崩落が激しい。推定される規模は、焚き口部から煙道部先端まで140cm、袖部幅は100～130cmである。煙道部は壁に沿って直に立ち上がり、上部に粘土が貼り付けられている。天井部は崩落し、竈前面に構築材の砂質粘土が流れ出している。袖部には、補強材と考えられる土師器甕が見られるが、袖部の崩壊が激しく本来の位置は不明である。火床部は扇状にくぼみ、焼土が5cmほど堆積しており、火床部の北寄りに石製の支脚が出土している。

竈土層解説

1	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量	8	暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ローム粒子・炭化物微量	9	暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量
3	褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	10	暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	11	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子微量
5	暗褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	12	にぶい黄褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
6	暗褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量	13	暗赤褐色	焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量
7	褐色	砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	14	灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

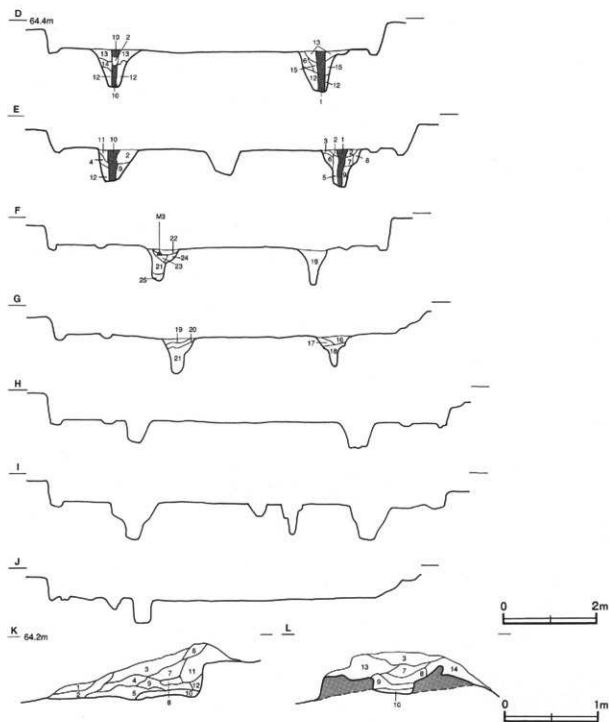
ピット 15か所 (P1～P15)。P1～P4は、深さ70～90cmの主柱穴である。P7・P9・P12・P13は、深さ40～60cmで、配置から補助の柱穴と考えられる。P9が東寄り、P13が西寄りに位置しているのは、出入り口や竈との干渉を避けたためと考えられる。P10・P11は深さ20～30cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられ、新井は不明である。その他のピットの性格は不明である。



第42図 第43A・43B号住居跡実測図(1)

ピット土層解説 (P 1~P 4)

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子微量	9	褐色	ローム粒子・炭化物・砂質粘土粒子・鹿沼バミス微量
2	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
3	褐色	炭化物・粘土粒子・鹿沼バミス微量	11	褐色	ロームブロック少量・鹿沼バミス微量
4	褐色	ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	12	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
5	褐色	ローム粒子少量・焼土粒子微量	13	褐色	鹿沼バミス少量・ロームブロック・炭化粒子微量
6	明褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	14	褐色	炭化粒子・鹿沼バミス微量
7	暗褐色	ローム粒子少量・焼土粒子・鹿沼バミス微量	15	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量・炭化粒子微量・ローム粒子少量
8	褐色	ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量			



第43図 第43A・43B号住居跡実測図(2)

覆土 30層からなる。第3・18・21層は竈から流出した土層で、第23~30層はしまりのある粘床の土層である。壁際の層や下層は土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられ、第1・2層は粘土粒子や大量の土器片が混入していることから、人為堆積と考えられる。

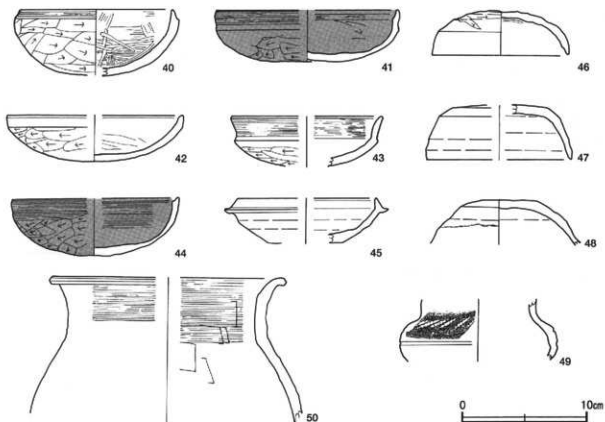
土層解説

- | | | | |
|------|-------------------------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物・砂質粘土
粒子微量 | 3 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |

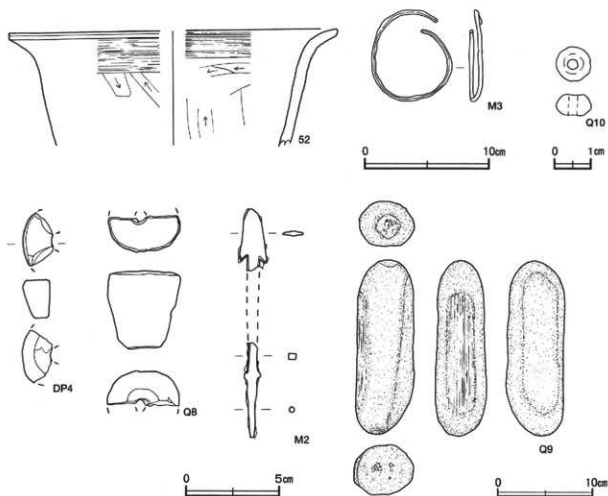
5	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 しまり弱	18	にぶい褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化物微量
6	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	19	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・砂質粘土 粒子微量
7	暗褐色	焼土粒子少量・ローム粒子・炭化粒子微量	20	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	21	褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭 化粒子微量
9	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	22	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
10	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 しまり弱	23	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・砂質粘土 粒子微量
11	暗褐色	ローム粒子少量	24	明褐色	ローム粒子多量、砂質粘土粒子少量
12	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 しまり普通	25	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
13	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	26	褐色	ローム粒子中量、炭沼バミス微量
14	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	27	褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子微量
15	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	28	明褐色	ローム粒子多量、炭沼バミス微量
16	暗褐色	ローム粒子少量	29	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
17	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	30	明褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片1605点(坏類430, 甕類1172, 高坏3), 須惠器片68点(坏類21, 甕類46, 壺1), 石器2点(砥石1, 紡錘車1), ガラス製品1点(丸玉), 鉄製品1点(鏃), 土製品1点(紡錘車)の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片5点, 後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片2点(碗)が出土している。50は竈左袖付近から出土し補強材と考えられる。Q10は床面から, 40・52・Q9は壁際から出土しており住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。47・48・DP4・Q8・M2は覆土中層から下層にかけて出土しており, 埋没過程での混入と考えられる。

所見 面積は約69㎡で, 古墳時代後期の住居跡では当遺跡最大である。床面下から第43B号住居跡の壁溝が検出され, 出入口の位置も対応していることから, 本跡は第43B号住居跡を拡張したのと考えられる。時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第44図 第43A号住居跡出土物実測図



第45図 第43A・43B号住居跡出土遺物実測図

第43A号住居跡出土遺物観察表 (第44・45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
40	土師器	坏	12.1	(5.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	覆土中層	50% PL84
41	土師器	坏	[14.2]	4.2	-	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り棒ナデ、内面削り棒ナデ、一部ヘラ磨き	覆土下層	35%
42	土師器	坏	[14.0]	3.7	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ削り棒ナデ	床面	30%
43	土師器	坏	[11.8]	(4.0)	-	雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	覆土下層	30%
44	土師器	坏	[13.2]	4.6	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	覆土下層	35%
45	須恵器	坏	[11.0]	(3.6)	-	石英・長石・針状物質	灰	普通	ロクロナデ、底部ヘラ削り	覆土下層	20%
46	須恵器	壺	10.8	3.4	-	長石・雲母	灰黄	普通	ロクロナデ、天井部回転ヘラ削り	覆土下層	50% PL88
47	須恵器	壺	[11.6]	(3.4)	-	長石・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ、天井部回転ヘラ削り	床面	30% PL88
48	須恵器	壺	-	(3.6)	-	石英・長石・黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ、天井部回転ヘラ削り	床面	25%
49	須恵器	壺	-	(5.0)	-	黒色粒子	灰白	普通	体部外面ヘラ杖工具による剥剥、1条の沈痂	覆土下層	5%
50	土師器	甕	[18.6]	(11.6)	-	石英・長石	明赤褐	普通	体部内外面ナデ、内面ヘラ当て削	覆土下層	10%
52	土師器	甕	[26.2]	(9.3)	-	長石・赤色粒子・雲母	橙	普通	体部内外面ヘラ削り	床面	50%

番号	器種	直径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP4	紡錘車	[3.9~2.8]	2.0	[1.0]	(8.0)	土	ナデ、円錐台形	覆土下層	
Q8	紡錘車	(3.8~1.7)	4.1	0.7	(29.5)	砂岩	円錐台形	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	磨石	18.5	6.2	3.2	1010.0	安山岩	両端に磨り・敷き裏有り	壁溝上	
M2	鏝	3.4/4.9	1.6	0.28	(5.14)	鉄	縦間長三角形鏝、尾根部一部欠損	覆土中層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	丸瓦	0.9	0.53	0.3	1.12	ガラス	外面乳白色	床面	

第43B号住居跡（第42・45図）

位置 調査区西部のJ16h7区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第43A号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.6m、短軸5.9mの方形と推定され、主軸方向はN-16°-Eである。

床 第43A号住居跡の貼床下では確認できなかったことから、第43A号住居跡と同一面か、その上面にあったと推定される。壁溝は、竈部と考えられる北側中央部と南東コーナー部を除いて巡っており、断面U字形である。

竈 壁溝の状況から、北壁の中央部に位置したと推定されるが、残存していない。

ピット 6か所（P16～P21）。P16～P19は深さ70～100cmで、主柱穴である。ブロック状の堆積状況から、柱を抜き取ってから埋め戻されたと考えられ、P18の覆土中層から銅鋼が出土している。P20・P21は深さ25～50cmで、南側壁溝の中央付近に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層観察（P16～P19）

16	褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・砂質粘土粒子微量	21	褐色	ロームブロック少量、炭屑ハミス微量
17	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	22	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
18	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量	23	褐色	ロームブロック少量
19	褐色	ローム粒子少量、炭屑ハミス微量	24	明褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
20	暗褐色	ロームブロック微量	25	褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況 銅製品1点（銅）がP18の覆土層から出土している。

所見 本跡は、第43A号住居として拡張する以前の住居跡と考えられる。銅鋼は廃絶時に主柱穴（P18）に埋めたものと推測されるが、意図は不明である。時期は、年代を特定できる遺物が出土していないが、第43A号住居跡の時期から、先行する7世紀前半ごろと考えられる。

第43B号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	銅鋼	7.2	6.4	0.28-0.32	9.4	銅	1か所破断	P18覆土上層	PL105

第50号住居跡（第46図）

位置 調査区西部のJ16f9区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第65号住居、第23号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北側が調査区域外に延びており全形は不明である。確認できたのは長辺2.7m、短辺2.3mで方形または長方形と推定され、主軸方向はN-78°-Eである。壁高は23～62cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は南壁と西壁に巡っており、断面はU字形または逆台形である。

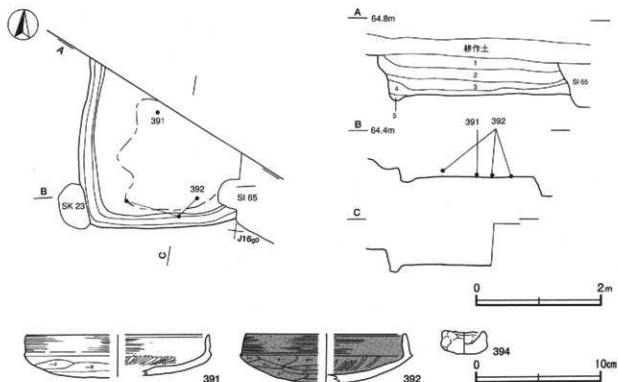
覆土 5層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	5 褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片64点(坏類19, 甕類44, 手捏土器1), 須恵器片1点(坏類)が出土している。391は中央部, 392は南壁際のいずれも床面から出土しており、廃絶直後に混入したものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉ごろと考えられる。



第46図 第50号住居跡・出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表 (第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
391	土師器	坏	[14.6]	3.4	-	石英・長石	にぶい橙	普通	体形外面へう削り, 内面放射状のへう磨き	床面	50%
392	土師器	坏	[12.6]	(3.9)	-	石英・長石	灰褐	普通	体形外面へう削り, 内面放射状のへう磨き	床面	40%
394	土師器	手捏	3.1	1.9	1.5	長石・白色粒子	橙	普通	内外面に指頭圧痕	覆土上層	50%

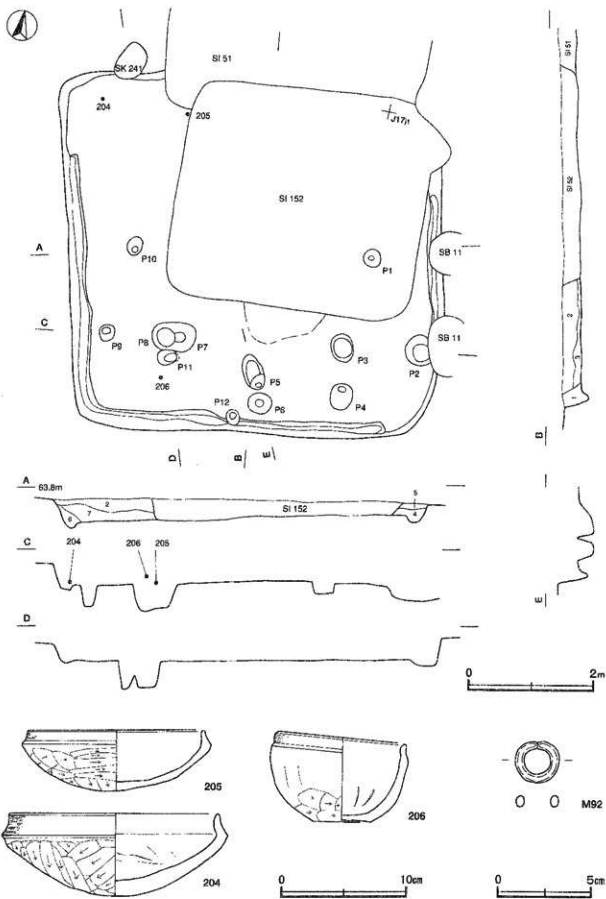
第52号住居跡 (第47図)

位置 調査区中央部のJ16j0区に位置し, 尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第51・152号住居, 第11号掘立柱建物, 第241号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.0m, 短軸5.5mの方形で, 主軸方向はN-10°-Wである。壁高は24~34cmで, 各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほは平坦で, 中央付近がよく踏み固められている。中央部東寄りに, 長径70cm, 短径30cmの楕円形に火を受けた面が見られる。壁溝は, 東壁付近の一部と南壁から西壁付近にかけて通っており, 断面U字形である。



第47图 第52号住居跡・出土遺物実測図

竈 北側に位置していたと推定されるが、第51・152号住居に掘り込まれ、確認できなかった。

ピット 12か所。P3・P8は深さ20～50cmで、南側に位置する主柱穴と考えられる。配置を考慮床面を精査したが、北側に対応するピットは確認できなかった。P5・P6は深さ25～30cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられるが、新旧は不明である。その他のピットの性格は不明である。

覆土 7層からなる。レンズ状の自然堆積と考えられる。

土層解説		
1	褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ローム粒子少量
3	褐色	ローム粒子多量
4	褐色	ローム粒子少量
5	黒褐色	ローム粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片260点（環類94、甕類165、高坏1）、須恵器片10点（環類5、甕類5）、石器2点（砥石）、銅製品1点（耳環）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片3点が出土している。204は逆位で、205は正位でそれぞれ床面から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。206は南塚付近の覆土下層から出土しており、埋没過程の早い時期に混入したものと考えられる。また、M92は、南東部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第52号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地産	手法の特徴	出土位置	備考
204	土師器	坏	16.4	6.7	-	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り内面ナデ	床面	90% PL84
205	土師器	坏	13.8	5.0	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	床面	50% PL84
206	土師器	碗	10.0	7.1	4.6	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り蓋ナデ、内底ナデ	覆土下層	80% PL87

番号	器種	外径	内径	厚さ	取量	材質	特徴	出土位置	備考
M92	耳環	2.2	1.4	0.35	8.2	銅	鍍銀	覆土中	PL106

第53号住居跡（第48～51図）

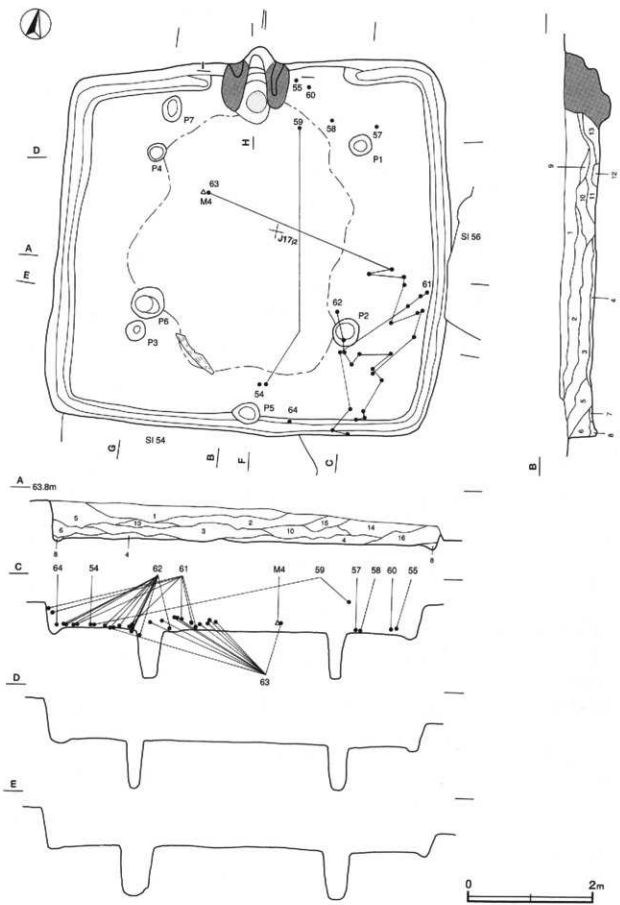
位置 調査区中央部のJ17h2区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第54・56号住居に掘り込まれている。

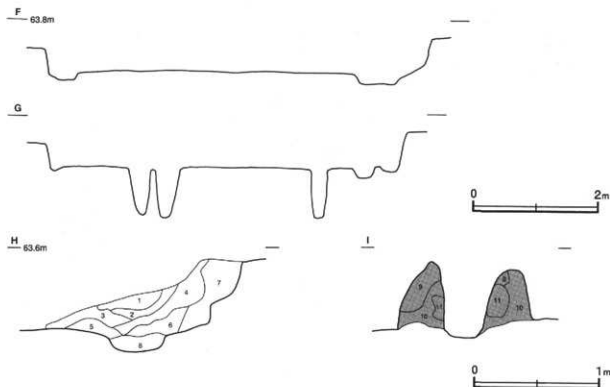
規模と形状 長軸6.4m、短軸5.6mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は34～57cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部が狭み固められている。溝溝は竈部分を除き巡っており、断面U字形である。

竈 北壁の中央部に位置し、規模は突き口部から煙道部先端まで120cm、袖部幅は70cmである。煙道部は真っ直ぐに立ち上がった後、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落し、竈前面に構架材の粘土が流れ出している。袖部は地山に直接のせた粘土を芯材とし、その上に砂質粘土とロームを混ぜた構架材を貼り付けてある。火床部に面した部分は赤変し、もろくなっている。火床部は皿状に20cmほどくぼみ、焼土が厚く堆積している。袖部や火床部の様子から、長年にわたり使用されたと推定される。



第48图 第53号住居跡実測图(1)



第49図 第53号住居跡実測図(2)

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|--------|----------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土粒子多量, 焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂質粘土粒子微量 |
| 3 灰褐色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| 4 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量 | 10 青灰色 | 粘土粒子多量 |
| 5 暗褐色 | 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 赤褐色 | 赤変粘土粒子多量 |
| 6 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量, 焼土ブロック微量 | | |

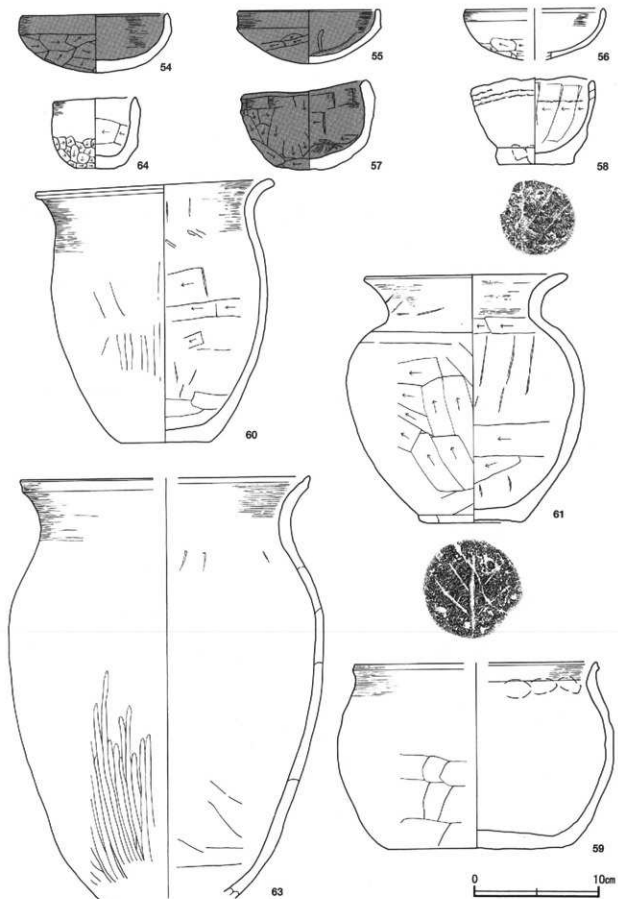
ピット 7か所。P1～P4は、深さ75～80cmの主柱穴である。P5は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットの性格は不明である。

覆土 16層からなる。第12・13層は、崩落した竈の構築材を含む土層である。不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

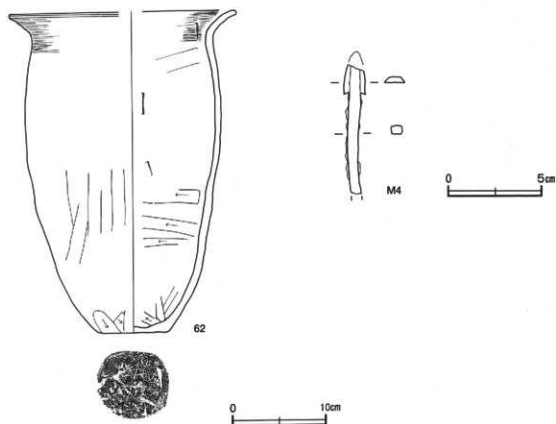
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-----------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量 | 9 灰褐色 | 砂質粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 10 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | 12 褐灰色 | 砂質粘土粒子中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量 | 13 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子微量 | 14 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量 | 15 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 8 褐色 | ローム粒子中量 | 16 暗褐色 | ロームブロック少量, 砂質粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片453点(坏類104, 甕類349), 須恵器片25点(坏類15, 甕類10), 鉄製品1点(鐵), 鉄滓3点の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片9点, 石器1点(剥片), 後世の耕作などで混入したと考えられる土師質土器片2点(鍋)が出土している。55・57・58・60は炭化材と共に北東部床面から、61・62・63は破片の状態でも南東部の床面から覆土中層にかけて、それぞれ出土している。また、54・55は床面から、



第50图 第53号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図 第53号住居跡出土遺物実測図(2)

64は南の壁溝付近から出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。M4は中央部の覆土下層から出土している。炭化材はP3付近の床面や、北西コーナーからも出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。

第53号住居跡出土遺物観察表 (第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	土師器	坏	11.6	5.1	-	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	床面	85% PL84
55	土師器	坏	11.2	4.3	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ後一部へラ磨き	床面	35%
56	土師器	坏	[11.0]	(4.1)	-	石英	にぶい褐色	普通	口縁内側に沈線、体部外面へラ削り、内面ナデ	覆土中層	30%
57	土師器	碗	9.9	7.0	-	赤色粒子・白色粒子・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面へラ削り、内面削り後ナデ、一部不定方向に磨き	床面	95% PL87
58	土師器	碗	9.6	6.7	5.9	長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面ナデ、内面削り後ナデ	床面	85% 輪積痕 PL86
59	土師器	甕	[19.2]	14.8	13.6	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面下部磨方向へラ削り、内面ナデ、指痕押捺、底部ナデ	床面	45% PL89
60	土師器	甕	18.5	20.9	[7.1]	赤色粒子・雲母	にぶい褐色	普通	体部外面へラ磨き、内面へラ削り後ナデ	床面	75% 焼土付着 PL90
61	土師器	甕	15.7	19.9	-	石英・長石	にぶい褐色	普通	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ削り後ナデ、底部木炭痕	覆土中	85% PL90
62	土師器	甕	[23.6]	33.7	7.4	石英・長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部内外面へラ削り後ナデ、底部木炭痕	床面	70%
63	土師器	甕	[22.8]	(33.5)	-	石英・長石・雲母	褐色	普通	体部外面上位ナデ、内面ナデ	覆土下層	40% 輪積痕
64	土師器	碗	6.5	5.6	3.0	長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面へラ削り、内面削り後ナデ	床面	65% PL87

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	鉄	(6.7)	1.2	0.28	(4.06)	鉄	縦身断面台形、縦身先端・腕部欠損	覆土下層	

第62号住居跡（第52・53図）

位置 調査区中央部のK17a4区に位置し、尾根上の平坦部縁辺に立地している。

重複関係 第59・60・61号住居、第515・516号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.0m、短軸5.9mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は25～35cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部が出入口付近から竈前面まで踏み固められている。壁溝は竈部分を除き巡っており、断面U字形である。

竈 北壁の中央部に位置し、焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅は70cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込み、緩やかに立ち上がっている。天井部は崩落し、砂質粘土を主とする構架材が前面に流れ出している。第7・8層は天井部下側の被熱した面が崩落した土層と考えられる。袖部は粘土を芯材とし、周りに砂質粘土とロームを混ぜたものを貼り付けて、地上上に構築されている。火床部に面する部分は、赤変している。火床部は掘り込まれておらず、焼土が厚く堆積している。

竈土層解説

1 灰褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量	11 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 灰褐色	砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	12 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量	13 褐色	砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量
4 灰褐色	粘土粒子中量	14 赤褐色	焼土ブロック少量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量	15 褐色	砂質粘土粒子中量、炭化物微量・焼土粒子少量
6 灰褐色	砂質粘土粒子中量、炭化物微量	16 灰褐色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
7 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	17 灰黄褐色	粘土粒子多量
8 灰褐色	焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量	18 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
9 黒褐色	砂質粘土粒子少量	19 褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
10 褐色	ローム粒子中量	20 におい黄褐色	ロームブロック・砂質粘土粒子少量
		21 灰黄褐色	ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量

ピット 9か所。P1～P3は、深さ70～100cmの主柱穴である。P1に対応する主柱穴は確認できなかった。P4は深さ60cmで、南端際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットの性格は不明である。

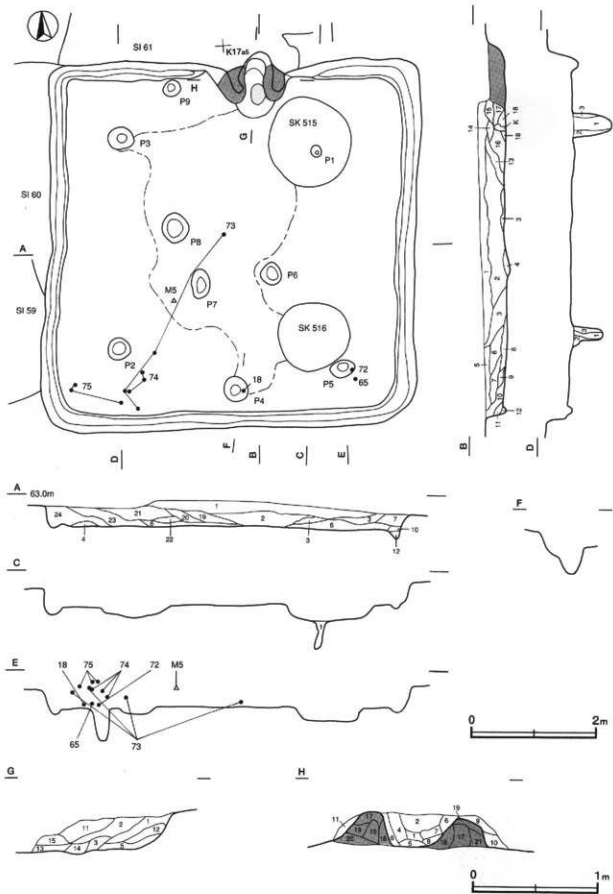
ピット土層解説（P1～P3）

1 暗褐色	ローム粒子微量	3 褐色	ローム粒子中量、しまり黄
2 褐色	ローム粒子中量、しまり弱		

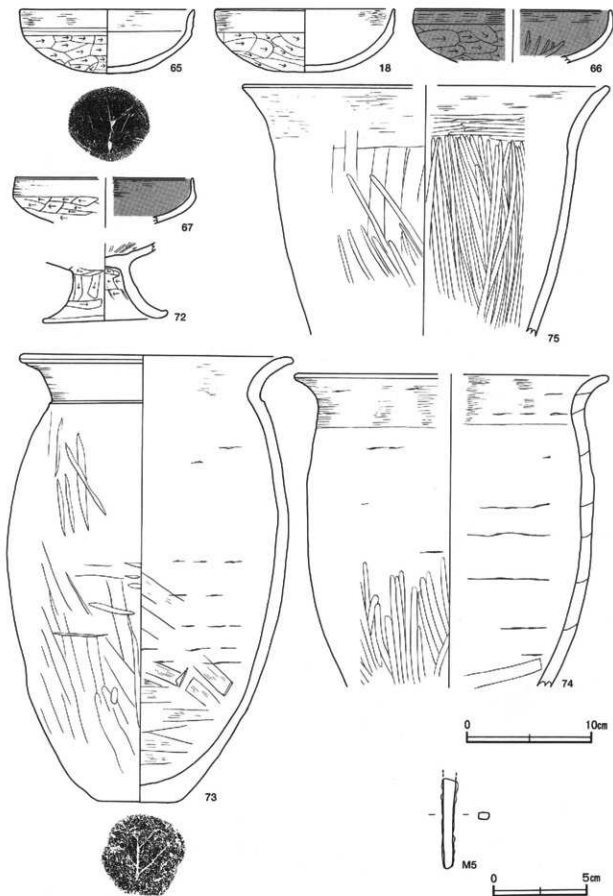
覆土 25層からなる。壁際から中央床面付近の上層は焼土や炭化物を含んでおり、ブロック状の堆積が見られることから人為堆積と考えられる。第1層はその後、土が流れ込んだ自然堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	13 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	14 暗褐色	砂質粘土粒子少量
3 褐色	ロームブロック・炭化物微量	15 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子多量	16 褐色	ロームブロック微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	18 暗褐色	炭化物少量、ロームブロック微量
7 暗褐色	ローム粒子中量	19 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子微量	20 黒褐色	炭化物少量
9 褐色	ロームブロック少量	21 におい黄褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	22 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量
11 褐色	ローム粒子微量	23 褐色	ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量
12 褐色	ローム粒子少量	24 褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量



第52图 第62号住居跡実測图



第53图 第62号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片57点（坏類218、甕類348、高坏1）、須恵器片11点（坏類9、甕類2）、鉄製品1点（釘カ）の他、後世の耕作などで混入したと考えられる瓦1点が出土している。18は南壁中央部付近の床面から、65・72は南東コーナー部付近の床面から出土しているが、覆上の堆積状況から、本跡の廃絶直後に投棄されたものと考えられる。73・74・75は、壁際の覆上土層から出土しており、埋没過程の早い時期に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第62号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	坏	14.2	5.1	-	長石・白色粒子・赤鉄	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面削り残ナテ	床面	90% PI.84
65	土師器	坏	13.8	3.1	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナテ残へラ削き	床面	60% へラ削り「1」PI.85
66	土師器	坏	[13.6]	(4.2)	-	長石・赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナテ残へラ削き	覆上中	30%
67	土師器	坏	[11.0]	3.6	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面削ナテ	覆上中	20%
72	土師器	高坏	-	(6.3)	10.0	長石・白色粒子・雲母	橙	普通	環部内面削き、脚部へラ削り	床面	55%
73	土師器	甕	21.0	35.5	6.4	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	体部外面へラナテ、内面へラ削り残ナテ、底部本葉	覆上土層	80% 管形瓦 PI.90
74	土師器	甕	[24.4]	(23.7)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面へラ削き、内面ナテ削り残ナテ、底部本葉	覆上土層	30% 管形瓦
75	土師器	瓶	[28.8]	(19.9)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内外面へラ削き、内面上部横方向へラ削き	覆上土層	35%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	釘カ	(4.8)	0.52	0.38	3.06	鉄	上部欠損	覆上土層	

第81号住居跡（第54図）

位置 調査区中央部のK17a0区に位置し、東に傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第82号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びており全容は不明である。確認できたのは長軸3.9m、短軸3.8mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は7~19cmで、ほぼ直立している。

床 やや起伏があり、南壁から道の前面にかけて踏み固められている。

竈 北壁に位置しており、煙道部と右袖部は調査区域外に延びている。天井部は崩落しており、第2層に構築材の砂質粘土が見られる。袖部は砂質粘土を用いて構築されている。火床部は皿状にわずかにくぼみ、火床面は赤変しており焼土が堆積している。

埋土層解説

- | | | | | | |
|---|------|-----------------|---|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 3 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量 | 4 | 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |

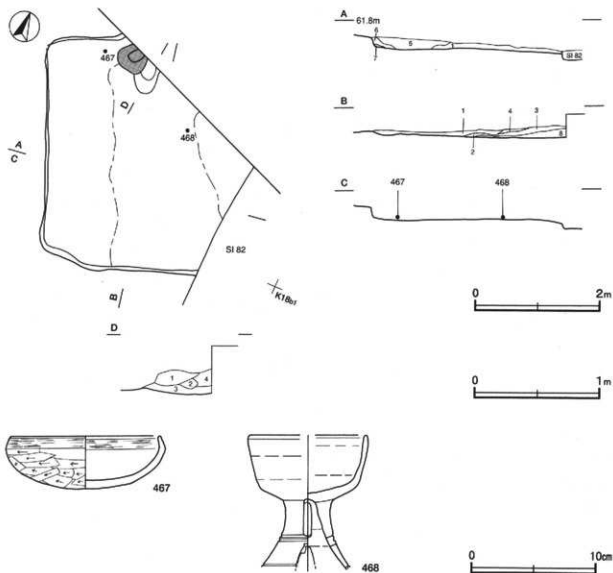
覆土 8層からなる。ブロックを含む層位が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|------------------|---|--------|-----------------------|
| 1 | 褐色 | ロームブロック少量 | 5 | にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗灰色 | ローム粒子・砂質粘土粒子中量 | 6 | 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック微量 | 7 | 黄褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 | 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量 | 8 | 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片17点（坏類7、甕類10）、須恵器片12点（高坏）が出土している。467は竈の西脇から

正位で、468は中央部から横位でいずれも床面から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。
 所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第54図 第81号住居跡・出土遺物実測図

第81号住居跡出土遺物観察表 (第54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
467	土師器	環	[11.8]	4.2	-	石英・長石・赤色 磁子	におい貫性	普通	外部外面へラ削り、内面ナデ	床面	55%
468	須恵器	高環	[9.3]	[10.7]	-	石英・長石	灰	普通	ロクロナデ、脚部2段造かし、 透かし間に比線2条	床面	60%

第84号住居跡 (第55図)

位置 調査区中央部のK17c9区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第9・10号獨立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東側と南側が削平されており全容は不明である。確認できたのは長軸4.3m、短軸3.0mで方形または長方形と推定され、主軸方向はN-0°である。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、東側は削平されている。

竈 北壁の東コーナー寄りに位置し、天井部や袖部は、削平により失われている。火床部は5cmほど皿状にくはみ、焼土が厚く堆積している。火床部の奥には石製の支脚が見られる。

竈土層解説

1 赤褐色 焼土粒子多量、炭化物微量

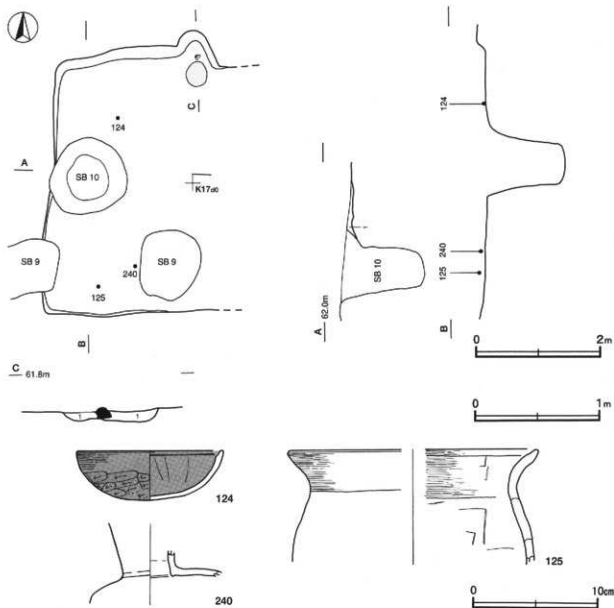
覆土 単一層である。削平のため土層が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片51点(坏類6, 甕類45), 須恵器片3点(甕類2, 平瓶1), 石材1点(支脚)が出土している。124は、北西部の床面から正位で、125・240は南西部の覆土下層から破片の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第55図 第84号住居跡・出土遺物実測図

第84号住居跡出土物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
124	土師器	坏	11.5	4.0	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁内面に沈縮、器部外面へラ削り、内面へラ削り後ナデ	床面	95% P1.85
125	土師器	甕	19.7	9.2	-	石英・長石	にぶい橙	普通	器部外面ナデ、内面削り後ナデ	覆土下層	15% 輪痕復
240	須恵器	平瓶	4.3	6.5	-	長石	灰オリーブ	普通	ロクロナデ	覆土下層	10% 自然乾

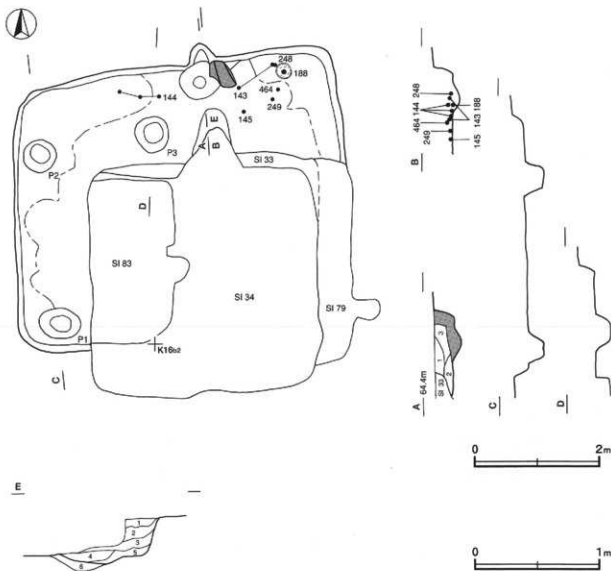
第90号住居跡 (第56・57図)

位置 調査区西部のK16a2区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第33・34・79・83号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.2m、短軸4.3mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は22~30cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、竈周辺が踏み固められている。



第56図 第90号住居跡実測図

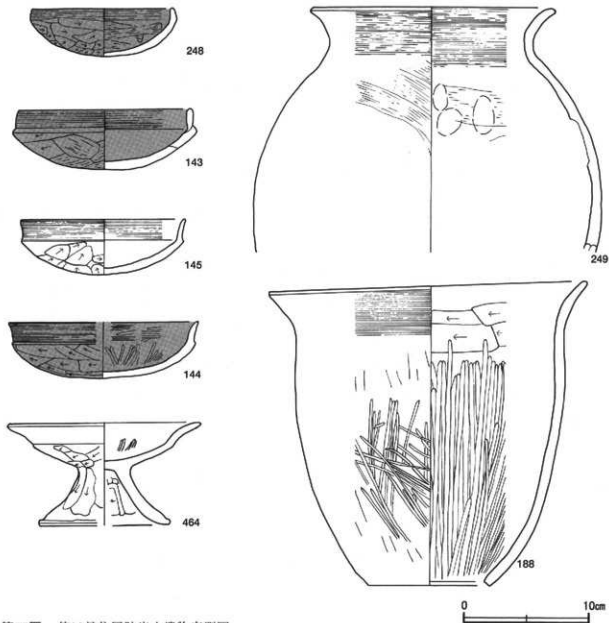
竈 北壁の中央部に位置しているが、左袖は失われている。規模は焚き口部から煙道部先端まで90cm、袖部幅は推定で100cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込み、急傾斜で立ち上がっている。天井部は破壊され、構材材が竈内に堆積している。第3層は煙道部の痕跡と考えられる。右袖部は、ローム土に砂質粘土を盛り上げて構築されている。火床部は皿状に掘りくぼめられており焼土がわずかに堆積しているが、赤変はほとんど認められなかった。第6層は掘り方の土層である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|--------|------------------|
| 1 灰 褐色 | 砂質粘土粒子微量 | 4 褐 灰色 | 砂質粘土粒子少量 |
| 2 灰 褐色 | 砂質粘土粒子微量、粘性強 | 5 褐 灰色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 6 灰 褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子少量 |

ピット 3か所。P1・P2は深さ25~30cmで配置していることから支柱穴と考えられる。P3は深さ25cmであるが、性格は不明である。

覆土 3層からなる。ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。



第57図 第90号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1	褐色	ローム粒子中量	3	暗褐色	ローム粒子少量
2	にぶい褐色	ローム粒子少量			

遺物出土状況 土師器片147点（坏類42，甕類81，高坏24），須恵器片6点（坏類2，甕類4）が出土している。188は北東コーナ部分の床面から逆位で、249はその南側から破片の状態です。464は、249上から破壊された状態で出土している。何れも住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 完形の甕が逆位で床面に伏せられている一方、高坏が破壊された状態で出土していることから、住居廃絶に伴い何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。

第90号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	記号	1径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
143	土師器	坏	137	4.8	-	石英・赤色粒子・炭粉	にぶい褐色	普通	体部外面へう割り残らず、内面へう割き	床面	80% PL86
144	土師器	坏	[16.1]	4.3	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部外面へう割り残らず、内面へう割き	床面	55%
145	土師器	坏	129	4.5	-	長石・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へう割り、内面ナデ	床面	75% PL85
248	土師器	坏	112	3.8	-	長石・赤色粒子	灰黄褐色	普通	体部外面へう割り、内面へう割ナデ	床面	90% PL85
249	土師器	甕	189 (19.5)	-	-	石英・長石	にぶい褐色	普通	体部外面ナデ、内面范頭匠痕	床面	40%
188	土師器	甕	250	24.3	9.7	石英・長石	褐色	普通	体部内外面へう割き	床面	100% 水原町遺跡P152
464	土師器	高坏	[149]	8.2	[10.1]	赤色粒子・炭粉	にぶい赤褐色	普通	外部外面・脚部へう割り、内部内面へう割き	復土下層	40%

第98号住居跡（第58・59図）

位置 調査区中央部のK172区に位置し、尾根上の平坦部縁辺に立地している。

重複関係 第121号住居，第178・502号土坑に掘り込まれている。

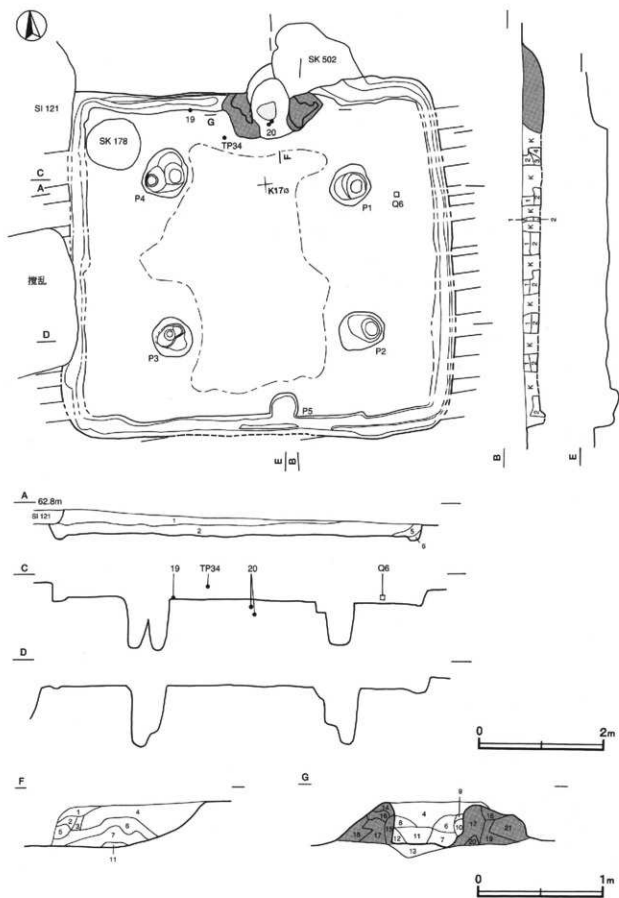
規模と形状 長軸6.2m，短軸5.5mの長方形で，主軸方向はN-3°-Eである。竪高は26～47cmで，各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁際は竪部分を除き巡っており，断面し字形である。

竪 北壁の中央部に位置し，焚き口部から煙道部先端まで120cm，袖部軸が150cmである。北東部は第502号土坑に破壊されている。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込み，緩やかに立ち上がっている。天井部は砂質粘土で構築され竪内部へ崩落しており，第2～5層に該当する。その下には被熱で赤変した構築材が見られる。袖部も砂質粘土で構築され，火床部に面する部分は赤変硬化している。火床部は赤変し，焼土や崩落した構築材の砂質粘土が厚く堆積している。第13層は被熱により赤変した掘り方の土層である。

遺土層解説

1	灰褐色	砂質粘土粒子中量，焼土ブロック微量	12	暗赤褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子微量
2	褐色	砂質粘土粒子多量，焼土粒子微量	13	暗赤褐色	焼土ブロック中量
3	褐色	砂質粘土粒子多量，ローム粒子微量	14	褐色	砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量
4	褐色	砂質粘土粒子多量，炭化粒子微量	15	暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量
5	褐色	砂質粘土粒子多量，焼土ブロック微量	16	褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6	暗赤褐色	砂質粘土粒子中量，焼土ブロック微量	17	褐色	砂質粘土粒子多量
7	暗赤褐色	焼土ブロック中量，ロームブロック・砂質粘土粒子微量	18	暗褐色	ローム粒子中量
8	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量，砂質粘土粒子微量	19	褐色	砂質粘土粒子多量
9	赤褐色	焼土粒子多量，砂質粘土粒子中量	20	灰褐色	砂質粘土粒子多量
10	にぶい赤褐色	焼土ブロック微量	21	褐色	砂質粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子微量
11	褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量			



第58图 第98号住居跡実測图

ピット 5か所。P1～P4は、深さ80～100cmの支柱穴である。P4は柱を受けた痕が2箇所確認できたことから作り替えが行われたと推測される。P5は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

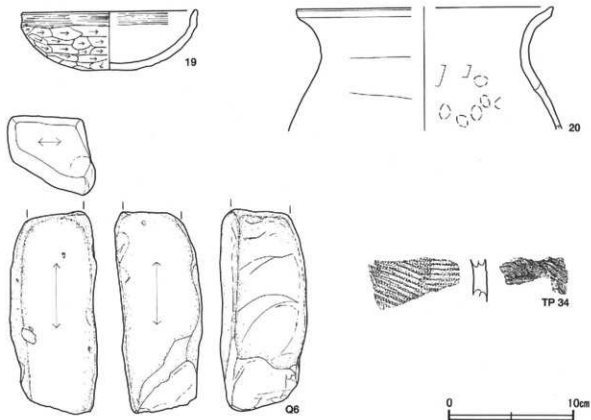
覆土 6層からなる。壁際から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ローム粒子中量、砂質粘土粒子微量
2 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片253点（坏類55、甕類197、高坏1）、須恵器片19点（坏類15、甕類4）、石器1点（砥石）、鉄滓1点の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片2点、後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片1点（壺）、瓦1点が出土している。19は北壁際の床面から、20は竈内から、Q6は東側覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第59図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	土師器	坏	[14.0]	4.7	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面へウ棚り、内面ナデ	床面	30%
20	土師器	甕	[20.4]	(9.7)	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	体部内外面ナデ	竈	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP34	須恵器	甕	石英・長石	暗灰	普通	外面横位平行印き、内面同心円状の当て具痕	覆土下層	

番号	器種	長さ(径)	體	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q6	磁石	(16.1)	6.9	6.3	(824.0)	頁岩	紙面3面	覆土下層	

第107号住居跡 (第60・61図)

位置 調査区中央部のL18e3区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第109号住居跡を掘り込み、第110号住居、第18号掘立柱建物、第213号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東コーナー部から東側にかけて削平されており全容は不明である。確認できたのは長軸3.5m、短軸3.2mで方形または長方形と推定され、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は5cmで、外傾して立ち上がっている。

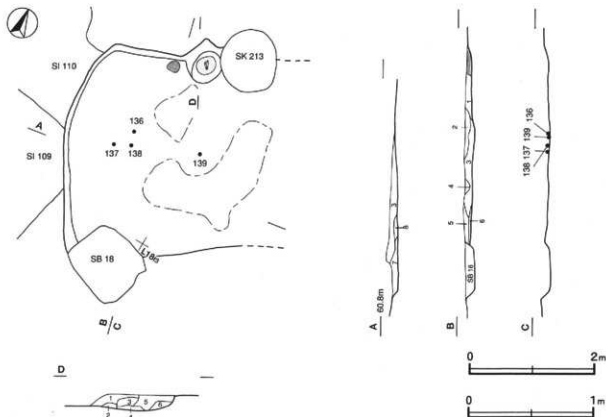
床 ほほ平坦で、竈前面と南側が踏み固められている。

竈 北壁のほほ中央部に位置し、上部は削平を受け、東側は第213号土坑により破壊されている。焚き口部から煙道先端まで80cm、袖部幅は70cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込み、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落し、第5層が該当する。袖部は原形を保っていないが、左袖脇に見られる粘土が構築材の一部と思われる。火床部は皿状にわずかにくぼみ、中央に石材の支脚が見られる。

甌土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

覆土 8層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。



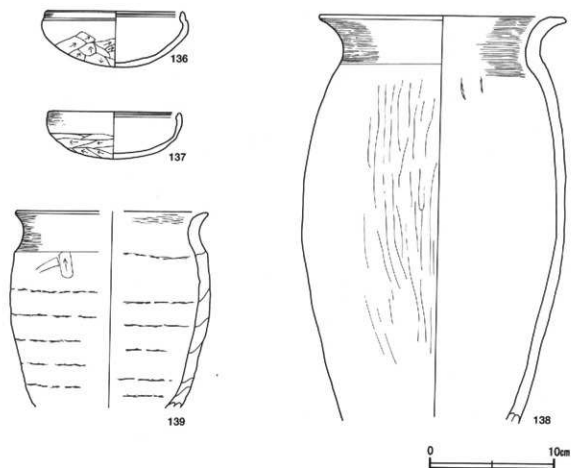
第60図 第107号住居跡実測図

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量	5	黒褐色	ロームブロック微量
2	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子微量、粘性弱
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子微量、しまり弱	8	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片137点(坏類36, 甕類101), 須恵器片1点(甕類), 石材1点(支脚)の他, 埋没時に混入したと考えられる弥生土器片2点が出土している。図化した土器は何れも中央部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第61図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
136	土師器	坏	10.8	4.4	-	石英・白色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁内側に沈線。体部外面へツ振り, 内面ナデ	床面	85% PL85
137	土師器	坏	10.4	3.8	-	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁内側に沈線。体部外面へツ振り, 内面ナデ	床面	75% PL85
138	土師器	甕	19.8	(32.5)	-	石英・炭石・白色粒子・黒色粒子・炭屑	にぶい赤褐	普通	体部外面へツ磨き。内面横ナデ	床面	70% PL90
139	土師器	甕	[15.1]	(15.6)	-	石英・炭石・白色粒子・黒色粒子・炭屑	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ。体部器面荒れのため調査不明	床面	30%

第109号住居跡 (第62・63図)

位置 調査区中央部のL18区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第221号土坑を掘り込み、第107・110・111号住居、第18号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.6m、短軸4.5mの方形で、主軸方向はN-89°-Wである。壁高は14~16cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

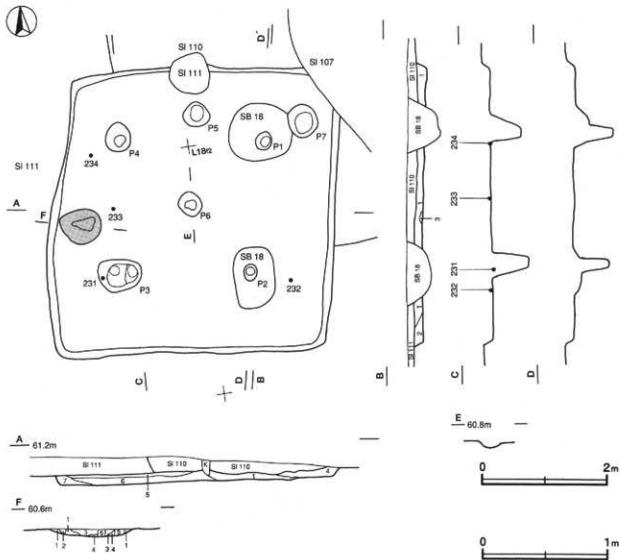
床 はほぼ平坦で、中央部から炉の周辺が、よく踏み固められている。

炉 西壁際に位置し、長径70cm、短径50cmの楕円形で、10cmほど皿状に掘り込まれている。火床面には焼土が堆積し、赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 | | |

ピット 7か所。P1~P4は、深さ50~60cmの主柱穴である。P5は深さ10cmで、P1・P4の中間やや北寄りに位置していることから、補助柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。



第62図 第109号住居跡実測図

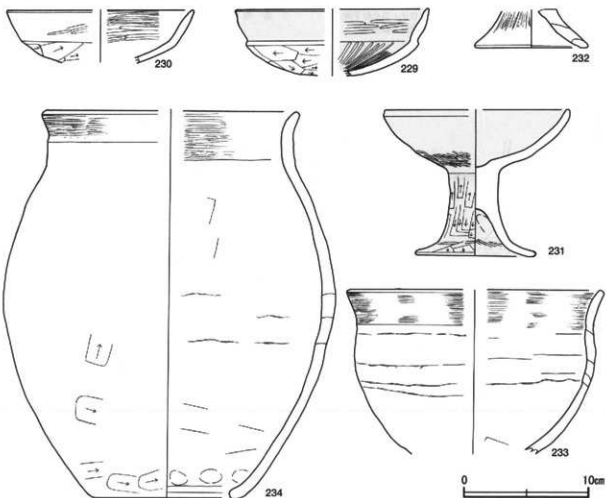
覆土 7層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量	5	暗褐色	ローム粒子中量
2	褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	6	黒色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
3	褐色	ローム粒子中量	7	暗褐色	ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量
4	褐色	ロームブロック・炭化物微量			

遺物出土状況 土師器片356点（坏類67、甕類278、高坏11）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片4点、弥生土器片4点、後世の耕作等で混入したと考えられる須恵器片2点（甕類）が出土している。231～234はいずれも床面から出土している。本跡廃絶直後に、投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀末と考えられる。



第63図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
229	土師器	坏	[15.4]	5.3	-	石英・長石・赤色粒子	明褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き	覆土中	20% 内面から口縁部赤彩
230	土師器	坏	[14.6]	(4.3)	-	赤色・白色・黒色粒子・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	覆土中	30%
231	土師器	高坏	[14.5]	11.6	9.3	石英・赤色粒子	橙	普通	坏部内面一部ヘラ磨き、脚部ヘラ削り	床面	50% 内外面赤彩
232	土師器	高坏	-	(3.0)	5.8	赤色粒子・雲母	橙	普通	脚部内外面ナデ	床面	40%
233	土師器	甕	[20.2]	(13.1)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい褐色	普通	体部内外面ナデ	床面	15%
234	土師器	甕	[20.0]	31.0	11.4	石英・赤色粒子	褐色	普通	体部外面ナデ一部削り、内面ヘラ削り後ナデ、底内面指摺痕	床面	40%

第111号住居跡 (第64・65図)

位置 調査区中央部のL18e1区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第109号住居跡、第221号土坑を掘り込み、第110号住居、第206号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南の一部が調査区域外に延びており、東側が削平されていることから全容は不明である。確認できたのは長軸6.5m、短軸5.7mで、長方形と推定され、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は11~40cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が出入り付近から竈前面まで踏み固められている。壁溝は北側の西半分から西側にかけて見られ、断面U字形である。

竈 北壁のほぼ中央部に位置し、天井部から右袖までが第206号土坑により破壊されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅は100cmである。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込み、外傾して緩やかに立ち上がり、煙道に沿って粘土を貼りつけてある。天井部は崩落し、砂質粘土を主とする構築材が、前面へ流れ出している。左袖は、火床部に面した部分が赤変硬化している。火床部はわずかにくぼみ、焼上が厚く堆積し赤変硬化している。

竈土層解説

1 暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量	5 暗赤褐色	焼土ブロック少量
2 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	6 暗赤褐色	焼土粒子少量
3 暗灰色	砂質粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	7 灰褐色	砂質粘土粒子多量
4 暗灰色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量		

ピット 5か所。P1・P3・P4は、深さ30~70cmの主柱穴である。配例を考え南東部の床面を精査したが、対応する主柱穴は確認できなかった。P2は深さ25cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5の性格は不明である。

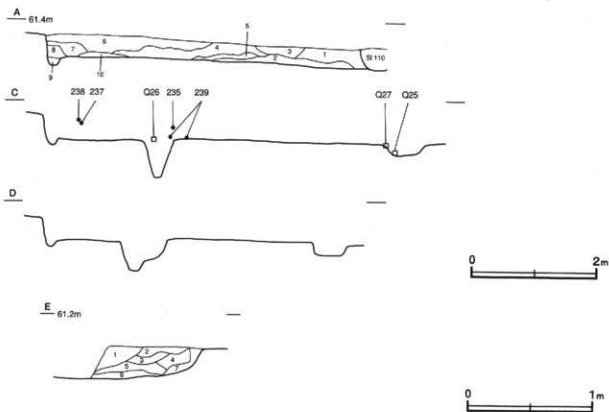
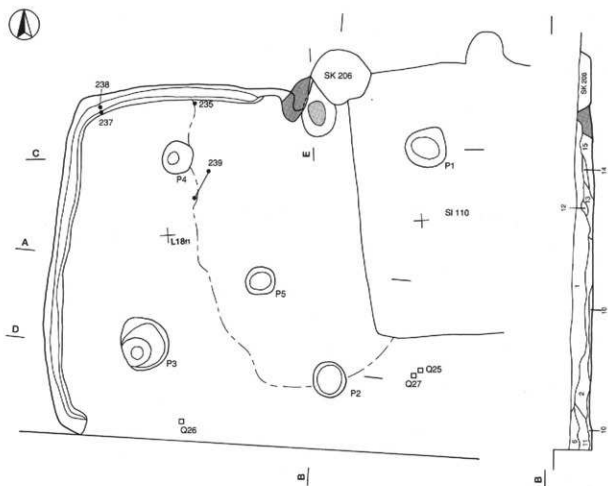
覆土 15層からなる。第14・15層は、竈から流出した上層である。他は炭化物や粘土粒子を含む不規則な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

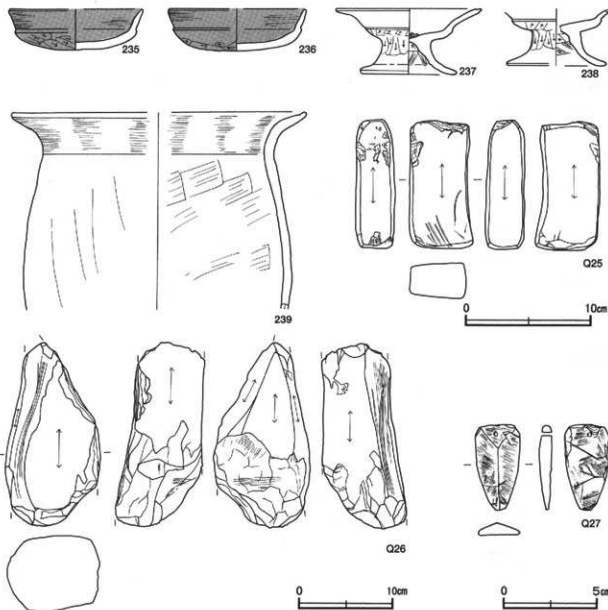
1 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
2 黒色	ローム粒子微量	10 褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量	11 暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	12 灰黄褐色	砂質粘土粒子多量、炭化物微量
5 に近い黄褐色	ローム粒子中量	13 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
6 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	14 暗灰色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量	15 赤褐色	焼土粒子多量
8 暗褐色	砂質粘土粒子少量		

遺物出土状況 土師器片930点(坏頸206, 甕頸695, 高坏29), 須恵器片21点(坏頸18, 甕頸3), 石器2点(砥石), 石製品1点(剣形模造品), 鉄製品1点(刀子)の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片7点, 弥生土器片34点が出土している。同形の237・238は北西コーナーの覆土上層から横位で、239は中央の床面から破片で、Q25・Q26・Q27はいずれも床面から出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 当遺跡の同時期の中では規模が比較的大きく、同じ器形の小型高坏2点や剣形石製模造品が出土していることから、集落の中で何らかの性格を持たされた住居であると考えられる。時期は、出土土器から6世紀末から7世紀初めと考えられる。



第64图 第111号住居跡実測图



第65図 第111号住居跡出土遺物実測図

第111号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
235	土師器	坏	[10.6]	3.2	-	赤色粒子・白色粒子	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、口縁部・体部内面焼ナデ	礎礎 覆土上層	25%
236	土師器	坏	[10.8]	3.3	-	赤色粒子・白色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、口縁部・体部内面焼ナデ	礎礎 覆土中	30%
237	土師器	高坏	11.6	5.3	7.5	石英・赤色粒子	赤	普通	口縁内面に沈着、体部へラ削り	礎礎 覆土上層	98% PL88
238	土師器	高坏	- (4.5)	[7.6]	-	石英・赤色粒子	赤	普通	脚部へラ削り、体部中央に流成煎穿孔	礎礎 覆土上層	55% 器台に転用か
239	土師器	甕	[23.6]	(15.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ、内面へラナデ	床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q25	砥石	(10.1)	5.1	2.88	(261.0)	粘板岩	砥面4面	床面	
Q26	砥石	(19.4)	10.1	9.4	(1700.0)	砂岩	砥面4面	床面	PL104
Q27	剣形磨盤	4.4	2.4	0.7	8.5	滑石	孔径0.2、周縁部面取、磨き	床面	PL104

第128号住居跡（第66～68図）

位置 調査区東部のL17d1区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

重複関係 第236号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西側が調査区域外に延びており全形は不明である。確認できたのは東壁3.3m、北壁2.9mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は20cmで、各壁ともほぼ直立している。
床 ほぼ平坦である。

竈 北壁の中央部に位置しているが、擾乱により破壊されており、覆土の堆積状況は不明である。規模は袖部幅が100cmほどと推定される。右袖付近からは甔が横位で、両袖付近からは焼土が付着した甔が破片の状態で出土している。

ピット P1は深さ56cmで、柱穴と考えられる。

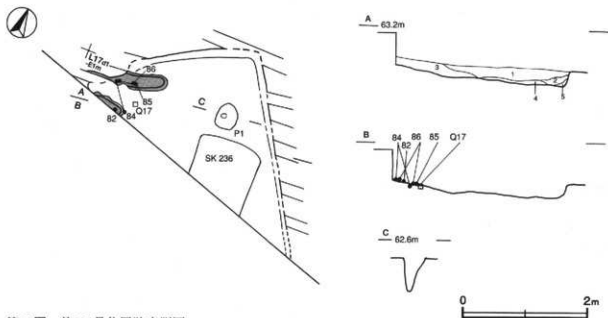
覆土 5層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

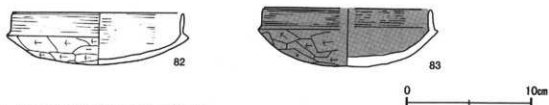
1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子少量
2 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 明褐色	ローム粒子少量
3 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片228点（坏類20、甕類207、高坏1）、須恵器片1点（坏類）、石器1点（砥石）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片4点が出土している。84・85・86は竈袖部付近の床面から、Q17は竈前面の床面から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

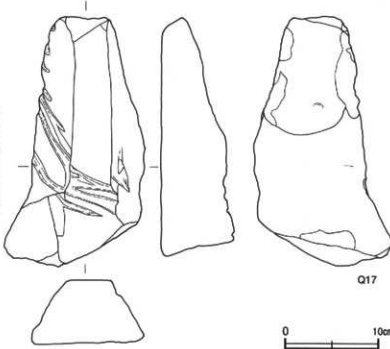
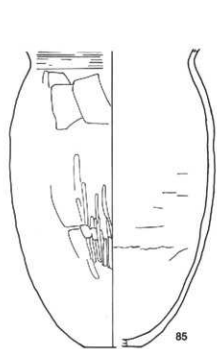
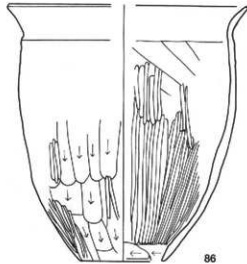
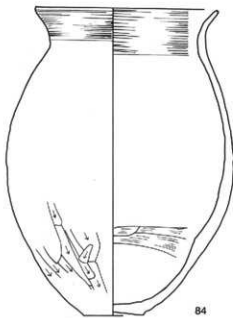
所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第66図 第128号住居跡実測図



第67図 第128号住居跡出土遺物実測図(1)



第68図 第128号住居跡出土遺物実測図(2)

第128号住居跡出土遺物観察表 (第67・68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
82	土師器	坏	13.1	4.3	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	床面	80% PL85
83	土師器	坏	[13.2]	4.7	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	覆土中	52%
84	土師器	甕	19.2	32.3	6.2	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り後ナデ	床面	75% 瓦土付着 PL90
85	土師器	甕	-	(31.2)	[5.8]	石英・長石・赤色 雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り後ナデ、一部へラ置き	床面	65%
86	土師器	瓶	[24.9]	27.0	9.1	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り後一部へラ置き、内面へラ置き	床面	50%

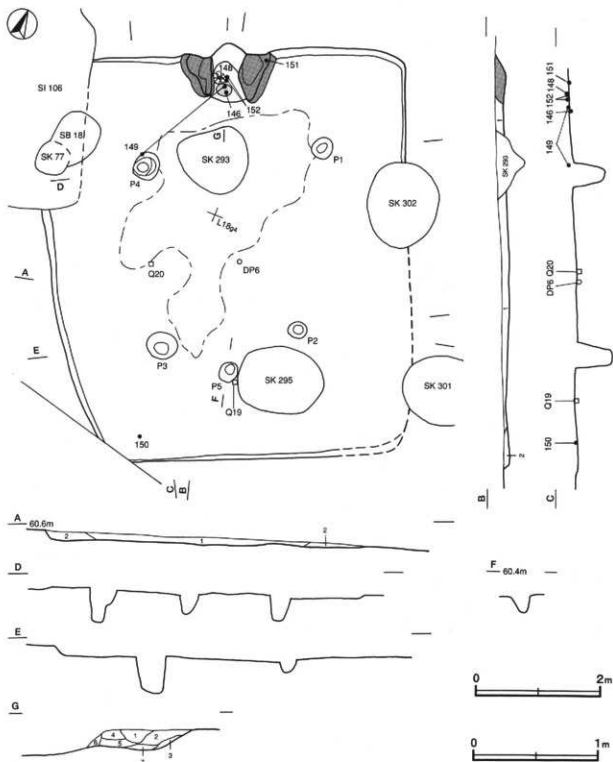
番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	砥石	26.5	14.7	7.8	3030.0	砂岩	表面に14条の研磨痕	床面	

第160号住居跡 (第69・70図)

位置 調査区東部のL18g4区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第106号住居、第18号掘立柱建物、第77・293・295・301・302号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西コーナーがわずかに調査区域外へ伸びているがほぼ全体を確認でき、長軸6.5m、短軸5.8mの長方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は5~15cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。



第69図 第160号住居跡実測図

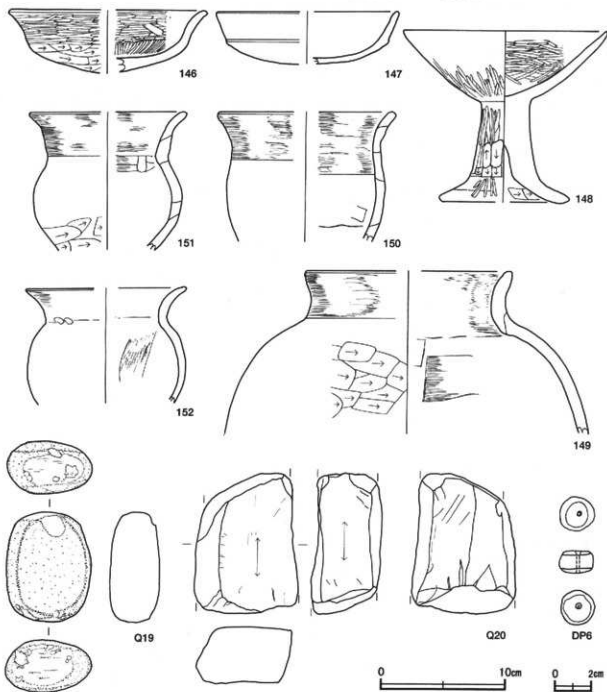
床 ほぼ平坦で、竈前面を中心に踏み固められている。

竈 北壁のほぼ中央部に位置し、上部は削平されている。規模は、焚き口部から煙道部先端まで150cm、袖部幅は130cmである。煙道部は壁外へ10cmほど掘り込み、外傾して緩やかに立ち上がっている。天井部は削平を受けているため残存していないが、竈の覆土に崩落した粘土が見られないことから、竈廃絶時に取り除かれたと考えられる。袖部は地山上に粘土を貼り付けて構築されているが、粘土の残存はわずかである。また、左袖内側が被熱で赤変硬化している。火床部は皿状にくぼみ、赤変硬化しているが、焼土はほとんど堆積していない。火床部奥の左袖寄りに高環が逆位で、その奥から小形甕の破片が出土している。

竈土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ローム粒子少量



第70図 第160号住居跡出土遺物実測図

- 3 褐色 ローム粒子中量
4 黒褐色 炭化物・焼土粒子微量
5 黒褐色 焼土粒子微量

- 6 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
7 褐色 ローム粒子中量、しまり強

ピット 5か所。P1～P4は、深さ25～60cmの主柱穴である。P5は深さ30cmで、両壁の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなる。覆土が薄く、堆積経緯は不明である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、しまり強 2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片290点（坏類63、甕類217、高坏10）、石器2点（磨石1、砥石1）、土製品1点（土王）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片2点、弥生土器片21点が出土している。146・147は火床部上から、148・152は火床部奥から、151は右袖上部から、それぞれ出土している。また149・Q19・Q20・DP6はいずれも床面より出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 竈の袖部や火床部にはしっかりと使用した痕跡がありながら、竈内に焼土がわずかしか残存しておらず、竈から逆位で出土した高坏に被熱痕が認められないことから、廃棄する前に竈内の灰を取り除いたり、高坏を伏せたりする行為を伴う竈祭祀が行われたものと考えられる。さらに、重複する第295号土坑から同形の高坏が出土していることから、祭祀に使用した土器を住居廃絶時に埋めた可能性もある。時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初めと考えられる。

第160号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手状の特徴	出土位置	備考
146	土師器	坏	[15.4]	4.9	-	石灰・炭石・赤色 粘土・雲母	橙	普通	口縁部ヘラ跡、体部外縁ヘラ 跡、内面放射状のヘラ跡	竈	30%
147	土師器	坏	[14.1]	4.2	-	赤色粘土・赤色 粘土・雲母	橙	普通	口縁部ヘラ跡、器底死のた め裏割不明	竈	30%
148	土師器	高坏	16.3	13.7	[9.5]	石灰・炭石・赤色 粘土・雲母	橙	普通	坏部外面ヘラ跡、脚部傾り 後ヘラ跡	火床部奥	80% PL88
149	土師器	甕	[16.4]	(13.0)	-	石灰・炭石・赤色 粘土・雲母	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ跡、脚部ヘ ラ跡立後ヘラ跡	覆土下層	20%
150	土師器	小形甕	[14.0]	(10.3)	-	石灰・炭石・雲母	褐色	普通	体部内外面ナデ	床面	10% 外面面付古 縁接合
151	土師器	小形甕	[12.4]	(11.0)	-	石灰・炭石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ跡、内面ナデ	袖部上	20%
152	土師器	小形甕	[12.6]	(9.2)	-	石灰・炭石・赤色 粘土・雲母	にぶい橙	普通	頸部指痕、体部内面ナデ	火床部奥	15%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	土王	1.8	1.1	0.2	3.5	土	ナデ	床面	PL103

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	磨石	8.8	6.5	4.2	378.0	安山岩	両端に使用痕	床面	
Q20	砥石	(11.2)	8.3	5.6	(662.0)	粘板岩	縦割2回	床面	

第162号住居跡（第71図）

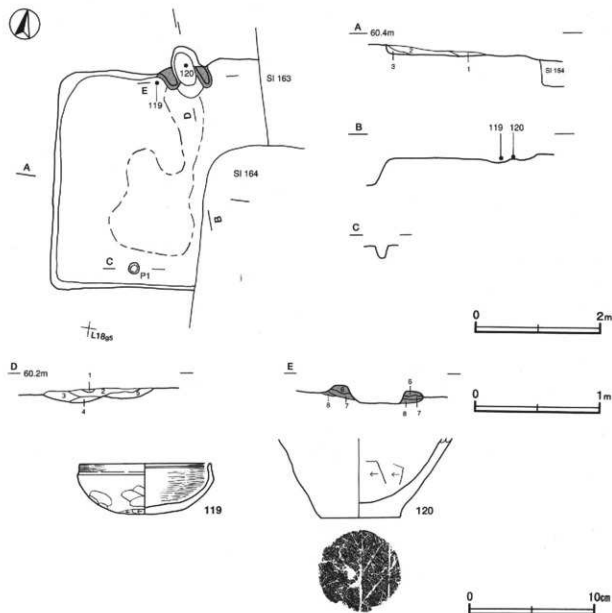
位置 調査区東部のL185区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第163・164号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認できたのは長辺3.4m、短辺3.2mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は15～21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平床で、竈前面から中央部が踏み固められている。東半分は削平されている。

竈 北壁の中央部に位置し、上部は削平を受けている。規模は焚き口部から煙道部先端まで80cm、袖部幅は80cmである。煙道部は奥側に30cmほど掘り込み、外傾して緩やかに立ち上がっている。天井部は崩壊したと推定



第71図 第162号住居跡・出土遺物実測図

され、第1層にわずかに痕跡が見られる。袖部は、地山にローム土を積み上げ、さらに砂質粘土を盛り上げて構築されている。火床部は、皿状にわずかにくぼみ硬化している。奥に土師器甕の底部が正位で出土している。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 6 褐灰色 | 砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 灰黄褐色 | ロームブロック・砂質粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック少量 |

ピット P1は深さ20cmで、南壁際に位置している。やや西寄りではあるが、硬化面の広がる手前であることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片23点(環頸3、壺頸20)の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片3点が出土している。119は竈左側床面から、120も室内からそれぞれ正位で出土しており、何れも住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。

第162号住居跡出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
119	土師器	杯	103	4.0	-	石灰・炭石・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	体部外面ナデ、内面砥ナデ、 送移へず滑り	床面	100% PL85
120	土師器	壺	-	(6.2)	6.3	石灰・長石	にぶい赤褐色	普通	体部内外面ナデ、底部本裏板	火床部上	10%

第167号住居跡(第72・73図)

位置 調査区東部のL18h5に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第161号住居跡を掘り込み、第165号住居、第300号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外に延びており全容は不明である。確認できたのは長辺7.6m、短辺4.8mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は35-50cmで、各壁とも直立している。

床 ほぼ平坦で、北東コーナー部を除き踏み固められている。焼土・炭化物混じりのローム上で貼床されている。壁溝は窓部を除いた北壁下に見られ、断面J字形である。

竈 北壁の中央部東寄りに位置している。規模は焚き口部から煙道部先端まで130cm、袖部幅は100cmである。煙道部は壁に沿って立ち上がった後、わずかに外傾して立ち上がっている。天井部は前面に向かって崩落しており、第3層がこれに該当する。右袖部は、先端が調査中に失われてしまったが、地山上にローム上で土台を作りその上に粘土を盛り上げている。左袖部は焼土を含むローム土を積み上げた後、砂質粘土を貼り付けて構築されている。また、火床部に面する部分は赤変硬化している。火床部は皿状にわずかにくぼみ、焼土が厚く堆積している。掘り方は第21・22層が該当し、長径100cm、短径90cmの楕円形に掘り込んだ後、焼土・粘土粒子混じりのローム土で埋め戻している。左袖は掘り方上に構築されていることから、作り替えが行われたと考えられる。火床部の奥から土師器高環、煙道部付近に土師器杯が何れも逆位で出土している。

竈土層解説

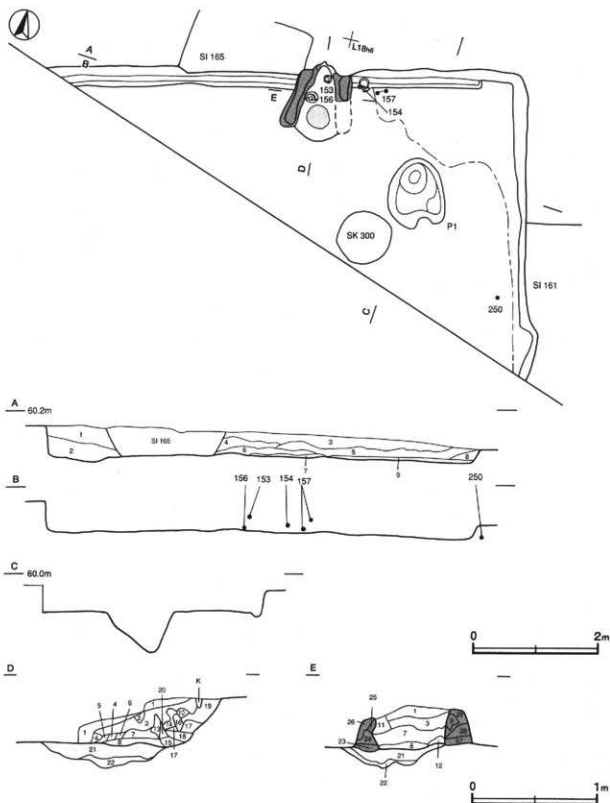
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量	16 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	17 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
3 灰褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量	18 黒褐色	砂質粘土粒子少量
4 暗褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量	19 灰褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子微量	20 黒褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子微量
6 灰褐色	砂質粘土粒子中量	21 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	22 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量
8 暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子微量	23 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量
9 暗赤褐色	赤変した粘土粒子多量	24 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
10 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	25 にぶい赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
11 灰褐色	砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量	26 灰褐色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量
12 灰褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量	27 灰褐色	ローム粒子少量
13 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量	28 暗褐色	ローム粒子・砂質粘土粒子微量
14 にぶい赤褐色	焼土粒子・粘土粒子多量	29 灰褐色	砂質粘土粒子多量
15 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子微量		

ピット P1は深さ70cmで主柱穴と考えられる。

覆土 9層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。第9層は貼床の上層である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物粒子微量	2 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量
-------	------------------------	-------	---------------

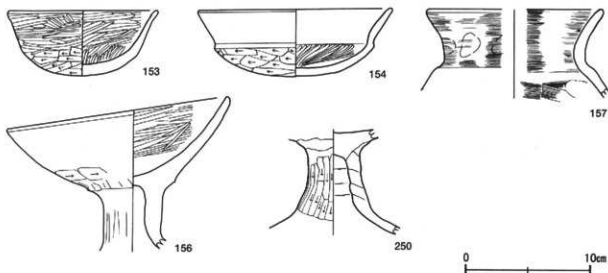


第72図 第167号住居跡実測図

- | | | | |
|--------|----------------------------------|-------|--------------------------------|
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片184点（坏類48、甕類116、高坏20）の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片2点、弥生土器片11点が出土している。153・156は竈内から逆位で、154は竈右の壁際から正位で出土している。250は東壁付近の床面から出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 竈から出土している坏や高坏に被熱痕が認められないことから、隣接する第160号住居跡と同様に、住居廃絶に伴い、高坏を伏せる行為を伴う竈祭祀が行われたものと考えられる。しかし、竈本体の様相が異なる点は、なお検討の必要がある。時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初めと考えられる。



第73図 第167号住居跡出土遺物実測図

第167号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
153	土師器	坏	11.8	5.2	-	石英・長石	赤褐色	普通	体部内外面ヘラ磨き、底部ヘラ削り	煙道部	95% PL86
154	土師器	坏	15.2	5.4	-	石英・長石	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き	壁際 覆土中層	100% PL86
155	土師器	高坏	17.8	(12.3)	-	石英・長石・赤色 粒子	橙	普通	坏部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き、唇部ヘラ削り後一部磨き	火床部奥 PL88	75% 坏部内面覆付層
250	土師器	高坏	-	(8.5)	-	石英・雲母	明赤褐色	普通	脚部ヘラ削り	床面	35% 葉付者、被熱痕
157	土師器	甕	[13.8]	(7.1)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ、体部内外面ナデ	壁際 覆土中層	10%

第168号住居跡（第74図）

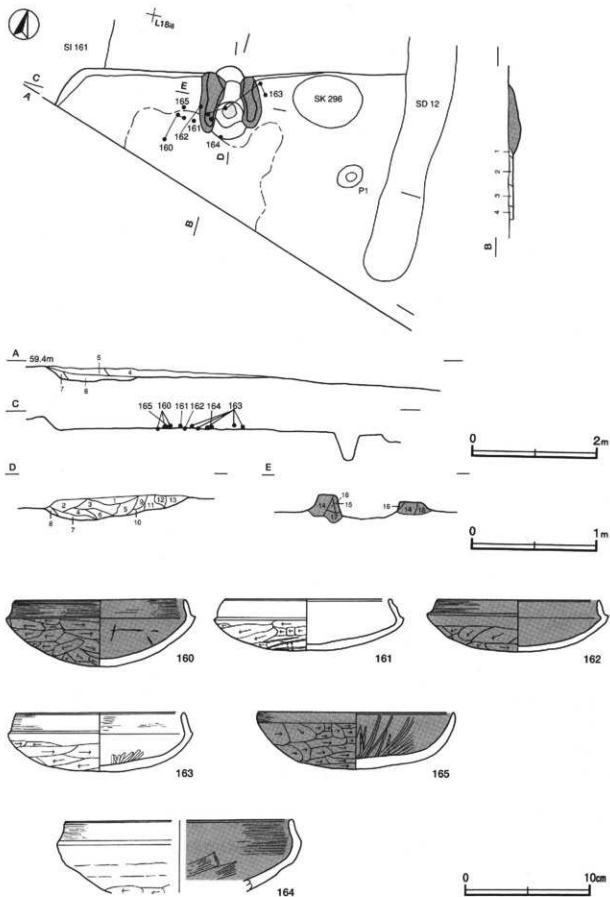
位置 調査区東部のL1818区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第161号住居跡を掘り込み、第12号溝、第296号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南が調査区域外に延びており全容は不明である。確認できたのは長辺5.5m、短辺0.8mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は7~20cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は焚き口部から煙道部先端まで120cm、袖部幅は100cmである。煙道部は壁外へ若干掘り込み、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落し、構築材の砂質粘土が第9~13層に見られる。袖部は焼土・炭化物を含むローム土上に砂質粘土を盛り上げて構築されており、火床部付近は赤変硬化している。火床部は皿状にくぼみ赤変している。



第74图 第168号住居跡・出土遺物実測図

覆土層解説

1 暗赤褐色	焼土ブロック少量, ローム粒・焼土粒子微量	10 暗赤褐色	砂質粘土粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒少量, ローム粒子微量	11 暗赤褐色	炭化粒子少量, 焼土粒子・砂質粘土粒子微量
3 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒少量	12 にぶい赤褐色	砂質粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒少量	13 暗赤褐色	砂質粘土粒少量, 焼土ブロック・炭化物微量
5 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 砂質粘土粒少量	14 灰黄色	砂質粘土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量	15 明赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量
7 暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒少量, 炭化粒子微量	16 にぶい赤褐色	砂質粘土粒中量, 焼土ブロック少量
8 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗赤褐色	砂質粘土粒中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量
9 灰褐色	砂質粘土粒少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	18 にぶい黄褐色	砂質粘土粒中量, ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット P1は深さ40cmで主柱穴と考えられる。

覆土 7層からなる。第1層は竈から流出した土層である。他は、西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗赤褐色	炭化物・焼土粒子少量, ロームブロック微量	5 黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒微量	7 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片73点(坏類36, 甕類33, 高坏4)が出土している。土師器片は竈周辺に集中しており, 覆土下層から床面にかけて出土している。161・162・165は左袖脇からまとまって, 163は竈内の覆土および竈石の床面から破片の状態で出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第168号住居跡出土遺物観察表 (第74回)

番号	機別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地味	手法の特徴	出土位置	備考
160	土師器	坏	13.4	5.1	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	床面	80% PL85
161	土師器	坏	13.1	4.1	-	石英・白色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	床面	80% PL85
162	土師器	坏	13.0	4.1	-	石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	床面	80% PL85
163	土師器	坏	13.2	4.7	-	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	竈および床面	75% PL83
164	土師器	坏	[17.9]	(5.7)	-	石英・長石・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	床面	25%
165	土師器	坏	15.6	4.5	-	石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削り, 内面磨きのヘラ磨き	床面	80% PL83

第170号住居跡 (第75~77回)

位置 調査区東部のL18h0区に位置し, 東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第169号住居跡を掘り込み, 第173号住居に掘り込まれている。

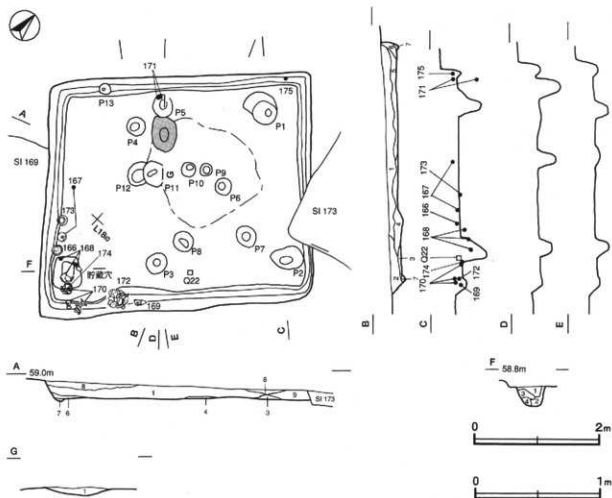
規模と形状 長軸4.3m, 短軸3.8mの長方形で, 主軸方向はN-41°-Wである。壁高は15~30cmで, 各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で, 炉付近の中央部が踏み固められている。壁溝は全周し, 断面U字形である。

炉 北壁近くに位置している。長径60cm, 短径40cmの楕円形で, 床面が皿状にくぼみ, 火床部は赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量



第75図 第170号住居跡実測図

ピット 13か所。P1～P4は深さ20～40cmで主柱穴である。P5は深さが36cmで炉の北側に位置しており、覆土上及び覆土中から土師器甕の破片が出土している。P7・P8・P11は深さ30～20cmで、配置から補助の柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長軸50cm、短軸40cmの長方形で、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中から土師器が出土している。

貯蔵穴土層解説

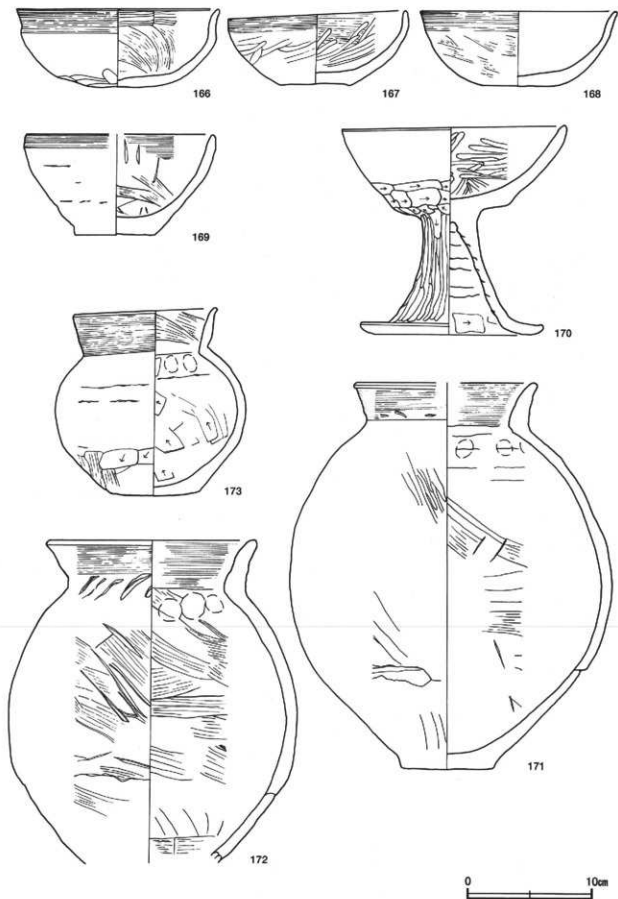
- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |

覆土 9層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

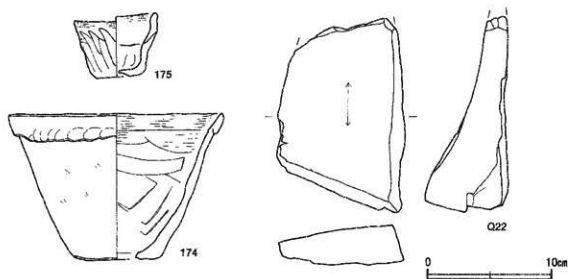
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量、粘性強 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量 | 9 黒褐色 | ローム粒子中量、しまり強 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片177点（坏類26、甕類127、高坏23、ミニチュア1）、石器3点（砥石）の他、埋没時に混入したと考えられる縄土器片1点、弥生土器片7点が出土している。出土した土器は南側の覆土下層から床面に多く見られ、特に貯蔵穴周辺に集中している。166は斜位、167は逆位、173は正位で貯蔵穴北側の床面から並んで出土している。168は破片の状態です貯蔵穴の覆土中層から、170は南西コーナーの床面から坏部と



第76图 第170号住居跡出土遺物実測図(1)



第77図 第170号住居跡出土遺物実測図(2)

脚部が分かれた状態でそれぞれ出土している。171はP5の覆土中から破片で、甌を模した175は北東コーナー部から逆位で出土している。これらは住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見 主柱穴の配置が東側に寄っており、住居西側に空間がある。この空間は、南西部から土器が多く出土していることや貯蔵穴と考えられる掘り込みが見られることから、取納・貯蔵場所としての役割を持っていたと推測される。また、高坏・ミニチュアが南西と北東のコーナー部から出土しており、住居廃絶時に何らかの祭祀的な行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。

第170号住居跡出土遺物観察表 (第76・77図)

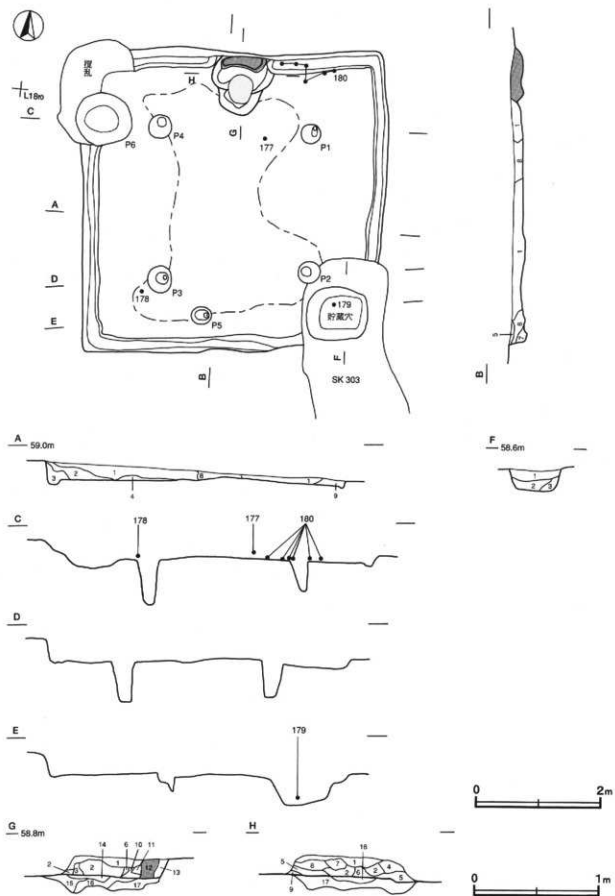
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
166	土加器	坏	15.9	6.3	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内面ハケ目、体部外面下部へラ削り、内面ヘラナデ	床面	55%	PL86
167	土加器	坏	14.2	3.6	3.4	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部内外面ヘラ磨き、底部ヘラ削り	床面	90%	PL86
168	土加器	坏	15.6	6.0	5.1	石英・長石	明赤褐	普通	体部内外面ナデ、底部ヘラ削り	貯蔵穴 覆土中層	70%	PL86
169	土加器	甌	14.8	8.0	6.2	石英・長石・赤色 粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ削り後ナデ、底部木炭灰	覆土下層	40%	
170	土加器	高坏	17.8	16.7	14.7	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	外部外面ヘラ削り、内面不定方向へラ磨き、脚部外面ヘラ磨き	床面	65%	PL88
171	土加器	甕	14.1	30.9	7.3	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外部一部へラ磨き、内面削り後ナデ、底部ナデ	P5覆土中	60%	PL91
172	土加器	甕	16.3	(25.8)	-	長石・赤色粒子・ 雲母	にぶい橙	普通	体部外部ハケ目、内面ヘラ削り後ナデ	床面	55%	PL91
173	土加器	小形甕	11.2	15.0	7.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ、体部外面ハケ目	床面	90%	PL90
174	土加器	甌	17.2	11.7	6.9	石英・長石	橙	普通	口縁部折り曲げ、体部内面ヘラナデ、単孔或器	床面	60%	PL92
175	土加器	ミニチュア	6.7	4.3	3.2	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内外面ナデ、瓶嘴状	貯蔵 覆土下層	100%焼成済	PL92

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	紙石	(15.5)	10.2	6.7	(762.0)	片岩	紙面1面	覆土下層	

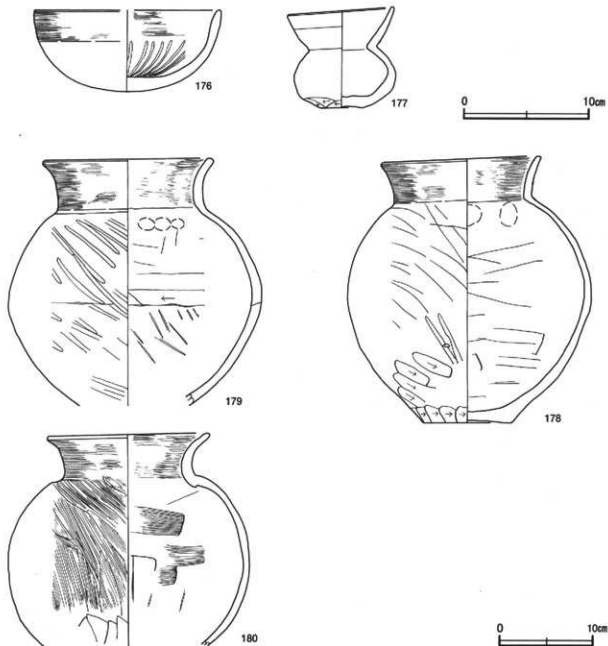
第172号住居跡 (第78・79図)

位置 調査区東部のL180区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第303号土坑に掘り込まれている。



第78图 第172号住居跡実測图



第79図 第172号住居跡出土遺物実測図

規模と形状 長軸4.9m, 短軸4.8mの方形で, 主軸方向はN-3°-Wである。壁高は20~30cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝は竈部を除き巡っており, 断面U字形である。

竈 北壁の中央部に位置しているが, 本体は破壊されており, ほとんど残存していない。掘り方から推定される規模は, 焚き口部から煙道部まで90cm, 袖部幅は90cmである。壁外への掘り込みはなく, 手前に構架材と推測される粘土塊が見られる。火床部は皿状にくぼみ赤変硬化しており, 焼土が5cmほど堆積している。掘り方は焚き口付近から壁まで二段階の掘り下げが見られ, 奥から順に埋め戻している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|----------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 4 灰褐色 | 炭化物少量, 焼土粒子微量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子・焼土ブロック中量, 炭化物・砂質 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 明褐色 | 粘土粒子微量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子多量 |
| | ローム粒子多量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |

8 灰褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・砂質粘土粒子	13 暗褐色	ローム粒子少量
9 褐色	炭化物微量	14 暗赤褐色	焼土粒中量、炭化物微量
10 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック少量
11 灰褐色	焼土粒多量、粘土粒子少量	16 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
12 暗赤褐色	赤化した粘土粒多量	17 褐色	ローム粒少量、黒色粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ50～70cmで主柱穴である。P5は深さ30cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6の性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長軸100cm、短軸80cmの長方形で、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中層から土師器片が出土している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	3 褐色	ローム粒子多量
2 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量		

覆土 9層からなる。床面上から覆土下層に大量の石が混入しており、ロームブロックが不規則に見られることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子中量、炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック微量
4 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量		

遺物出土状況 土師器片396点（坏類62、甕類333、埴1）、須恵器片1点（甕類）、鉄滓3点の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片5点、石器1点（剥片）が出土している。178・180は床面から、179は貯蔵穴覆土中層から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。176・177は覆土下層から出土しており、廃絶直後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から3世紀後半と考えられる。

第172号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考																																				
176	土師器	坏	14.6	6.5	-	石灰・長石	明赤褐	普通	体部外面ナデ、内面放射状のヘラ突き	覆土下層	40%																																				
177	土師器	埴	8.3	8.0	3.2	石灰・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ、底部ヘラ張り	覆土下層	90%	178	土師器	甕	16.3	28.2	9.3	石灰・長石・赤色粒子・黒色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面上部ヘラナデ、下部ヘラ張り、内面ヘラナデ	床面	80%	179	土師器	甕	17.6	(26.1)	-	石灰・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ突き、内面上部ヘラナデ、下部ヘラ張り後ナデ	貯蔵穴覆土中層	70%	180	土師器	甕	16.8	(22.6)	-	石灰・長石・雲母	灰赤	普通	体部外面ハケ目、内面ヘラナデ	床面	60%
178	土師器	甕	16.3	28.2	9.3	石灰・長石・赤色粒子・黒色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面上部ヘラナデ、下部ヘラ張り、内面ヘラナデ	床面	80%	179	土師器	甕	17.6	(26.1)	-	石灰・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ突き、内面上部ヘラナデ、下部ヘラ張り後ナデ	貯蔵穴覆土中層	70%	180	土師器	甕	16.8	(22.6)	-	石灰・長石・雲母	灰赤	普通	体部外面ハケ目、内面ヘラナデ	床面	60%												
179	土師器	甕	17.6	(26.1)	-	石灰・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ突き、内面上部ヘラナデ、下部ヘラ張り後ナデ	貯蔵穴覆土中層	70%	180	土師器	甕	16.8	(22.6)	-	石灰・長石・雲母	灰赤	普通	体部外面ハケ目、内面ヘラナデ	床面	60%																								
180	土師器	甕	16.8	(22.6)	-	石灰・長石・雲母	灰赤	普通	体部外面ハケ目、内面ヘラナデ	床面	60%																																				

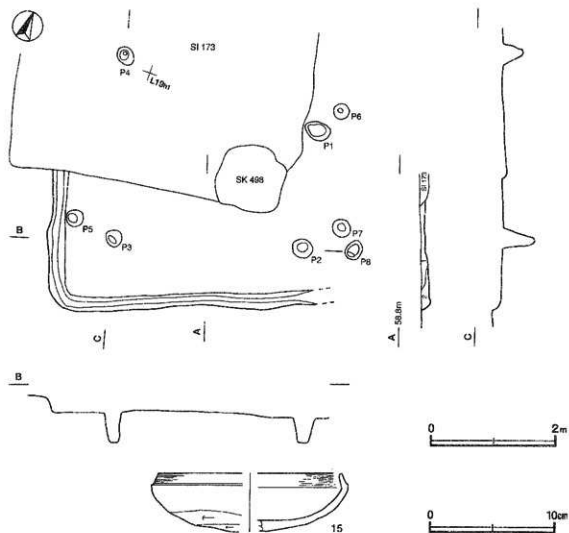
第174号住居跡（第80図）

位置 調査区東部のL19h1区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第173号住居・第498号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東側が削平されており全容は不明である。確認できたのは長辺4.2m、短辺2.2mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-20°-Wである。残存する壁高は18～22cmで、外傾して立ち上がっている。床 は平坦である。壁溝は南壁から西壁にかけて見られ、断面U字形である。

ピット 8か所。P2～P4は深さ30～50cmで主柱穴と考えられる。他のピットの性格は不明である。



第80図 第174号住居跡・出土遺物実測図

覆土 2層からなる。壁際から堆積した自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒を微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片85点（坏類20，壺類65），鉄滓1点，上製品2点（不明）の他，埋没時に混入したと考えられる縄文土器片1点，弥生土器片2点が出土している。15は南東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器から6世紀後葉と考えられる。

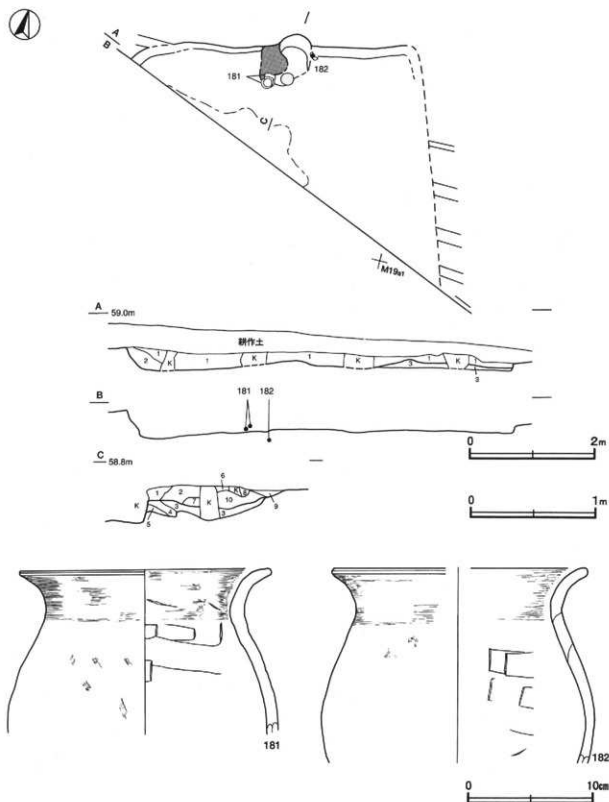
第174号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	L径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	14.5	(4.6)	-	雲母	にぶい黄褐色	普通	外部外面へテ削り，内面ナゲ	覆土下層	13%

第175号住居跡（第81図）

位置 調査区東部のL18J0区に位置し，東へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 南は調査区域外へ延びており全容は不明である。確認できたのは長辺4.5m，短辺4.0mで，方形



第81図 第175号住居跡・出土遺物実測図

または長方形と推定され、主軸方向はN-15'-Wである。壁高は10~40cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。東側は、壁と床が削平され確認できなかったが、土層の立ち上がりにより範囲を推定した。床は平坦で、竈前が踏み固められている。ローム土を含む黒色土で貼床されている。

竈 北壁の中央部に位置しているが、攪乱により構築材が破壊されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅は60cmと推定される。煙道部は壁外へ20cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。天井部は削平され確認できないが、崩落した天井部の残存が第7・9・11層に見られる。袖部は上御器甕を補強材としており、左袖には構築材の砂質粘土が残存している。第3・4・5層は掘り方の土層と考えられ、皿状に掘り込んだ後、ローム上で埋め戻されている。火床部は第3層の上面と推定される。

竈土層解説

1 褐 灰 色	ローム粒子・焼上粒少量	7 赤 褐 色	焼土ブロック中量、砂質粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量	8 暗赤褐色	焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
3 灰 褐 色	砂質粘土粒子微量	9 褐 色	焼上粒子・ローム粒子少量、砂質粘土粒子微量
4 灰 褐 色	ロームブロック微量	10 暗赤褐色	焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、ローム粒子微量
5 灰 褐 色	ロームブロック・砂質粘土粒子微量		
6 褐 灰 色	砂質粘土粒子少量、焼土ブロック少		

覆土 3層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。第3層は貼床の土層である。

土層解説

1 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック微量	3 暗 褐 色	ローム粒子微量
2 黒 褐 色	ローム粒子微量		

遺物出土状況 土師器片215点（坏類35、甕類179、高坏1）、鉄滓8点の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片4点、弥生土器片3点が出土している。181は竈左袖から正位で、182は竈右袖から北壁付近にかけて破片の状態で見出ししており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第175号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	土師器	甕	19.8	(13.2)	-	石灰・長石・赤土粒子・炭粒	赤い黄褐色	普通	外部外面ナデ、内面上部ヘラナデ	竈袖部	20% 焼土付着
182	土師器	甕	20.0	(15.6)	-	石灰・長石・炭粒	赤い赤褐色	普通	外部外面ナデ、内面上部ヘラナデ	床面	10%

第176号住居跡（第82・83図）

位置 調査区東部のL192区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第178号住居跡、第446号土坑を掘り込み、第16号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.6m、短軸4.5mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁高は10~25cmで、各壁とも直立している。

床 ほほ平坦で、竈前から中央部が踏み固められている。壁津は北壁の窓西側に見られ、断面U字形である。

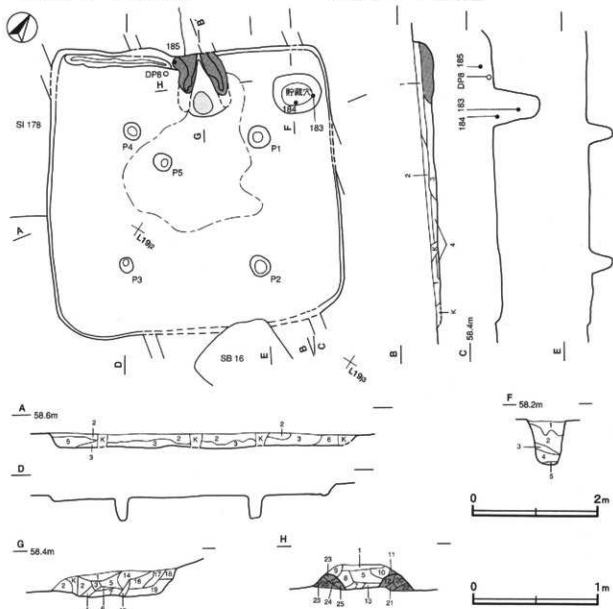
竈 北壁の中央部に位置し、規模は焚き口部から煙道部先端まで100cm、袖部幅は80cmである。煙道部は壁に沿って立ち上がっている。天井部中央は崩落し室内に堆積している。第2・3層は天井部内側で被熱した部分と考えられる。袖部は地上上にローム土を盛り、その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は皿状にわずかにくぼみ赤変硬化している。

竈土層解説

1 暗 褐 色	焼上粒少量	8 灰 褐 色	焼土ブロック少量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	9 灰 褐 色	砂質粘土粒中量、焼土粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量	10 赤い赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・砂質粘土粒子微量
4 灰 褐 色	焼上粒子・炭化粒子微量		
5 灰 褐 色	焼土ブロック・砂質粘土粒子微量		
6 黒 褐 色	焼土粒子微量	11 灰 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂質粘土粒子微量
7 赤い赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	12 暗 灰 色	砂質粘土粒子中量、焼土粒子微量

- 13 灰 褐色 ローム粒子少量
 14 灰 褐色 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
 15 にぶい黄褐色 ローム粒子多量
 16 褐 灰色 焼土ブロック・ロームブロック微量
 17 灰 褐色 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック微量
 18 灰 黄褐色 ロームブロック微量
 19 黒 褐色 ロームブロック微量

- 20 灰 褐色 砂質粘土粒子多量
 21 灰 褐色 砂質粘土粒子少量、焼土粒子微量
 22 暗 褐色 ロームブロック少量、砂質粘土粒子微量
 23 灰 褐色 焼土ブロック・砂質粘土粒子多量
 24 灰 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
 25 黄 灰色 砂質粘土粒子多量
 26 灰 褐色 ローム粒子微量



第82図 第176号住居跡実測図

ピット 5 5か所。P1～P4は深さ30～40cmで主柱穴である。P5は深さ40cmで、覆土中層に砂質粘土層があり、その下から土師器片が出土している。性格は不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径80cm、短径60cmの楕円形で、深さは70cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土中層から土師器片が出土している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|-------------|---------|-----------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子微量、粘性土 | 4 暗 褐色 | ローム粒子・覆沼パミス微量 |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子微量 | 5 にぶい褐色 | 覆沼パミス中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗 褐色 | ロームブロック微量 | | |

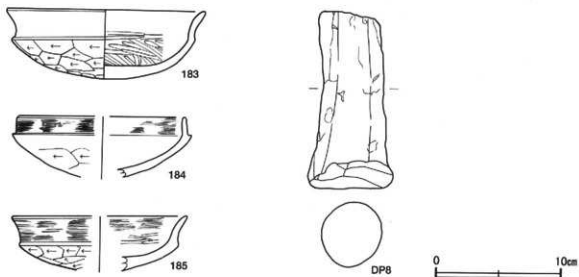
覆土 6層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	5 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片350点(坏類103, 甕類246, 高坏1), 須恵器片4点(甕類), 土製品片3点(支脚), 鉄滓19点の他, 埋没時に混入したと考えられる縄文土器片8点, 弥生土器片8点が出土している。183は逆位で, 184は破片で貯蔵穴から出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 185は竈左脇上部から, DP8は左袖西側の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第83図 第176号住居跡出土遺物実測図

第176号住居跡出土遺物観察表(第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
183	土師器	坏	15.7	5.5	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き	貯蔵穴	100% PL86
184	土師器	坏	[13.2]	(4.8)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面横ナデ	貯蔵穴	15%
185	土師器	坏	[13.2]	(4.3)	-	赤色粒子・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	竈輪部上	10%

番号	器種	長さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP8	支脚	14.1	4.7~6.8	-	485.0	土	ナデ, 縦熟痕有り	床面	PL103

第178号住居跡(第84図)

位置 調査区東部のL191区に位置し, 東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第176号住居, 第306号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.3m, 短軸3.6mの長方形で, 主軸方向はN-50°-Wである。壁高は16~23cmで, 各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほは平坦で, 北壁際の中央部が踏み固められている。壁溝は東壁の一部を除き巡っており, 断面U字形である。

ピット 3か所。P1・P2は深さ20~40cmで柱穴と考えられる。P3の性格は不明である。

覆土 3層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積と考えられる。

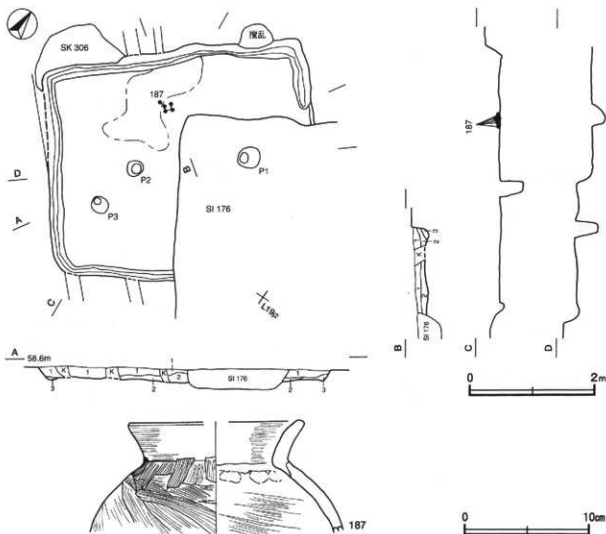
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量

- 3 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片73点（坏類26，甕類47），鉄滓2点の他，埋没時に混入したと考えられる弥生土器片2点，後世の耕作等で混入したと考えられる須恵器片3点（甕類）が出土している。187は，北部の床面から出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第84図 第178号住居跡・出土遺物実測図

第178号住居跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
187	土師器	甕	[13.7]	(8.9)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ハケ目，内面ナデ	床面	20%

第183号住居跡（第85図）

位置 調査区東部のL19e2区に位置し，東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第185号住居跡を掘り込み，第445・454・456号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東側が削平されており全容は不明である。確認できたのは長辺3.8m、短辺2.5mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-0°である。壁高は22cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、竈前から中央部が踏み固められている。東半分は削平され確認できない。壁溝は竈の部分を除き巡っており、断面U字形である。

竈 北壁の中央部に位置しているが、ほとんど削平されており覆土も確認できない。粘土塊は左袖と推測され、径30cmの円形を呈する焼土溜まりは火床部と考えられる。

ピット 2か所（P1・P2）。性格は不明である。

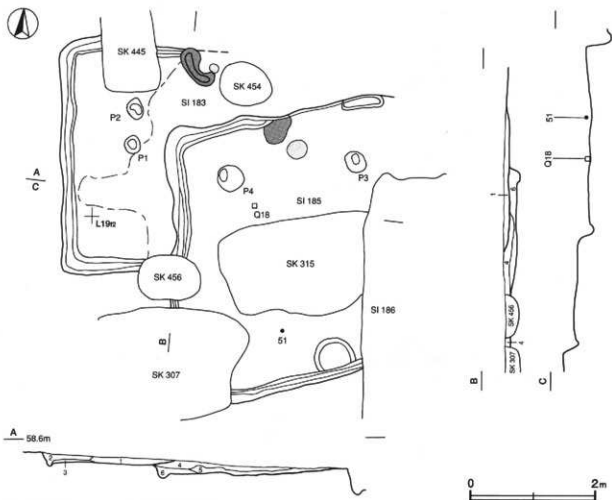
覆土 3層からなる（第1～3層）。覆土が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|---------------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色
ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒
子微量 | 2 黒褐色
炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 3 褐色
ローム粒子中量 | |

遺物出土状況 土師器片3点（坏類1，変類2）が出土している。いずれも小片で図化できなかった。

所見 時期は、7世紀中葉と推定される第185号住居跡を掘り込んでいることと出土遺物から、7世紀後半ごろと考えられる。

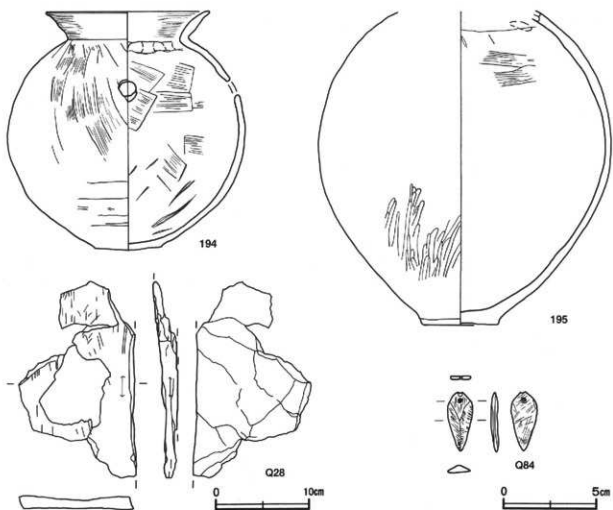
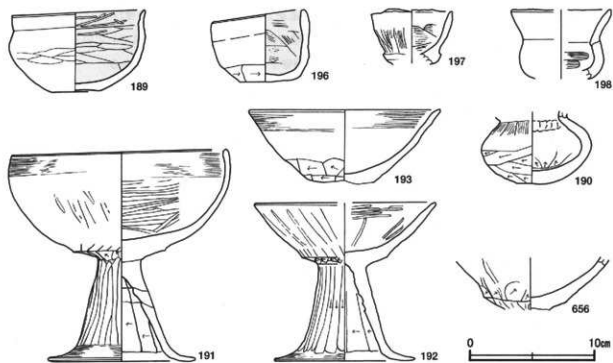


第85図 第183・185号住居跡実測図

第184号住居跡（第86図）

位置 調査区東部のL19g3区に位置し、東側へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第186・188号住居、第3号地下式墳、第309・331・348・391・393・429号土坑に掘り込まれている。



第87图 第184号住居跡出土遺物実測図

規模と形状 東側は削平されており全容は不明である。確認できたのは長軸7.1m、短軸7.0mで、ピットの位置から方形と推定され、主軸方向はN-18°-Eである。壁高は14~30cmで、各壁とも直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は南壁下に見られ、断面U字形である。

ピット 12か所。P1~P4は深さ70~80cmで、主柱穴である。またP3・P4には柱状が見られ、第5層が該当する。P11・P12は南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他のピットの性格は不明である。

ピット土層解説 (P1~P4)

1 褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量	7 濃い黄褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ローム粒子少量		

覆土 14層からなる。壁際や中心部から堆積していることや、覆土中に炭化物が多く含まれ、ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、炭化物少量	8 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	炭化物・ローム粒子中量	9 黒褐色	炭化物中量、ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量	10 褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ローム粒子中量、炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
5 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	12 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
6 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	13 暗褐色	ロームブロック微量
7 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量	14 黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片443点(環類81、甕類323、高坏27、埴1、ミニチュア11)、鉄滓8点、石器3点(砥石)、石材54点の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片14点、後世の耕作等で混入したと考えられる須恵器片16点(環類8、甕類8)が出土している。190・196は南壁際の床面から横位で、189・191・192は北西部の覆土下層から横位で、194・195・197は床面から破片の状態ですれぞれ出土しており、これらは住居廃絶時に棄棄されたものと考えられる。Q28は破壊された状態で南西部の覆土中層から出土しており、周りに多数の石材が出土している。また、656・Q84は中近世と考えられる重複する土坑から出土しており、いずれも本跡に伴う遺物の可能性があるため、本稿で取り上げた。

所見 面積が約49㎡と推定され、古墳時代中期の住居跡では当遺跡最大である。ミニチュアや複数の高坏が投げ込まれたような状態で出土していることや、重複する土坑から本跡に伴うと考えられる剣形石製模造品が出土していることから、住居廃絶に伴い何らかの祭祀的な行為があったと考えられる。また、炭化物・炭化材が多く見られるが、覆土中から焼土が検出されないことから、これらは焼失によるものではなく廃絶後に投棄されたものと考えられる。また、石材や砥石が大量に出土していることから、工人の存在も考えられる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。

第184号住居跡出土遺物観察表 (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
189	土師器	甕	10.5	6.5	3.8	灰石・雲母	赤褐色	普通	口縁部内面一部へラ磨き、体部外面ナデ、内面縁状上縁によるナデ	覆土下層	80%内面赤彩 P187
190	土師器	埴	-	(5.8)	2.4	石英・長石・赤色粘土・雲母	橙	普通	体部外面へラ削り、頸部内面指跡土孔、底部ナデ	床面	70%
191	土師器	高坏	16.9	16.8	11.7	石英・長石・赤色粘土・雲母	橙	普通	環部内面・脚部へラ磨き、脚接合部へラ削り	覆土下層	55% P188
192	土師器	高坏	[14.4]	12.6	11.0	石英・長石・赤色粘土・雲母	明赤褐色	普通	口縁内面・脚部へラ磨き、脚接合部へラ削り	覆土下層	45%
193	土師器	高坏	15.1	(5.9)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	環部内外面ナデ、脚接合部へラ削り	覆土下層	50%
194	土師器	甕	17.0	25.1	7.0	石英・長石	明赤褐色	普通	体部内外面ヘラナデ、体部底縁後半1箇所、底部へラ削り	床面	80% P191
195	土師器	甕	-	(33.0)	7.8	石英・長石・赤色粘土・雲母	橙	普通	体部外面へラ磨き、内面ヘラナデ	床面	65%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
196	土師器	ミニチュア	7.1	5.8	4.1	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部下端へラ削り、内面へラナデ、坏模倣	床面	80% 内面赤彩 PL92
197	土師器	ミニチュア	6.4	(4.4)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面へラナデ、内面磨ナデ、坏模倣	床面	70%
198	土師器	ミニチュア	[7.9]	(5.5)	-	長石・赤色粒子・雲母	にぶい黄褐	普通	外面荒れのため調整不明、内面ナデ、変模倣	覆土下層	45% 輪痕度
656	土師器	高坏	-	(4.1)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	坏部外面へラ削り、内面へラ磨き	SK331 覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q28	砥石	(20.7)	(12.3)	(2.2)	(298.0)	片岩	砥面1面	覆土中層	
Q84	朝鮮模造品	3.1	1.3	0.36	1.56	滑石	孔径0.15	SK309覆土中	PL104

第185号住居跡 (第85・88図)

位置 調査区東部のL192区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第183・186号住居、第307・315・456号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東は削平されており全容は不明である。確認できたのは長軸4.5m、短軸3.5mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は5-19cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦である。壁溝は北壁から西壁・南壁下に見られ、断面U字形である。南壁際の中央に半円形の高まりがあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

竈 北壁の中央部に位置していたと考えられる。上部を第183号住居に掘り込まれているため、構築材と推測される砂質粘土と、火床部と考えられる赤変した硬化面がわずかに確認できる程度である。

ピット 2か所 (P3・P4)。主柱穴と考えられる。

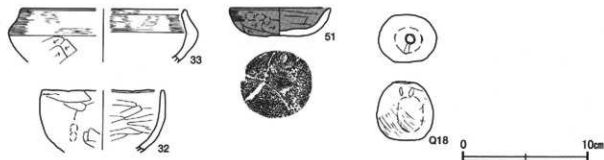
覆土 3層からなる (第4~6層)。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 4 暗褐色 ローム粒子中量、砂質粘土粒子微量 6 暗褐色 ローム粒子微量
5 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片36点 (坏類12, 甕類23, ミニチュア1), 石製品1点 (鎌カ) が出土している。51は覆土下層から正位で出土しており、埋め戻される際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第88図 第185号住居跡出土遺物実測図

第185号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
32	土師器	碗	[9.8]	(5.0)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ、内面へラ磨き	覆土下層	15%
33	土師器	坏	[13.0]	(4.2)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面ナデ	覆土下層	5%
51	土師器	ミニチュア	7.9	2.3	4.0	雲母	灰褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ、坏模倣	覆土下層	95% PL92

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q18	鎌	4.7	4.6	3.8	104.9	変成岩	孔徑0.75、穿孔未貫通、底部平坦に整形	覆土下層	PI.104

第192号住居跡 (第89図)

位置 調査区東部のM19a2区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第193号住居・第16号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南は調査区域外に延びており全容は不明である。確認できたのは長辺1.8m、短辺1.6mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Eである。壁高は38cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

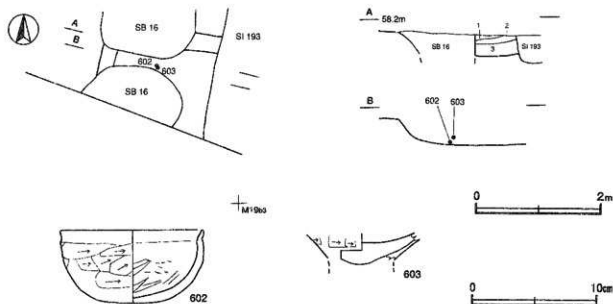
床 ほぼ平坦である。

覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒了少量、焼土粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
2 暗褐色 ローム粒了中粒、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片21点(坏類10、甕類10、高坏1)、須恵器片3点(坏類)、鉄滓1点の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片3点、弥生土器片1点が出土している。602・603は覆土下層から出土している。所見 時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初めと考えられる。



第89図 第192号住居跡・出土遺物実測図

第192号住居跡出土遺物観察表 (第89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
602	土師器	碗	11.5	5.8	4.0	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面へうすり、内面へうすり、縁部へうすり	覆土下層	95% PI.86
603	土師器	高坏	-	(2.0)	-	石英・長石・赤色粒子・炭屑	にぶい橙	普通	縁部合部粘土貼り付け、へうすり	覆土下層	5%

第197号住居跡 (第90・91図)

位置 調査区東部のM19c6区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第200号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西は調査区域外に延びており、南部は削平されているため全容は不明である。確認できたのは長辺3.3m、短辺1.6mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-42°-Wである。壁高は20cmでほぼ直立している。

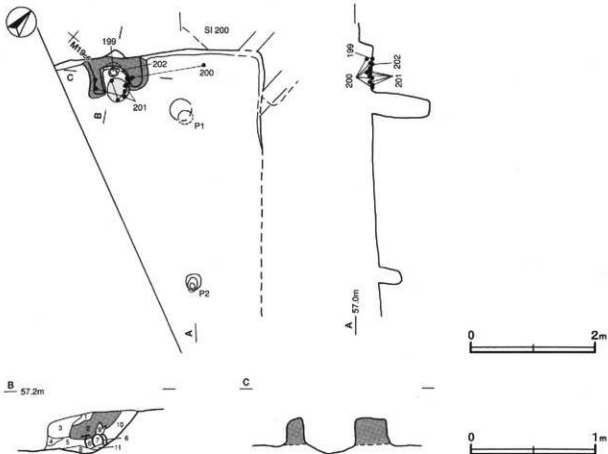
床 削平・擾乱のため北側の一部のみが残存している。目立った硬化面は確認できなかった。

竈 北西壁の中央部に位置しており、規模は焚き口部から煙道部先端まで80cm、袖幅は90cmである。煙道部は壁外へ15cmほど掘り込み緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は一部崩落し、第2層がそれに該当する。第3・4層は天井部の構築材が崩落し流れ出した層である。袖部は砂質粘土を厚く盛り上げて構築されている。火床部は赤変硬化し、焼土が5cmほど堆積しており、土師器甕が出土している。火床部の奥から土師器坏と小形甕が逆位で出土している。

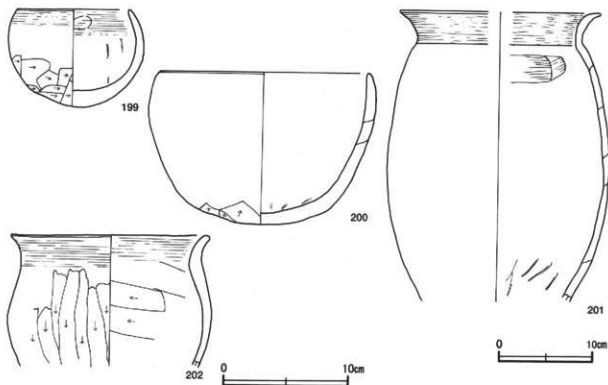
竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|---------------------|
| 1 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 青灰色 | 砂質粘土粒子多量、焼土ブロック少量 | 7 褐色 | 砂質粘土粒子少量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子・砂質粘土粒子少量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、砂質粘土粒子微量 |
| 4 灰褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック微量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子微量 |
| | | 11 灰褐色 | 砂質粘土粒子多量 |

ピット 2か所。P1・P2は深さ40~90cmで、主柱穴である。



第90図 第197号住居跡実測図



第91図 第197号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片83点(坏類25, 甕類58)の他, 埋没時に混入したと考えられる弥生土器片2点が出土している。199・202は, 199が202の中に収まった状態で竈内から逆位で出土している。組み合わせて転用支脚として利用した可能性がある。また, 201は竈内の火床部上から破片の状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第197号住居跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
199	土師器	碗	8.8	7.7	-	長石・赤色粘土・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り, 内面へラ削り後ナデ	火床部裏	95% PL87
200	土師器	碗	16.6	12.1	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	器底残れのため裏面不規, 底面へラ削り	火床部上	75% PL87
201	土師器	甕 [20.8]	(30.6)	-	-	石英・長石	にぶい褐	普通	体部内面へラ削り後ナデ	火床部上	40%
202	土師器	甕	15.9	(10.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内外面へラ削り	火床部上	40% 転用支脚か

第198号住居跡(第92図)

位置 調査区東部のM19b4区に位置し, 東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第410号土坑を掘り込み, 第193・199号住居, 第403・409号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西は調査区域外に延びており, 東は削平を受けているため全容は不明である。北壁のみ4.6mほどが残存している。形状は方形または長方形と推定され, 主軸方向はN-22°-Wである。壁高は10~14cmで, ほほ直立している。

床 削平と擾乱のためほとんど残存していない。

竈 北壁の中央部に位置しているが, 擾乱のため煙道部は破壊されている。残存部の規模は焚き口部から煙道部下端まで35cm, 袖部幅は65cmである。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は削平され確認できない。袖部はローム土の土台上に砂質粘土で構築されており, 内側が広範囲に赤変硬化している。火床部

も赤変硬化し、焼土が厚く堆積している。

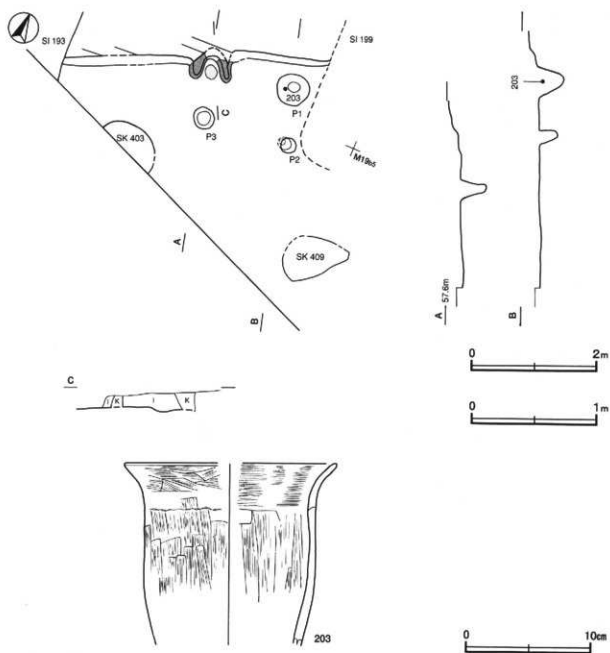
電土層解説

1 灰褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量

ピット 3か所。P1は深さ40cmで、主柱穴と考えられる。その他のピットの性格は不明である。

遺物出土状況 土師器片107点(坏類53, 甕類52, 高坏2), 鉄滓5点の他, 埋設時に混入したと考えられる弥生土器片9点が出土している。203はP1の覆土層から破片の状態で出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から6世紀後半と考えられる。



第92図 第198号住居跡・出土遺物実測図

第198号住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
203	土師器	瓶*	[16.4]	(14.5)	-	石英・長石・赤色粒子	黒灰	普通	体部内外面ヘラナデ	P 1 覆土	10%

第200号住居跡 (第93・94図)

位置 調査区東部のM19a6区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第197号住居、第402・408・411・435・438号土坑に掘り込まれている。

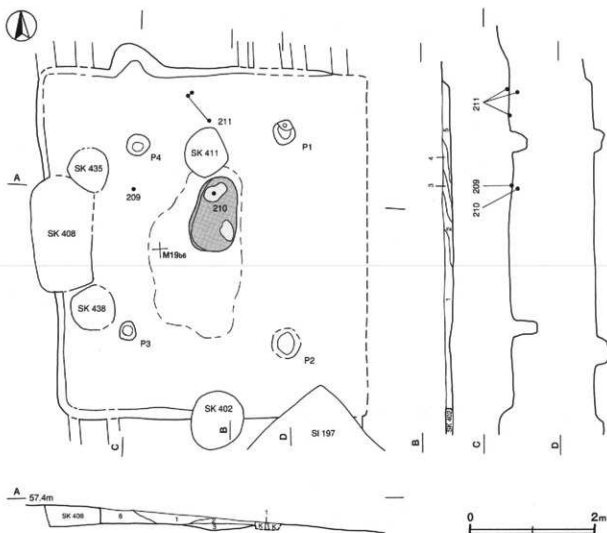
規模と形状 長軸5.6m、短軸5.2mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は14~21cmで外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉の周りが踏み固められている。

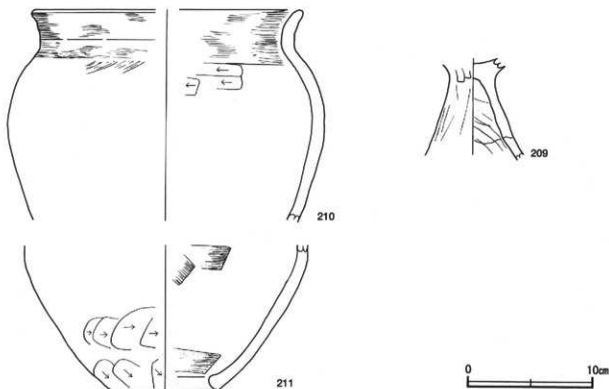
炉 中央部に位置し、長径120cm、短径70cmの長楕円形である。火床部は2か所見られ、それぞれ赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P4は深さ20~40cmで、主柱穴である。

覆土 6層からなる。ロームブロックが目立つことから人為堆積と考えられる。



第93図 第200号住居跡実測図



第94図 第200号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片391点（坏類98、甕類291、高坏2）、須恵器片10点（坏類5、甕類5）、鉄滓41点、桃の種子1点の他、埋没時に混入したと考えられる縄文土器片4点、弥生土器片34点、後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片1点、瓦1点が出土している。210は炉の火床部から、211は床面から破片の状態出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、炉の火床部から炭化した桃の種子が出土している。

所見 時期は、出土土器と住居の形状から5世紀後半と考えられる。

第200号住居跡出土遺物観察表（第94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
209	土師器	高坏	-	(8.1)	-	赤色粒子・雲母	灰褐色	普通	脚部へラ削り後ナデ	床面	20%
210	土師器	甕	[21.0]	(16.8)	-	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ナデ、内面一部へラ削り	炉	10%
211	土師器	甕	-	(11.5)	[8.4]	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面横方向へラ削り、内面へラ削り後ナデ	床面	10%

第201号住居跡（第95・96図）

位置 調査区東部のL19j6区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 長軸3.5m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は12~24cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に位置している。規模は焚き口部から煙道部先端まで70cm、袖部幅は100cmである。煙道部は壁外に20cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。天井部は竈内に崩落している。袖部は、地上に炭化粒子混じりのローム土を盛り、さらに粘土を盛り上げて構築されている。火床部は確認できなかったが、支脚と考えられる石材が竈内に見られる。竈周辺からは土師器甕・甌が横位でつぶれた状態で出土している。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土粒子少量、炭化物微量	5 褐色	砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量	6 青灰色	粘土粒子多量、焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
3 青灰色	粘土粒子多量	7 暗褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
4 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量
		9 青灰色	粘土粒子多量

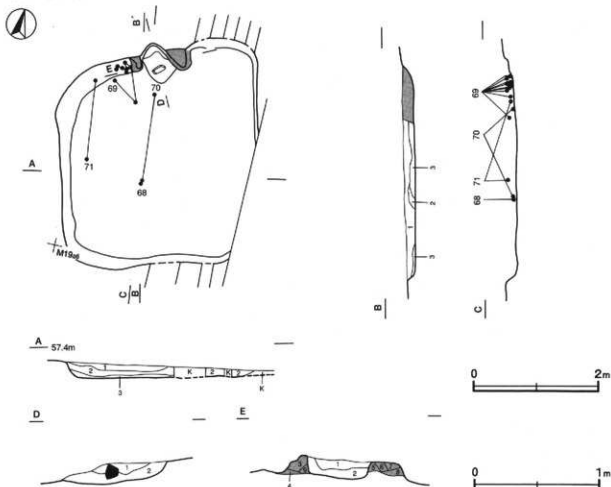
覆土 3層からなる。西側の斜面上部から土砂が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

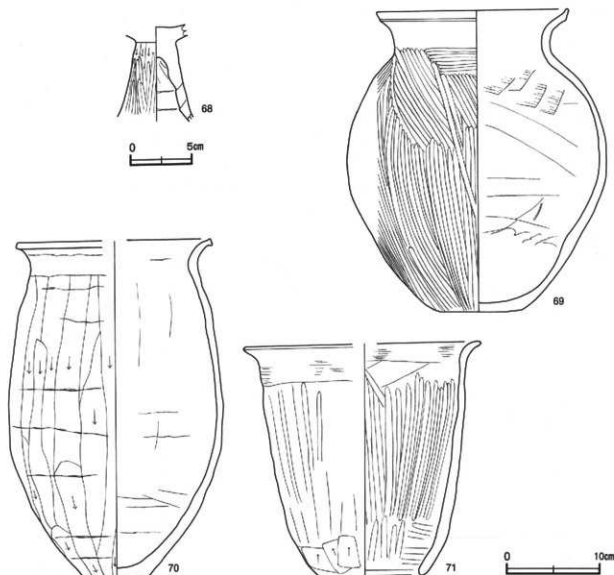
1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	3 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片274点（坏類30、甕類240、高坏4）、須恵器片2点（坏類、甕類）、灰軸陶器片1点（皿）、鉄鏝3点の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片4点、後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片1点（甕類）、瓦1点が出土している。69・71は竈脇から倒れた状態で、70は竈前から横位でそれぞれ出土しており、本跡に伴うものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第95図 第201号住居跡実測図



第96図 第201号住居跡出土遺物実測図

第201号住居跡出土遺物観察表（第96図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
68	土師器	高坏	-	(7.8)	-	石英・赤色粒子	橙	普通	脚部ヘラ削り後ヘラ磨き	覆土下層	15%
69	土師器	壺	20.1	31.7	8.0	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き、内面削り後ヘラナデ底部ナデ	覆土下層	70%
70	土師器	壺	[20.2]	35.4	6.5	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面縦方向ヘラ削り、内面ナデ	床面	70%
71	土師器	瓶	[24.6]	29.6	11.0	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部内外面ヘラ磨き、体部下端ヘラ削り	覆土下層	75% PL92

第207号住居跡（第97図）

位置 調査区東部のL203区に位置し、東へ傾斜する斜面裾部に立地している。

規模と形状 長軸4.5m、短軸4.4mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は2~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 削平と擾乱のためほとんど確認できない。中央部にわずかな硬化面が見られる。また、南東部で直径50cmほどの円形に焼土の範囲が見られ、炉の可能性もある。

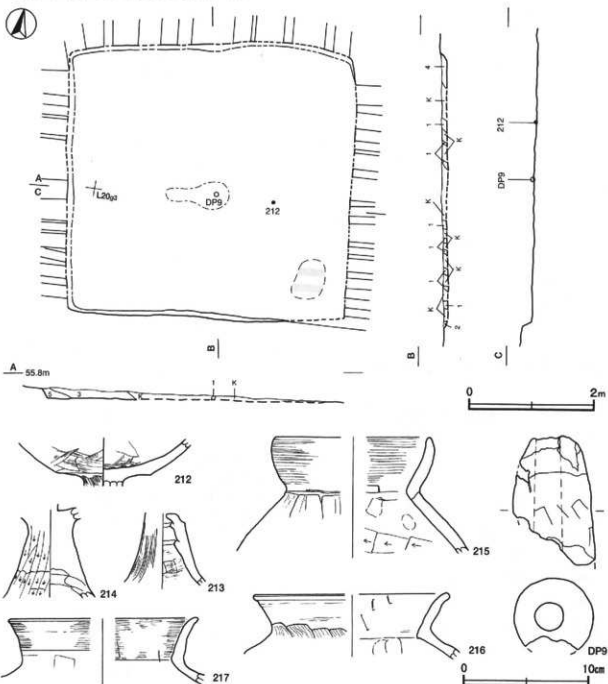
覆土 5層からなる。攪乱が激しいため、堆積経緯は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片216点（坏類27，甕類175，壺1，高坏13），須恵器片3点（甕類），鉄滓2点，土製品片1点（羽口）の他，埋没過程で混入した弥生土器片4点が出土している。攪乱が激しいため遺物の元位置を特定することはできないが，円化した遺物は何れも覆土下層または床面から破片の状態で出土している。

所見 羽口や鉄滓が出土していることと南東部の焼土の存在から，鍛冶に関連する遺構の可能性はある。時期は，出土土器から5世紀後半と考えられる。



第97図 第207号住居跡・出土遺物実測図

第207号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
212	土師器	高坏	-	(3.8)	-	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ	床面	10%
213	土師器	高坏	-	(6.0)	-	赤色粒子・雲母	橙	普通	脚部外面ナデ	覆土下層	10%
214	土師器	高坏	-	(7.2)	-	石英・長石	にぶい黄橙	普通	脚部外面ヘラ削り	覆土下層	10%
215	土師器	甕	[12.2]	(9.4)	-	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り	覆土下層	5% 輪横板
216	土師器	甕	[15.4]	(5.2)	-	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラナデ	覆土下層	5%
217	土師器	甕	[14.8]	(5.3)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP9	羽口	(10.3)	6.0~6.3	2.2	(232.0)	土	ナデ、先端部に鉄滓付着、一部欠損	床面	

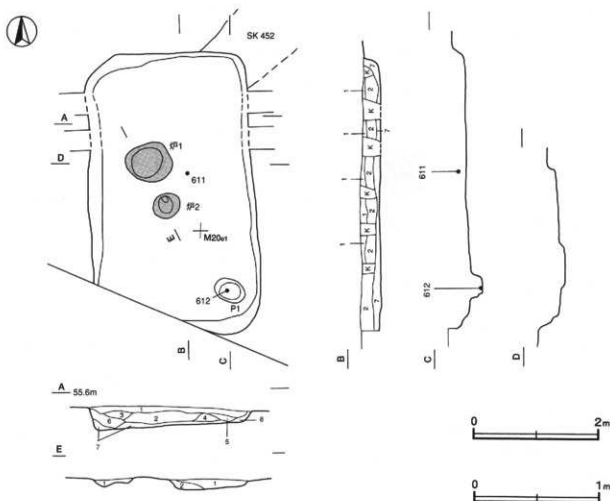
第210号住居跡 (第98・99図)

位置 調査区東部のM19d0区に位置し、東へ傾斜する台地の裾部に立地している。

重複関係 第452号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部は調査区域外へ延びているが、長軸4.5m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は20cmで直立している。

床 ほぼ平坦である。



第98図 第210号住居跡実測図

はN-50°-Wである。壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 やや起伏があり、東へ傾斜している。

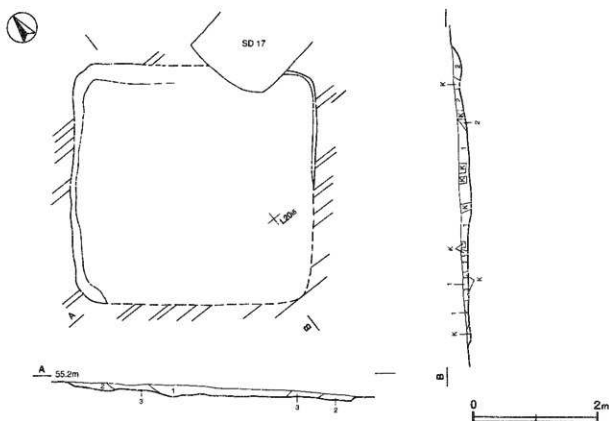
覆土 3層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化した糠炭 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 遺物は認められなかった。

所見 時期を特定する土器が存在しないが、他の確認された住居跡の主軸方向との関係から古墳時代中期から後期と考えられる。



第100図 第211号住居跡実測図

第212号住居跡 (第101図)

位置 調査区東部のL20g5区に位置し、東へ傾斜する斜面裾部に立地している。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びており全容は不明である。確認できたのは長辺2.6m、短辺2.1mの南西コーナー部のみで、方形または長方形と推定される。主軸方向はN-0°である。壁高は5~11cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、わずかに硬化面を確認できる。

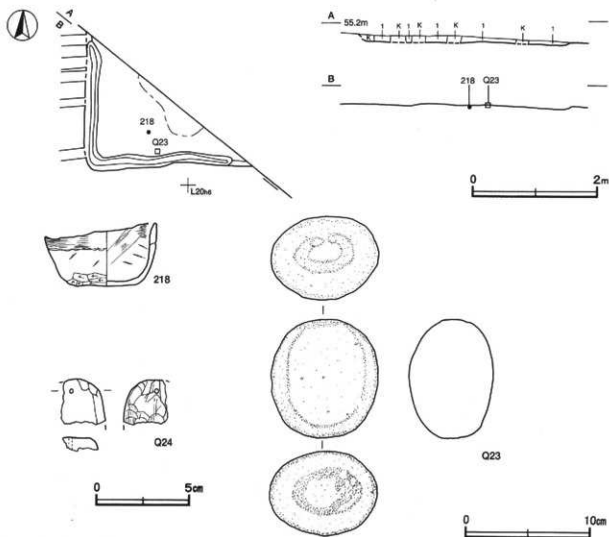
覆土 単一層である。覆土が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片89点（坏類31、寛類55、高坏3）、須恵器片10点（坏類）、石製品1点（勾玉模造品）、石器1点（磨石）、鉄滓12点の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片4点が出土している。218は南部の床面から逆位で出土している。Q23は南壁際の床面から、Q24は東側の覆土下層から出土している。いずれも住居廃絶時または直後に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から古墳時代後期と考えられる。



第101図 第212号住居跡・出土遺物実測図

第212号住居跡出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
218	土師器	坏	8.8	5.0	5.7	石英・長石	にぶい黄褐色	普通	体部外面ナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラ削り	床面	95% PL86

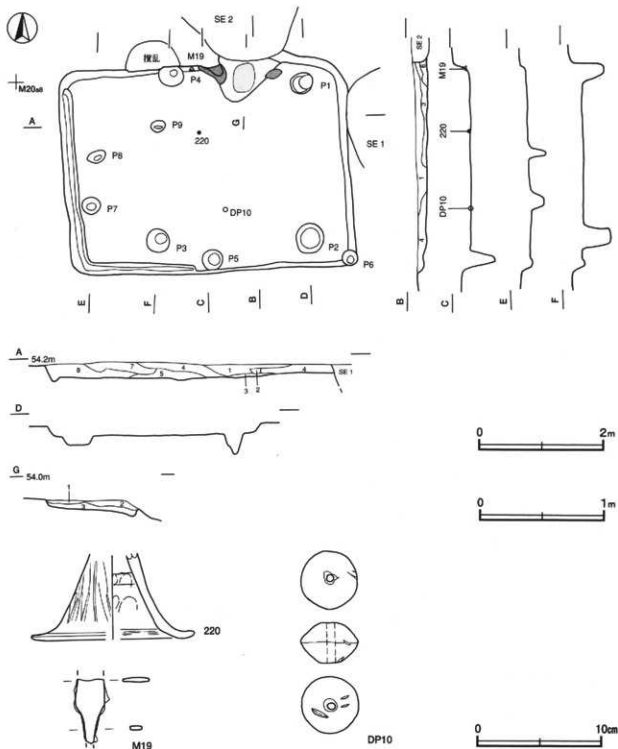
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q23	磨石	9.5	8.1	6.6	763.0	安山岩	両面に磨り痕	床面	
Q24	勾玉	(2.4)	(2.3)	0.68	(4.06)	雲母片岩	孔径0.18、両面穿孔	覆土下層	

第214号住居跡 (第102図)

位置 調査区東部のM20a8区に位置し、東へ傾斜する斜面裾部に立地している。

重複関係 第1・2号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.6m、短軸3.3mの長方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は26cmで、外傾して立ち上がっている。



第102図 第214号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、全体に踏み固められている。壕溝は西壁から南壁中央に見られ、断面U字形である。

竈 北壁やや東寄りに位置しているが、天井部や煙道部先端は第2号井戸と削平により破壊されている。袖部幅は100cmである。袖部は砂質粘土で構築されており、左袖の内側は劣変硬化している。火床部は皿状に掘り込まれ、その上に天井部の崩落した砂質粘土が焼上と共に堆積している。

竈土層解

- 1 暗赤褐色 砂質粘土中量、ローム粒子・炭十粒子・炭 3 黒褐色 炭十粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
 炭化粒子微量
 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土少量、ロームブ
 ック・炭化物微量

ピット 9か所。P1～P4は深さ15～40cmで、主柱穴と考えられる。P5は深さ40cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ30cmで、東南コーナーに位置することから柱穴と考えられるが、他に対応するピットは確認できなかった。P7・P8は深さ21～28cmで、西壁際に並んで位置していることから、西側の屋根を支える柱穴と推測される。その他のピットの性格は不明である。

覆土 8層からなる。ロームブロックや粘土の堆積状況が不自然なことから人為堆積と考えられる。

土層解

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
 2 青灰色 粘土ブロック多量 6 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量
 3 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化物微量 7 黒褐色 ローム粒子中量
 4 黒褐色 ロームブロック少量 8 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 十部器片119点(坏類16, 甕類101, 高坏2), 土製品1点(土錘), 鉄製品1点(鐵)の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片5点や、後世の耕作等で混入したと考えられる須恵器片10点(坏類9, 甕類1)が出土している。220は中央部の床面から連位で出土している。DP10・M19はいずれも床面から出土している。これらは住居廃絶後に遺棄されたものと考えられる。

所見 主柱穴の配置が東側へ寄っており、住居西側に空間がある。また、この空間を囲むように南西部にのみ壕溝が見られることから、西側へ住居を拡張した可能性が考えられる。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。

第214号住居跡出土遺物観察表(第102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
220	十部器	高坏	-	(6.8)	(13.0)	赤・赤色粘土・雲母	にぶい赤褐色	普通	脚部へラ磨き	床面	30%

番号	器種	口径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	土錘	4.5	3.3	0.6	56.7	土	算盤玉状、両面穿孔、ナデ	床面	PL103

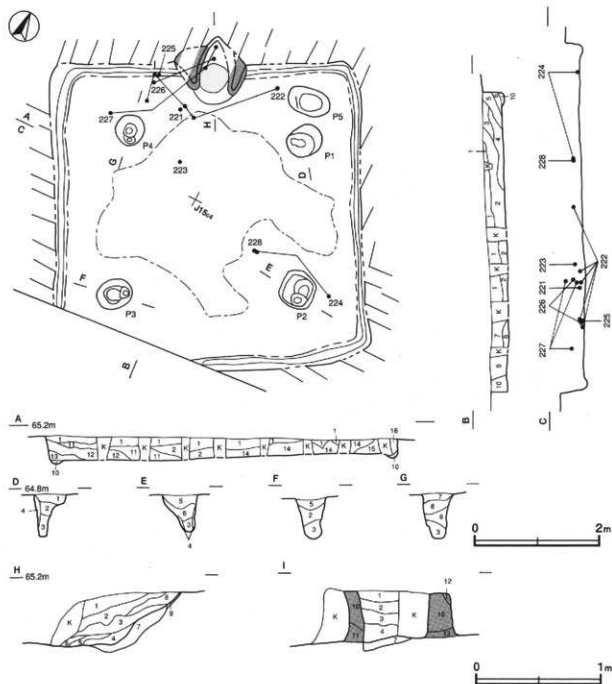
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M19	鎌	(5.4)	2.4	0.3	(10.2)	鉄	先磨部、葉部欠損	床面	

第215号住居跡(第103・104図)

位置 調査区西部のJ15b3区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 南西コーナー部が調査区域外へ延びているがほぼ全容を確認でき、一辺4.9mの方形で、主軸方向はN-26°-Wである。壕高は21～36cmでほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は竈部を除いて巡っており、断面U字形である。



第103図 第215号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に位置し、規模は焚き口部から煙道部先端まで110cm、袖部幅は110cmである。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込み、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は被熱した構架材の砂質粘土が竈内に崩落している。袖部は地上上にローム土で土台を作り、その上に砂質粘土を盛り上げて構築されている。内側は被熱で赤変している。火床部は皿状に掘り込んだあとローム土で埋め戻されており、焼土が堆積している。

竈土層解説

- | | | | |
|-----------|-------------------------------|----------|-----------------------------|
| 1 暗オリーブ褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | 4 におい赤褐色 | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ロームブロック炭化物微量 |
| 2 暗オリーブ褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・砂質粘土粒子微量 | 5 赤褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物粒子少量、ローム粒子微量 | 6 におい赤褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 |

- | | | | |
|-----------|--------------------------------|-----------|-----------------------|
| 7 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 11 におい赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 8 におい赤褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 9 褐色 | ロームブロック微量 | 13 褐色 | ロームブロック少量 |
| 10 オリーブ褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 5か所。P1～P4は深さ60～70cmで、主柱穴である。P5は長径70cm、短径40cm、深さ25cmの長楕円形で、土師器甕の破片が出土している。配置から貯蔵穴の可能性がある。

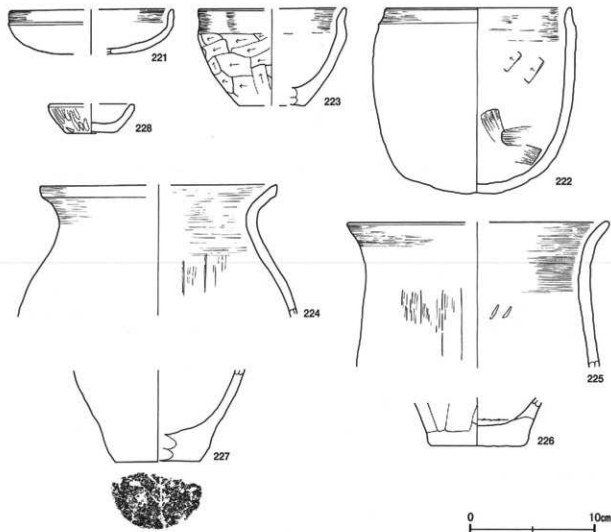
ピット土層解説 (P1～P4)

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック・炭化粒子・澆沼パミス微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・澆沼パミス微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・澆沼パミス微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・澆沼パミス微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

覆土 16層からなる。ブロック状の含有物が多いことから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂質粘土粒子微量 | | |



第104図 第215号住居跡出土遺物実測図

6	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	12	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
7	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	13	暗褐色	ロームブロック少量
8	褐色	ロームブロック少量	14	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
9	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	15	暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
10	褐色	ロームブロック微量	16	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
11	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片387点（坏類91、甕類294、高坏1、ミニチュア1）、須恵器片7点（坏類3、甕類4）の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片1点、後世の耕作などで混入したと考えられる陶器片1点が出土している。221・222・225は、いずれも竈左脇の床面から破片の状態でも出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。

第215号住居跡出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
221	土師器	坏	[129]	(3.6)	-	赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部傾ナデ、器面荒れのため調整不明	床面	10%
222	土師器	椀	14.7	14.8	-	石英・長石・雲母	橙	普通	器面荒れのため調整不明、内面ヘラナデ	床面	55% PL87
223	土師器	椀	[11.8]	6.7	[5.3]	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	覆土下層	20%
224	土師器	甕	[19.0]	(10.3)	-	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部内面ヘラナデ	覆土下層	20%
225	土師器	甕	[20.6]	(11.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内外面ナデ	床面	10%
226	土師器	甕	-	(3.8)	7.6	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部下端ヘラ削り	覆土及び覆土下層	5%
227	土師器	甕	-	(7.3)	[6.7]	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部内外面ナデ、底部木炭痕	覆土中層	10%
228	土師器	ミニチュア	[6.5]	2.3	4.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面滑り、底部ナデ一部滑り、片断破	覆土下層	50%

(2) 土坑

第176号土坑（第105図）

位置 調査区中央部のJ17h4区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 長径0.53m、短径0.43mの楕円形で、主軸方向はN-33°-Wである。深さは95cm、底面は平坦で、壁は直立している。

覆土 2層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

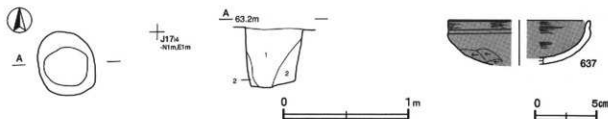
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片2点（坏類、甕類）が出土している。637は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉以降と考えられる。



第105図 第176号土坑・出土遺物実測図

第176号土坑出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
637	土師器	坏	[11.4]	(3.5)	-	長石・白色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	覆土中	10%

第191号土坑 (第106図)

位置 調査区中央部のJ16h9区に位置し、尾根上の平坦部に立地している。

規模と形状 長径0.75m、短径0.60mの楕円形で、主軸方向はN-15°-Wである。深さは91cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

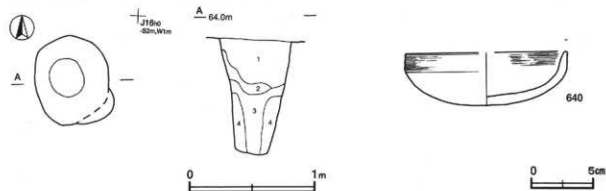
覆土 4層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、粘性弱	3 暗褐色	ローム粒子微量
2 褐色	ロームブロック微量	4 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片2点(坏類、甕類)が出土している。640は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉以降と考えられる。



第106図 第191号土坑・出土遺物実測図

第191号土坑出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
640	土師器	坏	[12.8]	4.2	-	赤色・黒色粒子・雲母	橙	普通	体部外面削り口のたがみ調整不精、内面ナデ	覆土中	40%

第295号土坑 (第107図)

位置 調査区東部のL18g4区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

重複関係 第160住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.4m、短径1.0mの楕円形で、主軸方向はN-81°-Eである。深さは82cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

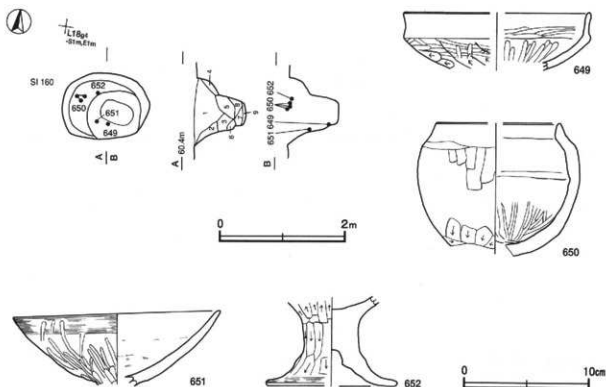
覆土 9層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	7 褐色	ロームブロック微量
3 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9 褐色	ローム粒子少量
5 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片43点（坏類14、甕類22、高坏7）の他、埋没時に混入したと考えられる弥生土器片2点が出土している。649は壁際の覆土下層から、650・652は覆土上層から、651は覆土中層から、いずれも破片の状態が出土している。

所見 出土した高坏は、重複する第160号住居跡から出土した高坏と同形である。また、椀は底部に穿孔があり、意図は不明だが破棄する際に開けられたと考えられ、何らかの祭祀行為が推測される。重複する第160号住居跡は遺物の出土状況から廃絶時に祭祀行為が行われたと推測されることから、本跡はその祭祀行為の一環として掘り込まれ、埋め戻しながら土器が投棄された可能性がある。時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初めと考えられる。



第107図 第295号土坑・出土遺物実測図

第295号土坑出土遺物観察表（第107図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
649	土師器	坏	[14.8]	(4.6)	-	長石・白色稜子 雲母	にぶい黄褐色	普通	体部外面へう削り後へう磨き、内面へう磨き	覆土下層	20%
650	土師器	椀	[9.8]	(10.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へう削り、内底面へう磨き、底部穿孔及び一部欠損	覆土上層	50% PL87
651	土師器	高坏	16.5	(5.8)	-	石英・長石・赤色稜子・雲母	橙	普通	坏部外面へう磨き	覆土中層	45%
652	土師器	高坏	-	(7.1)	[9.9]	石英・長石・雲母	橙	普通	脚部削り後ナデ、胴部横ナデ	覆土上層	25%

第450号土坑（第108図）

位置 調査区東部のM20a2区に位置し、東へ傾斜する斜面部に立地している。

規模と形状 掘削のため全容は不明である。確認できたのは長径0.97m、短径0.71mの楕円形と推定され、主軸方向はN-27°-Eである。深さは13cm。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

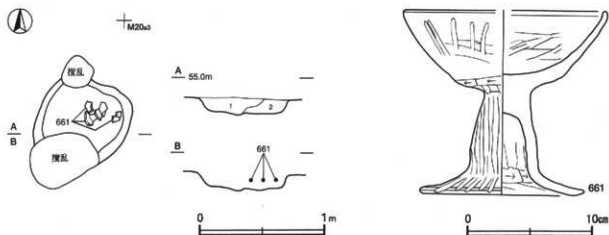
覆土 2層からなる。ロームブロックや粘土ブロックが見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量 2 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片19点(坏類4, 甕類4, 高坏11)が出土している。661は斜位で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第108図 第450号土坑・出土遺物実測図

第450号土坑出土遺物観察表(第108図)

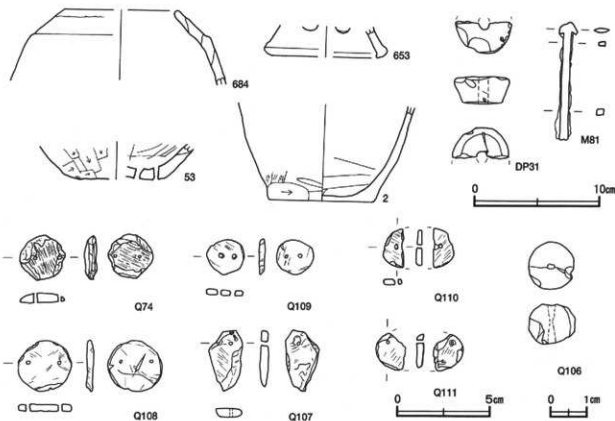
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
661	土師器	高坏	[15.9]	14.6	13.2	長石・赤色粒子・雲母	明赤褐	普通	坏部内外面・胸部ヘラ書き、 坏部上縁ヘラ削り	覆土中層	60%

(3) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない古墳時代の主な遺物について、観察表で記述する。



第109図 遺構外出土遺物実測図(1)



第110図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第109・110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
2	土師器	甕	-	(7.6)	8.4	石英・長石	橙	普通	体部下端横方向のヘラ削り、底部ナデ	SI-30覆土	15%
53	土師器	甕	-	(2.9)	[7.6]	石英・長石・雲母	赤褐	普通	底部外面下部ヘラ削り、底部10か所穿孔	SI-43覆土	5%
127	土師器	杯	[11.2]	4.1	-	長石・白色粒子	橙	普通	口縁内側に沈線、体部外面ヘラ削り	SI-99覆土	25%
132	土師器	杯	[10.8]	(3.8)	-	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	SI-99覆土	5%
155	土師器	杯	13.8	4.5	-	石英・長石 赤色粒子・雲母	橙	普通	器面荒れのため調整不明	SI-167覆土	70% ヘラ削り[-] PL86
241	土師器	杯	[14.1]	(4.8)	-	石英・赤色粒子 雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ナデ	SI-99覆土	10%
242	土師器	杯	[13.6]	(3.4)	-	長石	橙	普通	口縁部・体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り	SI-99覆土	10%
653	須恵器	高杯	-	(2.4)	[8.4]	石英・白色粒子	褐灰	普通	ロクロナデ	UP-3覆土	10%
657	土師器	杯	[15.4]	(4.7)	-	石英・長石 雲母	にぶい黄橙	普通	ヘラ磨きカ	UP-6覆土	30%
659	土師器	杯	[14.4]	4.1	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ・磨き、内面ヘラ磨き	UP-6覆土	75%
684	土師器	碗	[8.9]	(5.9)	-	赤色粒子・雲母	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、輪痕痕	SI-62覆土	5%
695	土師器	杯	9.1	3.7	-	長石	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面器面荒れのため調整不明	K17b7区	75% 口縁部磨き付着
697	土師器	碗	9.5	5.7	5.8	石英・長石 赤色粒子・雲母	明赤褐	普通	体部外面下部ヘラ削り、内面ナデ	L180区	80% PL86

番号	器種	直径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP31	紡錘車	(45)~31	2.2	0.75	(20.0)	土	円錐台形	SK-327覆土	

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q74	双孔円板	2.4	2.4	0.7	3.64	滑石	孔径0.2, 磨き	SI-193覆土	PL101
Q106	丸瓦	1.2	1.2	1.1	2.22	ガラス	孔径0.2, 外面ナデ, 両面穿孔	表層	
Q107	勾玉	3.2	1.7	0.5	3.7	滑石	孔径0.15, 表面研磨, 一部欠損	段切り遺構	PL101
Q108	双孔円板	2.7	2.8	0.4	1.34	滑石	孔径0.2, 表面研磨	段切り遺構	PL104
Q109	双孔円板	1.9	2.0	0.3	1.90	滑石	孔径0.2, 表面研磨	段切り遺構	PL104
Q110	双孔円板	2.1	(1.2)	0.3	(0.97)	滑石	孔径0.2, 表面研磨, 1/2遺存	段切り遺構	
Q111	双孔円板	(2.0)	(1.6)	0.4	(1.40)	滑石	孔径0.15, 表面研磨, 1/2遺存	段切り遺構	
M81	鏝	(9.4)	(1.4)	(0.6)	(15.50)	鉄	両端部断面四角形, 鏝身先端・基部欠損	SK-346覆土	

4 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、奈良・平安時代の竪穴住居跡199軒、据立柱建物跡18棟、溝跡2条、欄跡3条、土坑19基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴式住居跡

第1号住居跡 (第111図)

位置 調査区西部のJ15g9区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸3.2m, 短軸3mの方形で、主軸方向はN-12°Eである。壁高は10~13cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は東壁の北側と南西コーナーを除いて通っており、断面はU字形である。

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は、焚き口部から煙道部先端まで90cm, 袖部幅は98cmである。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、構築材と考えられる粘土が竈前面に流出している。袖部は、砂質粘土で構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面はあまり火熱を受けていない。

竈土層解説

1 褐 色	粘土粒子中量, 焼土粒子微量	6 濃い赤褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量	7 褐 色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子微量	8 灰 褐色	粘土粒子中量, 炭化粒子少量
4 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量	9 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
5 明 褐色	ローム粒子中量		

ピット 1か所。南西コーナーに位置し、深さは18cmである。貯蔵穴の可能性もあるが、性格は不明である。

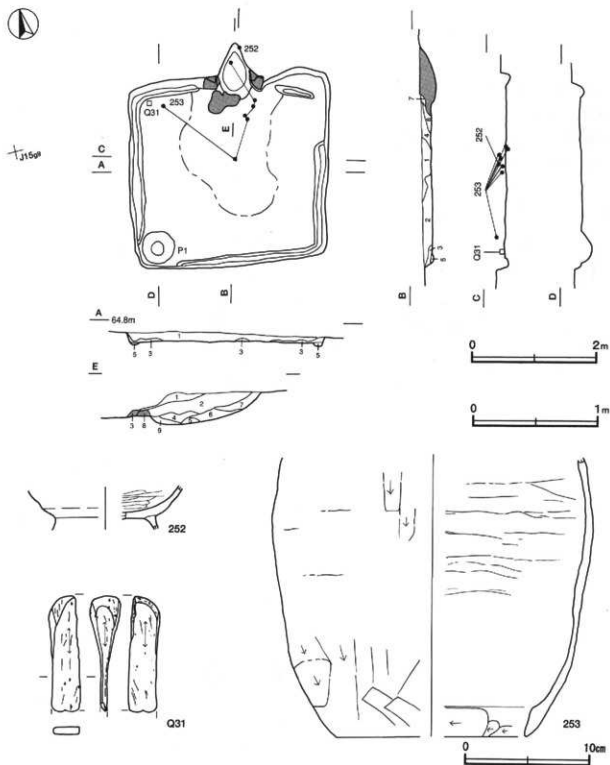
覆土 7層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐 色	ローム粒子少量
2 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量	6 暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子中量, 焼土粒子微量
3 明 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量	7 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
4 褐 色	ローム粒子・焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片66点 (坏類28, 甕類38), 瓦片1点, 石製品1点 (砥石1), 石材11点の他, 埋没する過程で混入した須恵器片7点 (坏類4, 甕類3) が出土している。252は竈の煙道部先端から逆位の状態で, 253は竈前面の床面付近から破片の状態でそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土器から10世紀前半と考えられる。



第111図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
252	土師器	高台付瓶	-	(3.4)	-	基石・赤色 粘土・雲母	明赤褐	普通	内面ナア。底部回転ヘラ切り	煙道部	20%
253	土師器	瓶	-	(22.2)	[15.3]	石灰・長石・黒 色砂子・雲母	にふい糊	普通	外面縦位の削り	床面	15%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q31	砥石	(9.3)	(2.5)	2.4	(45.6)	粘板岩	砥面3面	覆土下層	

第2号住居跡 (第112図)

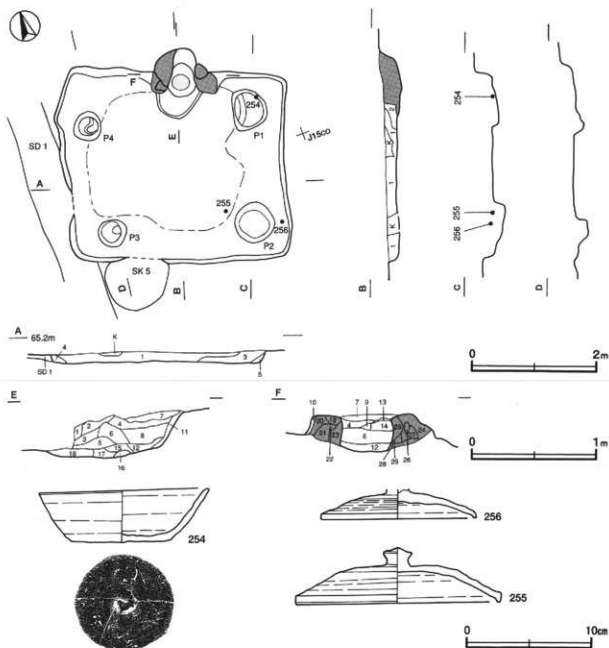
位置 調査区西部のJ15b9区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第1号溝・第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.6m、短軸3mの長方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁高は15~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、ピットの内側が踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は、焚き口部から煙道部先端まで112cm、袖部幅は105cmである。煙



第112図 第2号住居跡・出土遺物実測図

道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第6・13層がその土層と考えられる。袖部は灰褐色粘土を芯材とし、周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。

土層解説

1	褐	色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	15	暗	赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量
2	褐	色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	16	灰	褐色	焼土粒子少量、焼土粒子微量
3	暗	褐色	焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子微量	17	暗	赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子微量
4	褐	色	ローム粒子・焼土粒子微量	18	に	ぶい褐色	ロームブロック・炭化物微量
5	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	19	灰	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量
6	灰	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	20	灰	オリーブ色	粘土粒子中量、焼土粒子微量
7	褐	褐色	ローム粒子微量	21	灰	オリーブ色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
8	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	22	灰	褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、炭化粒子微量
9	暗	褐色	ローム粒子微量	23	に	ぶい褐色	焼土粒子多量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
10	黒	褐色	ローム粒子微量	24	灰	オリーブ色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子微量
11	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	25	に	ぶい赤褐色	焼土粒子少量、粘土粒子少量
12	暗	赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	26	明	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子微量
13	褐	灰褐色	粘土粒子多量、ローム粒子微量	27	灰	オリーブ色	粘土粒子多量、ローム粒子微量
14	灰	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量	28	灰	オリーブ色	粘土粒子多量、焼土粒子少量
				29	明	褐色	ローム粒子多量、粘土粒子少量

ピット 4か所。深さ16~26cmで、位置から主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土ブロック微量	3	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2	暗	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	4	暗	褐色	ローム粒子中量
				5	明	褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片38点（坏類9，甕類29），須恵器片22点（坏類21，甕類1），粘土塊3点，石材9点が出土している。254はP1付近から斜位の状態、256は逆位の状態、それぞれ床面付近から出土している。255はP2西側の床面から破片の状態、256は逆位の状態、それぞれ床面付近から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表（第112図）

番号	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
254	須恵器	坏	13.5	4.2	8.0	石英・長石	灰白	普通	底部回転へつ削り後ナデ	床面	25% 釜子 P106
255	須恵器	甕	16.3	4.4	-	長石・雲母	灰オリーブ	普通	大井部回転へつ削り	床面	70% へつ削り (土師器) P106
256	須恵器	甕	12.2	(2.3)	-	高鉄・高鉄片	灰	普通	天井部回転へつ削り	床面	90% PL100

第3号住居跡（第113図）

位置 調査区西部のJ15e8区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.8mの長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は10~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、窓の前部から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焼き11部から煙道部先端まで66cm、袖部幅は102cmである。煙道部は壁外へ46cmほど掘り込まれ、途中角度を変えて外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第4・5・7・8層がその土層で、土師器甕が補強材として使用されている。袖部は、砂質粘土で構築されてい

る。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。石製支脚を煙道部側に設置している。

覆土層解説

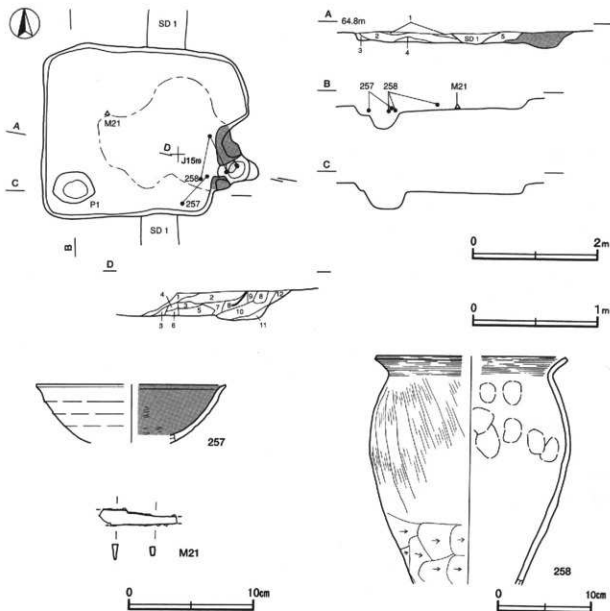
- | | | | |
|-------|-----------------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 3 褐色 | 粘土ブロック微量 | 8 暗褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 4 灰褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化物微量 |
| 5 褐色 | 焼土粒子多量、粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、粘土粒子微量 |
| | | 11 暗褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| | | 12 暗赤褐色 | 炭化粒子中量 |

ピット 1か所。南西コーナーに位置し、深さは26cmである。貯蔵穴の可能性もあるが、性格は不明である。

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | | |



第113図 第3号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片169点(坏類46, 甕類123), 須恵器片9点(坏類6, 甕類3), 鉄製品1点(刀子), 鉄滓3点, 石材10点が出土している。257は5層中から破片の状態で, 258は竈の補強材として使用されたと考えられ, 竈内から前面にかけてそれぞれ出土している。M21は床面付近から出土している。

所見 時期は, 出土土器から9世紀末から10世紀前葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	式様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
257	土師器	坏	[15.0]	(4.7)	-	石英・砂鉄質・珪石	にんじや	普通	内面へら磨き	覆上中層	10%
258	土師器	甕	[20.2]	(24.0)	-	石英・珪石・赤色粘土・燧石	灰青陶	普通	体部外面下部横方向のへら磨り	竈	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M21	刀子	(6.3)	1.2	0.5	(8.3)	鉄	刀身断面三角形, 先端部・基部欠損	床面	

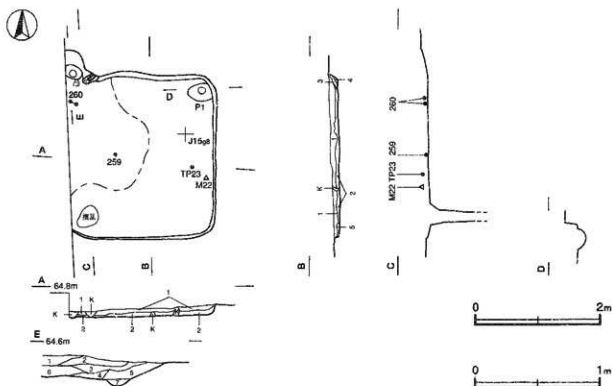
第4号住居跡(第114・115図)

位置 調査区西部のJ15g7区に位置し, 尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 西側は調査区域外に延びており, 全容は不明である。規模は, 調査された範囲で長辺2.7m, 短辺2.3mで, 長方形と推定され, 主軸方向はN-5°-Wである。壁高は8~16cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁に構築され, 西側は調査区域外に延びる。規模は調査された範囲で, 焚き口部から煙道部先端まで47cm, 右袖部までの幅は48cmである。煙道部は壁外へ47cmほど掘り込まれ, 緩やかに外傾して立ち上がっている。



第114図 第4号住居跡実測図

天井部は崩落しており、第3層がその土層と考えられる。袖部は、砂質粘土で構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火熱をあまり受けていない。

覆土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|--------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | 焼土粒子微量 |
| 3 褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 1か所。北東コーナーに位置し、深さは14cmである。位置から主柱穴と考えられるが、対応する柱穴は確認されなかった。

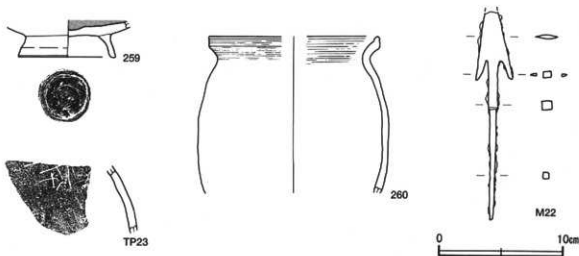
覆土 5層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化物中量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片49点（坏類16，甕類30，高坏3），鉄製品3点（鐵），鉄滓1点，粘土塊2点，石材8点の他、埋没する過程で混入した須恵器片5点（坏類3，甕類2）が出土している。259は床面から正位の状態、260は甕の前面から破片の状態それぞれ出土している。M22は東壁に平行して録を南に向けた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器などから10世紀以降と考えられる。



第115図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第115図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
259	土師器	高台付筒	-	(29)	7.7	赤色粒子・雲母	橙	普通	内面へラ磨き	床面	20%
260	土師器	甕	[13.5]	[12.4]	-	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	内外面調整不明	覆土下層	10%

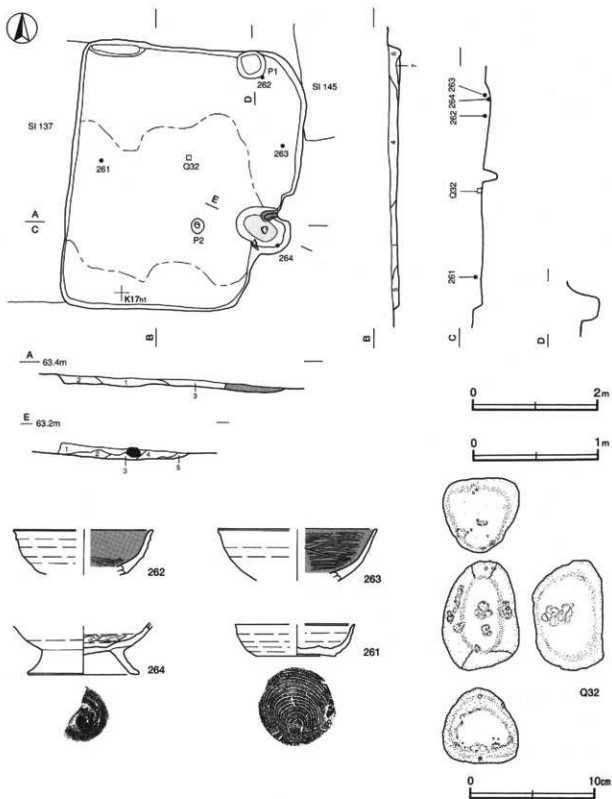
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP23	土師器	甕	長石	明赤褐	普通	内外面ナデ	覆土上層	5%へラ磨き□

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M22	鐵	(15.6)	2.9	0.3~0.7	(22.4)	鉄	三角形片断身、両部・基部断面四角形、先端欠損	覆土上層	PL105

第5号住居跡 (第116図)

位置 調査区中央部のK17g1区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第137・145号住居跡、第2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。



第116図 第5号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状 長軸4.3m、短軸3.7mの長方形で、主軸方向はN-95°-Eである。壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈の前面から西壁にかけて踏み固められている。壁溝は北西コーナー付近で確認され、断面はU字形である。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端間で90cm、袖部幅は66cmである。煙道部は壁外へ40cmほど掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。天井部は削平されており、残存していない。袖部は砂質粘土で構築され、右袖には構築材と考えられる石材が残存している。火床部は地山をわずかに掘り込んで構築され、火床面が凸変している。若干煙道部寄りから支脚または構築材と考えられる石材が出土している。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	4 暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土粒少量	5 暗褐色	ローム粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子微量		

ピット 2か所。P1は北東コーナー部に位置し、深さは28cmである。位置から柱穴と考えられるが、対応する柱穴は確認されなかった。P2は竈の前面に位置し、深さは22cmである。性格は不明である。

覆土 7層からなる。ロームブロックを含む層が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色	ロームブロック微量	5 暗褐色	ローム粒子中等
2 褐色	ローム粒子少量	6 黒褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子少量	7 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片90点(坏類39、甕類51)、灰陶陶器片1点(瓶)、石材10点の他、埋没する過程で混入した須恵器片5点(坏類)が出土している。261は西壁寄りの覆土上層から逆位の状態で、262はP1付近の床面からそれぞれ出土している。264は口縁部を欠いているが、竈の煙道部から逆位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器などから11世紀前半と想定される。

第5号住居跡出土遺物観察表(第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
261	土師器	甕	[9.5]	2.5	6.2	灰・赤色粘土・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	覆土上層	70%
262	土師器	坏	[11.0]	(3.6)	-	石灰・灰石・雲母	黄褐色	普通	内面ヘラ磨き	床面	30%
263	土師器	坏	[12.6]	(4.1)	-	赤色粘土・雲母	灰黄褐色	普通	内面ヘラ磨き	覆土上層	20%
264	土師器	扁合付甕	-	(4.2)	8.7	石灰・赤色粘土・雲母	にじみ黄褐色	普通	口面・底ヘラ磨き、底部回転糸切り	煙道部	30% 覆付着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q32	磨石	8.8	6.1	5.7	375.0	安山岩	竈部に使用痕	覆土上層	

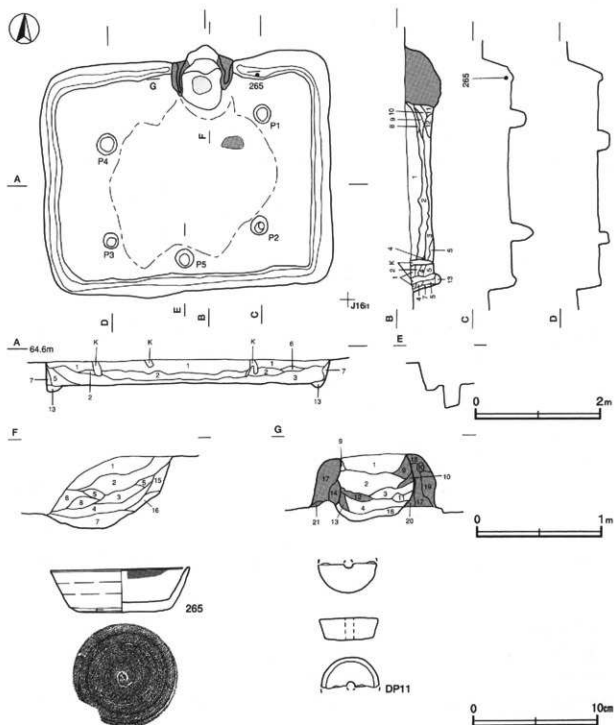
第6号住居跡(第117図)

位置 調査区西部のJ15h0区に位置し、屋根上の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸4.6m、短軸3.8mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は35~47cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、竈の前面からピットの内側が踏み固められている。壁溝は竈の部分を除いて巡っている。

竈 北壁の若干東寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで102cm、袖部幅は97cmである。



第117図 第6号住居跡・出土遺物実測図

煙道部は壁外へ27cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第5・8～10・12・13層がその土層と考えられる。袖部は、灰黄褐色粘土を芯材とし砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|---------|----------------------|
| 1 褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子少量 |
| 3 褐灰色 | ローム粒子・粘土粒子微量 | 8 褐色 | 粘土粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック微量、粘性弱 | 9 褐色 | 粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 5 灰褐色 | 粘土粒子多量、粘性強 | 10 灰黄褐色 | 粘土粒子多量 |

11 黒褐色	焼土ブロック少量	17 灰黄褐色	粘土粒子多量
12 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	18 灰黄褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
13 灰褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	19 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物粒子微量
14 褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量	20 灰褐色	粘土粒子少量
15 褐色	粘土粒子微量	21 褐色	粘土粒子多量
16 褐色	粘土粒子少量		

ピット 5か所。P1～P4は主柱穴と考えられ、深さは20～34cmである。P5は深さ34cmで、竈に向い合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 13層からなる。ブロックを含み、しまりの弱い土層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説		8 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量
1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	9 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量	12 褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子微量
5 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量	13 褐色	ロームブロック中量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量		
7 褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 土師器片56点(坏類11, 甕類45), 須恵器片11点(坏類8, 甕類3), 土製品片3点(支脚2, 紡錘車1), 石材1点の他、埋没する過程で混入した弥生土器片2点(体部)が出土している。265は甕東側の壁溝上から正位の状態、D P11は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器などから8世紀前半と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表(第117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	下法の特徴	出土位置	備考
265	灰器器	坏	10.9	3.5	7.2	石黒・黒色粒子	灰	普通	底部凹へラ削り	床面	98% 遺物番号 D198

番号	器種	口径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D P11	紡錘車	4.7～3.8	1.8	0.70	22.9	土	円錐台形、全面・孔内丁寧な磨き、脱臼	覆土上層	

第7号住居跡(第118・119図)

位置 調査区西部のJ1519区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第1号溝と第30・510号土坑に掘り込まれている。

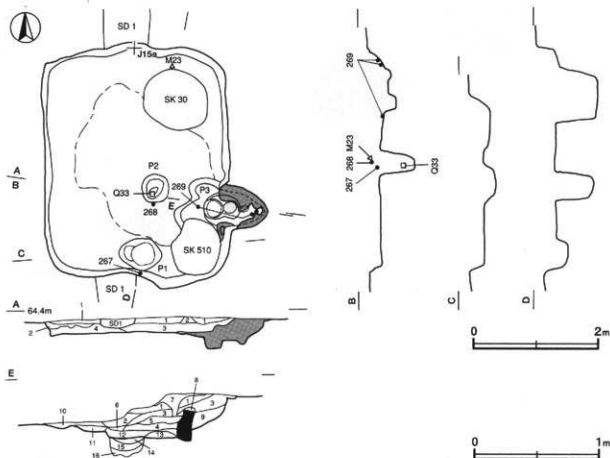
規模と形状 長軸3.7m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁高は20～28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈の前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は吹き口部から煙道部先端まで105cm、袖部幅は82cmである。煙道部は壁外へ68cmほど掘り込まれ、緩やかに内湾しながら立ち上っている。壁面付近からは補強材と考えられる土師器の甕が出土している。天井部は崩落しており、第4・5層がその土層と考えられる。袖部はあまり残存していないが、砂質粘土で構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。石製支脚を火床部の煙道部側に設置し、住居側に掘り方のピットを設けている。

覆土層解説

1 褐色	ローム粒子微量	3 黒褐色	炭化物・粘土粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	4 灰褐色	焼土粒子・粘土粒子中量



第118図 第7号住居跡実測図

- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|--------------------------|
| 5 灰褐色 | 粘土粒子多量 | 12 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 14 暗赤褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 8 近い赤褐色 | 炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量 | 15 褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 9 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 16 褐色 | ローム粒子少量 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | | |
| 11 暗褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 3か所。P1は深さ18cmで、南壁中央付近にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3は深さ21cmで、竈の火床部に接し、覆土に焼土粒子を含んでいることから竈の掘り方に伴うピットと考えられる。P2は深さは64cmで、性格は不明である。

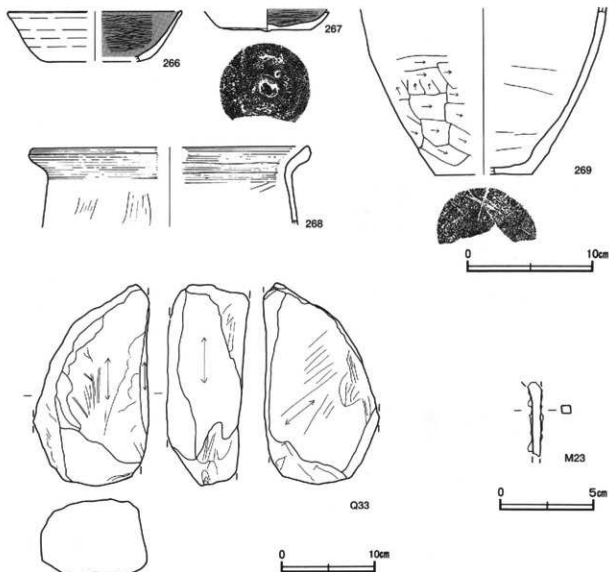
覆土 4層からなる。ブロックを含み、しまりの弱い土層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 明褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片224点（坏類64、甕類159、高坏1）、須恵器片25点（坏類21、甕類4）、土製品1点（紡錘車）、石器1点（紙石）、鉄製品1（釘）、瓦片4点、石材12点が出土している。267は南壁の床面上から、269は竈の底面から破片の状態、また268・M23は第1層中からそれぞれ出土している。Q33はP2の内部から出土している。

所見 Q33は、P2を埋める際に廃棄されたと考えられる。時期は、他の南東コーナー付近に竈を持つ住居の年代や出土土器などから9世紀代と推定される。



第119図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

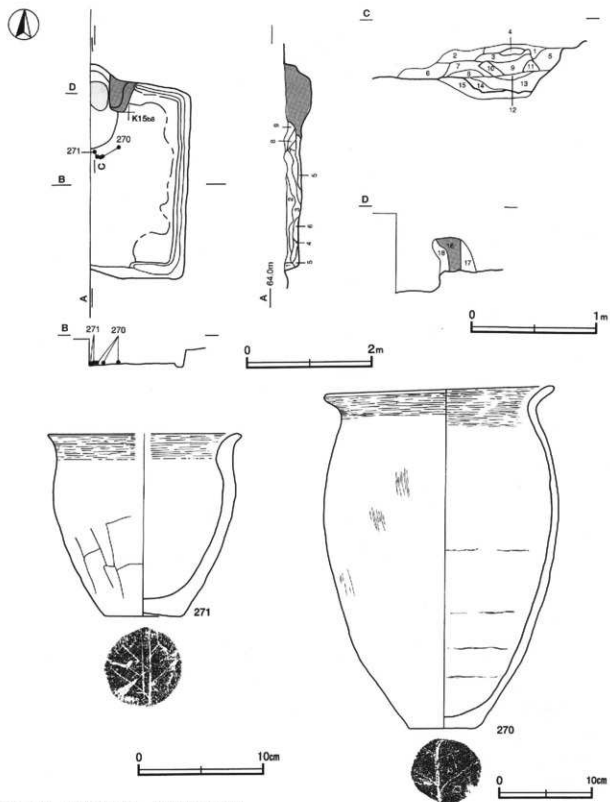
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
266	土師器	坏	[13.9]	4.0	[8.6]	赤色粒子	にぶき質	普通	内面ヘラ磨き	P 1 覆土	20%
267	土師器	坏	-	(1.7)	7.2	赤色粒子・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き、底部回転ヘラ切り	床面	40%
268	土師器	甕	[21.8]	(6.3)	-	長石・赤色粒子	黒褐	普通	外面羅位のナデ	覆土中層	10%
269	土師器	甕	-	(13.3)	[7.7]	石英・長石	橙	普通	底部ナデ	竈	25%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q33	磁石	21.4	12.3	8.8	2820.0	粘板岩	紙面3面	P 2 覆土中	PL104
M23	釘	(3.9)	(0.7)	0.45	(3.9)	鉄	断面四角形、肉端欠損	覆土上層	

第8号住居跡 (第120図)

位置 調査区西部のK15b8区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 西側は調査区域外に延びており、全容は不明である。規模は、調査された範囲で長辺3.1m、短



第120図 第8号住居跡・出土遺物実測図

辺1.6mで、方形または長方形と推定され、主軸方向は $N-2^{\circ}-E$ である。壁高は22~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南壁から竈周辺まで踏み固められている。壁溝は北壁から南東コーナー付近まで巡っており、断面は逆台形またはU字形である。

竈 北壁に構築され、西側は調査区域外に延びている。規模は調査された範囲で、焚き口部から煙道部先端まで89cm、右袖部までの幅は67cmである。煙道部は壁外へ22cmほど掘り込まれ、角度を変えながら反外して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第4・6・10・11層がその土層と考えられる。袖部は砂質粘土を芯材として構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。第14層に焼土ブロックを含んでいることから、第15層は掘り方の土層と考えられる。

土層解説

1 直 褐 色	ロームブロック中層、焼土粒子少量	10 暗 褐 色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量
2 樹 色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11 暗 褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・粘土ブロック微量
3 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量	12 樹 灰 色	粘土粒子少量、焼土粒子微量
4 樹 灰 色	粘土粒子中量	13 黒 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
5 黒 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	14 樹 色	焼土ブロック少量、粘土粒子微量
6 褐 色	粘土ブロック中層、ローム粒子少量	15 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
7 黒 褐色	炭化粒子・粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子微量	16 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子・ローム粒子微量
8 黒 褐色	炭化粒子微量	17 黒 褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
9 にぶい黄褐色	粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	18 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土粒子微量

ピット 確認されなかった。

覆土 9層からなる。ロームブロック・焼土粒子を含む層が見られることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 樹 色	ローム粒子中層、焼土粒子・炭化粒子微量	6 樹 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	7 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 新 暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	8 樹 色	焼土粒子・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
4 明 褐色	ローム粒子中層、炭化粒子微量	9 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5 樹 灰 色	粘土粒子中層、ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片157点（坏類1，甕類156），須恵器片2点（坏類1，甕類1），石材1点が出土している。270・271は竈前面の床面から、破片の状態で出土している。270は大半の破片が内側を上に向けて出土している。

所見 時期は、出土土器などから9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表（第120図）

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
270	土師器	甕	23.5	36.0	6.7	石炭・灰白・雲母	にぶい橙	普通	調整不明、底部本底灰	床面	80% PL102
271	土師器	小形甕	15.2	14.4	6.0	石炭・灰白・雲母	にぶい橙	普通	外面へうけり削りナゲ、底部本底灰	床面	40%

第9号住居跡（第121図）

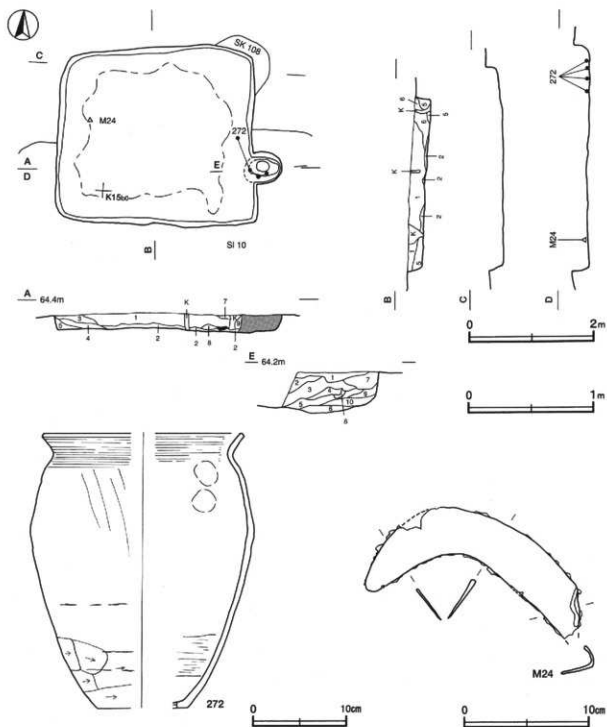
位置 調査区西部のK15a0区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第10号住居跡を掘り込み、第108号土坑と重複している。

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-87°-Eである。壁高は19~26cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部北側はロームで踏み固められているが、南側は焼土混じりのローム土による貼床で、軟弱である。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。袖部はなく残存状態は良くない。規模は焚き口部から煙道部先端まで59cm、竈の掘り込み幅は50cmである。煙道部は壁外へ42cmほど掘り込まれ、ほぼ直立している。天井部は削平さ



第121図 第9号住居跡・出土遺物実測図

れ、第7層はその残存部で、第4・11層は崩落した土層と考えられる。火床部は第10号住居跡の覆土を掘り込んでおり、火床面はあまり火熱を受けていない。

甗土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | | |

6 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	9 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
7 褐色	粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子微量	10 褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
8 褐色	粘土粒子多量		

ピット 確認されなかった。

覆土 9層からなる。各層にブロックを含んでいることから、人為堆積の可能性がある。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	7 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック微量	8 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量		

遺物出土状況 土師器片140点(坏類22, 甕類118), 鉄製品1点(鎌), 鉄滓3点, 石材1点の他, 須恵器片12点(坏類9, 甕類3)が出土している。272は竈内から竈前面の床面上にかけて破片の状態で, M24は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器などから10世紀後半と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表(第121図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
272	土師器	甕	(20.5)	28.8	(11.9)	石英・長石	にぶ・黄褐色	普通	体部外面下部横位へうすり	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M24	鎌	(17.1)	(10.1)	0.35	(79.5)	鉄	刃身断面三角形, 茎部欠損	覆土下層	PL105

第10号住居跡(第122・123図)

位置 調査区西部のK15b0区に位置し, 尾根上の平ら面に立地している。

重複関係 第9号住居, 第110・112号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.9m, 短軸4.6mの方形で, 主軸方向はN-4°-Wである。壁高は42~64cmで, 外傾して立ち上がっている。

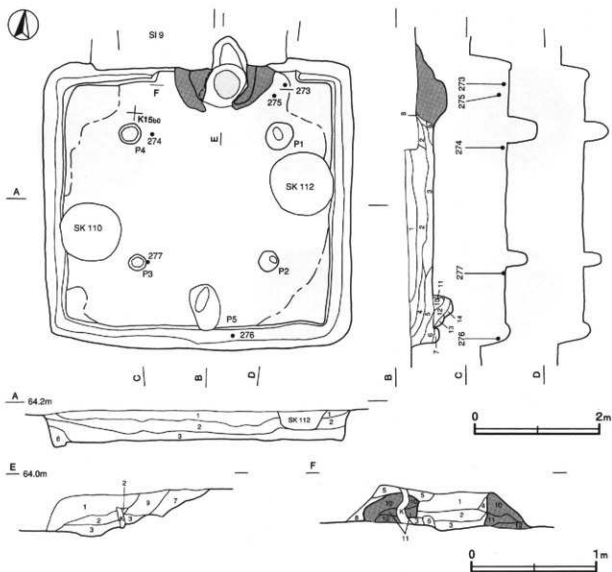
床 平川で, ほほ全面にわたって踏み固められている。壁溝は全周しており, 断面はU字形である。

竈 北壁のやや東寄りに構築され, 上部は第9号住居によって破壊されている。規模は, 焚き口部から煙道部先端まで114cm, 袖部幅は159cmである。煙道部は壁外へ49cmほど掘り込まれ, 緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており, 第2・9層がその土層と考えられる。袖部は砂質粘土を芯材として構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり, 火床面が赤変している。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	7 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	粘土粒子少量, ローム粒子微量
3 暗赤褐色	炭化粒子少量, 焼土ブロック・粘土粒子少量	9 褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子微量
4 灰点褐色	焼土粒子微量	10 褐色	粘土粒子中量, 焼土粒子微量
5 にぶ・黄褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 にぶ・黄褐色	粘土粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
6 明褐色	焼土粒子多量	12 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P1~P4は主柱穴と考えられ, 深さは30~47cmである。P5は深さ32cmで, 竈と向い合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第122図 第10号住居跡実測図

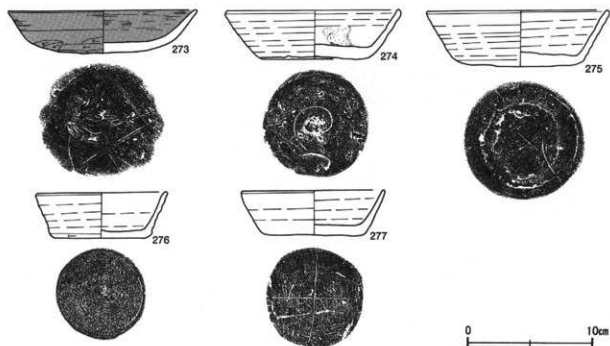
覆土 14層からなる。第3層の上層まではレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられ、第1・2層はブロックを含んでいることから人為堆積と考えられる。第10～14層はP5の土層である。

土層解説

1	褐色	ロームブロック少量	8	褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子少量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック微量	10	褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子少量	11	褐色	ローム粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック微量
6	褐色	ローム粒子微量	13	褐色	ローム粒子多量
7	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	14	褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片109点（坏類13、甕類94、高坏1、壺1）、須恵器片31点（坏類28、甕類2、壺1）の他、埋没する過程で混入した縄文土器片1（胴部）、弥生土器片1（体部）が出土している。273は竈東側の床面付近から、275は覆土下層からそれぞれ正位の状態而出土している。274はP4付近から正位の状態、277はP3付近の床面から逆位の状態而出土している。276は南壁際から斜位の状態而出土しており、埋没の過程で遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器などから8世紀前葉と考えられる。



第123図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
273	土師器	坏	15.0	3.4	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	底部手持ちヘラ削り	床面	80% PL93
274	須恵器	坏	13.9	3.9	8.2	黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	80% 黒色粒子 PL96
275	須恵器	坏	14.4	4.5	9.0	石英・長石	灰	普通	底部手持ちヘラ削り	覆土下層	80% ヘラ削り目 目立長石・石英
276	須恵器	坏	10.4	3.7	7.1	石英・長石・雲母	灰白	普通	体部下層・底部回転ヘラ削り	覆土下層	85% PL96
277	須恵器	坏	11.3	3.6	7.6	長石・雲母	灰白	普通	底部手持ちヘラ削り	床面	70% ヘラ削り目 目立長石・石英

第11号住居跡 (第124図)

位置 調査区西部のK15c9区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第1号溝、第116・117号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.2m、短軸2.1mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は4~14cmで、外傾して立ち上がっている。

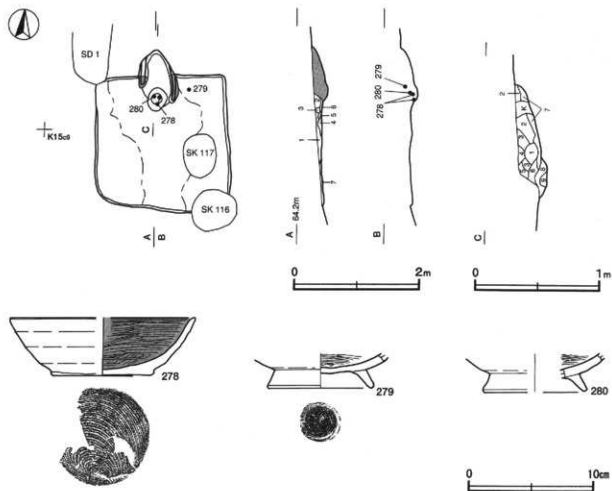
床 ほぼ平坦で、南壁から竈周辺にかけて踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで99cm、袖部幅は60cmである。煙道部は壁外へ43cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第1層がその土層と考えられる。袖部で構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変硬化している。

竈土層解説

1 褐 灰 色	粘土粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	6 暗 褐 色	焼土粒子少量、ローム粒子微量
2 灰 黄 褐色	焼土粒子・粘土粒子微量	7 褐 色	ロームブロック少量
3 灰 黄 褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量	8 黒 色	炭化粒子多量、焼土粒子少量
4 灰 黄 褐色	焼土粒子・粘土粒子微量	9 橙 色	焼土ブロック多量
5 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子微量		

ピット 確認されなかった。



第124図 第11号住居跡・出土遺物実測図

覆土 7層からなり、第2・3・5・6層は、竈から流出した土層と考えられる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| | | 7 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片19点（坏類12，堿類7），鉄滓1点が出土している。278～280は竈の焚き口付近から、内面を上に向けて重なった状態で出土している。完形のものが見られないことから、支脚に転用されていたものが動いたと考えられる。

所見 時期は、出土土器などから10世紀前半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表（第124図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
278	土師器	坏	[148]	4.6	7.8	石英・長石・雲母	におい橙	普通	内面ヘラ磨き、底部回転糸切り	竈	40%
279	土師器	高台付坏	-	(27)	8.2	石英・長石・雲母	におい橙	普通	内面ヘラ磨き	竈	30%
280	土師器	高台付坏	-	(3.0)	[8.0]	石英・長石・雲母	橙	普通	内面ヘラ磨き	竈	10%

第12号住居跡 (第125・126図)

位置 調査西部区部のK16c1区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸2.7m、短軸2.6mの方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は9~14cmで、外傾に立ち上がっている。

床 若干起伏があり、西壁付近から竈前面まで踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで68cm、袖部幅は73cmである。煙道部は壁外へ50cmほど掘り込まれ、2段にわたって外傾して立ち上がっている。天井部は確認されず、対応する土層もみられないことから破壊されたと考えられる。袖部は石材を補強材とし、その周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は地山を若干掘り込んで構築され、火床面が赤変している。石製支脚を火床部の煙道部側に設置している。

土層解説

1 暗赤褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量	5 灰褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	6 灰黄褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 極暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
4 極暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量		

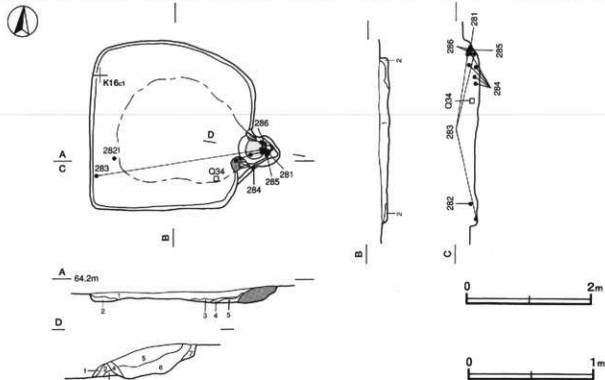
ピット 確認されなかった。

覆土 5層からなり、ロームブロックを含む層が多いことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック中量	5 黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		

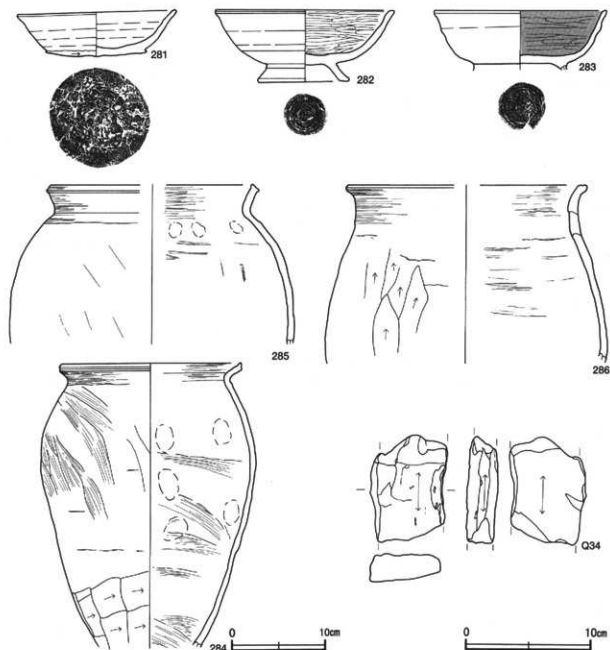
遺物出土状況 土師器片211点(坏類51, 甕類160)、鉄滓2点の他、埋没する過程で混入した須恵器片5点(坏類3, 甕類2)が出土している。ほとんどの遺物が竈の内外から出土している。281・283は煙道部の底面付近からそれぞれ破片の状態で、282は南壁寄りの第1層中から正位の状態でも出土している。284は横位で、



第125図 第12号住居跡実測図

285・286は石製支脚の周辺からそれぞれ破片の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器などから10世紀後半と考えられる。



第126図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
281	土師器	坏	12.5	3.6	7.9	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ削り	煙道部	90% PL.83
282	土師器	高台付碗	14.2	5.8	7.3	長石・黒色粒子 雲母	にぶい褐色	普通	内部ヘラ磨き	覆土中層	90% 焼熟度 PL.85
283	土師器	高台付碗	13.9	(4.8)	-	石英・雲母	橙	普通	内部ヘラ磨き	煙道部	55%
284	土師器	甕	18.8	(30.0)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	内面ナデ、外面下部ヘラ削り	甕	70% PL.102
285	土師器	甕	[16.0]	(12.8)	-	石英・長石	橙	普通	口縁部横ナデ、外面ナデ	甕	15%
286	土師器	甕	[19.0]	(14.1)	-	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	体部外面縦位のヘラ削り	甕	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q34	瓦石	(8.6)	6.1	2.5	(149.6)	粘板岩	武園3曲	覆土中層	

第13号住居跡 (第127図)

位置 調査区西部のK15d9区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸3.7m、短軸3.6mの方形で、主軸方向はN-78°-Wである。壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

炉・竈 いずれも確認されなかった。

ピット 確認されなかった。

覆土 8層からなる。ブロックを含む層が多いことから、人為堆積と考えられる。

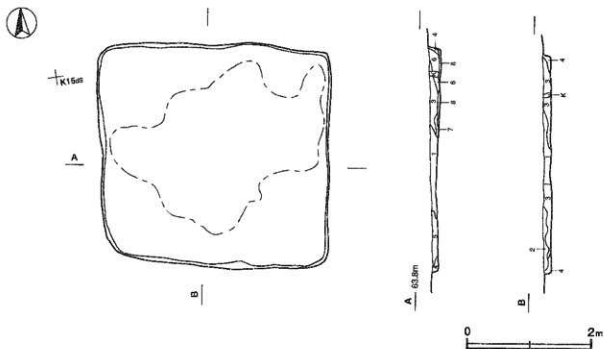
土層解説

1	褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	5	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	7	褐色	ロームブロック中量
4	褐色	ロームブロック少量	8	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片14点(坏類1, 甕類13)、須恵器片3点(坏類1, 甕類2)、石材14点が出土している。

遺物は小片のため、図化できなかった。

所見 硬化している床面の範囲は確認できるものの、竈・炉が認められなかったことから、通常の住居とは異なる遺構と考えられる。時期は覆土中に含まれた遺物の状況から、平安時代以降と想定される。



第127図 第13号住居跡実測図

第14号住居跡 (第128・129図)

位置 調査区西部のK15c0区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第81・94・103号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁高は7~12cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、西壁から竈前面までが踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

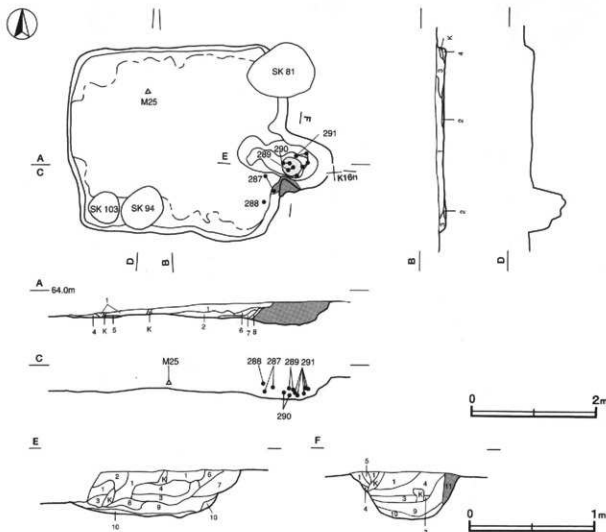
竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで152cm、袖幅は80cmである。煙道部は壁外へ79cmほど掘り込まれ、2段にわたって内湾しながら立ち上がっている。天井部は崩落しており、第1・8層がその土層と考えられる。袖部は左袖は残存せず、右袖は砂質粘土で構築されている。火床部は地山を若干掘り込んでおり、火床面が赤変している。

竈土層解説

1 暗褐色	粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	7 黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
3 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、粘土粒子微量	8 赤褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
4 暗褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量
5 明褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量	10 褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
		11 灰褐色	粘土粒子中量

ピット 確認されなかった。

覆土 8層からなる。含有物を均等に含んでいることから自然堆積と考えられる。第6~8層は、竈から流出した土層である。



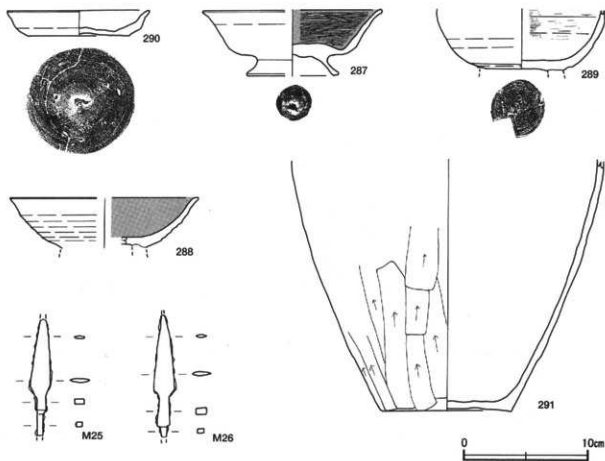
第128図 第14号住居跡実測図

土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	6 暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 黒褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子少量		
5 褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片127点（坏類45，甕類82），灰釉陶器片1点（瓶），鉄製品7点（鎌4，刀子1，釘2），瓦片1点，石材2点の他，埋没する過程で混入した須恵器片7点（坏類2，甕類5）が出土している。287は竈左袖上から逆位の状態で，289～291は竈内から破片の状態で出土し，これらは天井部の土層より下に位置している。また，291は口縁部を欠いているため，煙道部の補強に使われた可能性がある。M25は床面付近から出土している。

所見 竈内から出土した遺物は，層位との関係から本住居が廃棄された段階のものと推定される。時期は，これらの土器から10世紀後半と考えられる。



第129図 第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第129図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
287	土師器	高台付碗	[14.2]	5.2	[7.2]	赤色粒子・雲母	にぶい黄緑	普通	内面ヘラ磨き	竈袖部	50%
288	土師器	高台付碗	[15.0]	(4.0)	-	赤色・黒色粒子 雲母	にぶい黄緑	普通	ロクロナデ	覆土中層	30%
289	土師器	高台付碗	-	(4.8)	-	石灰・長石 赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	竈	30%
290	土師器	皿	11.7	2.0	8.1	石英・長石・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈	85% PL99
291	土師器	甕	-	(20.0)	[10.4]	石英・赤色粒子	褐	普通	係部外面下部縦位のヘラ削り	竈	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M25	鉢	(9.6)	1.2	0.5	(12.3)	鉄	柳葉式鎌身、先端・基部欠損	床面	PL105
M26	鉢	(9.7)	1.8	0.55	(14.2)	鉄	柳葉式鎌身、台状閃、先端・基部欠損	覆土上層	PL105

第15号住居跡 (第130・131図)

位置 調査区西部のK15g8区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第108号住居跡を掘り込んでいる。

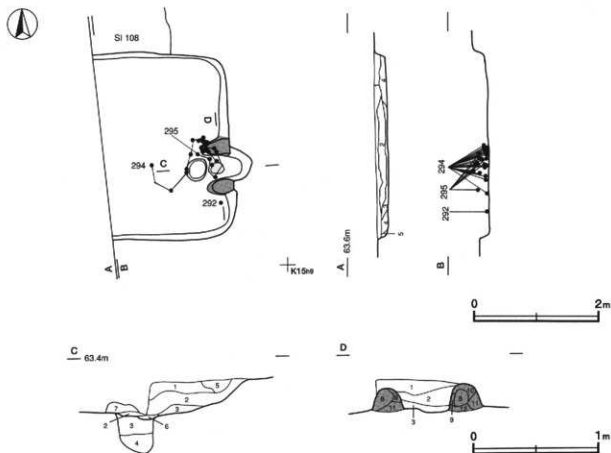
規模と形状 西側は調査区域外に延びており、全容は不明である。規模は、調査された範囲で長辺30.0m、短辺2.1mで、長方形と推定され、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、やや軟弱である。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで103cm、袖部幅は86cmである。煙道部は壁外へ46cmほど掘り込まれ、緩やかに外傾して立ちあがっている。天井部は崩落しており、第7層がその土層と考えられる。袖部は砂質粘土を芯材とし、粘土混じりの土を貼り付けて構築されている。火床部はわずかに地山を掘り込んで構築され、火床面が亦変している。

電土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|-------------------------|
| 1 褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒色 | 炭化物中量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 褐色 | 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 |



第130図 第15号住居跡実測図

- | | | | |
|---------|------------------------|------------|-------------------|
| 5 褐 灰 色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 赤 褐 色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子微量 |
| 6 暗 褐 色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 10 灰 黄 褐 色 | 粘土粒子中量, ローム粒子微量 |
| 7 褐 灰 色 | 粘土粒子中量, 粘性強 | 11 灰 黄 褐 色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 8 褐 灰 色 | 粘土粒子多量 | 12 にぶい黄褐色 | 粘土粒子少量, ロームブロック微量 |

ビット 1か所。P1は竈の火床部に接しており、深さは30cmである。竈の掘り方に伴うビットと考えられる。

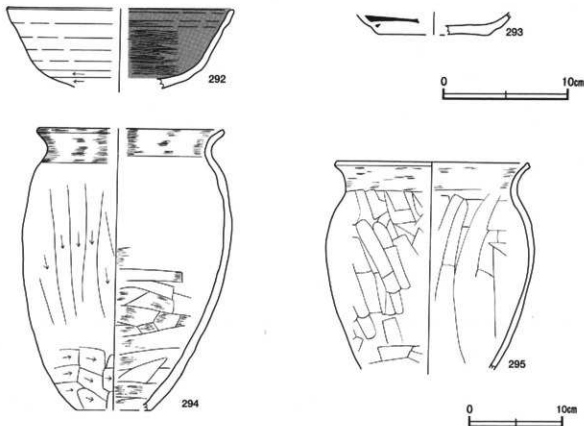
覆土 5層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|-------|---------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐 色 | ローム粒子中量, 炭化物・粘土粒子少量 |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐 色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐 色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片190点(坏類23, 甕類166, 高坏1), 瓦片1点, 石材6点の他, 埋没する過程で混入した須恵器片8点(坏類2, 甕類6)が出土している。292は竈左袖の床面付近から, 294は竈右袖周辺から横位の状態で, 295は竈火床面から同じく横位の状態でそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器などから10世紀代と推定される。



第131図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表(第131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
292	土師器	坏	[18.0]	(6.3)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	床面	30%
293	土師器	坏	-	(1.8)	[8.8]	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中層	15% 墨書[□]
294	土師器	甕	[19.4]	29.9	[7.8]	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	存部外面破綻のヘラ削り。表面ナデ	覆土下層	60% PL102
295	土師器	甕	[20.4]	(22.0)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部ヘラナデ	竈	40%

第16号住居跡 (第132～134図)

位置 調査区西部のK15g9区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第140号住居跡、第180号土坑を掘り込み、第17・18号住居、第2号溝に掘り込まれている。

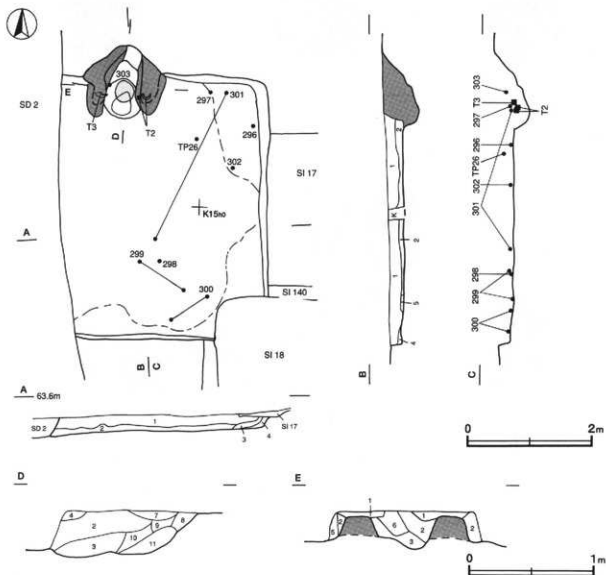
規模と形状 西側は第2号溝跡に掘り込まれており、全容は不明である。規模は、長辺4.2m、短辺3.3mの長方形と推定され、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は20～24cmで、ほぼ直立している。

床 若干起伏があり、ほぼ全面が踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで117cm、袖部幅は123cmである。煙道部は壁外へ64cmほど掘り込まれ、緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第3層がその土層と考えられる。袖部は丸瓦を芯材とし、周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は若干掘り込んでおり、火床面が赤変している。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------|-------|------------------------------|
| 1 におい褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 明褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土ブロック微量 | 5 褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |



第132図 第16号住居跡実測図

- 7 褐灰色 粘土粒子中量, 焼土粒子微量
 8 暗褐色 炭化粒子少量, 焼土ブロック・粘土粒子微量
 9 灰黄褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

- 10 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
 11 暗赤褐色 炭化物少量, 焼土ブロック・粘土粒子微量

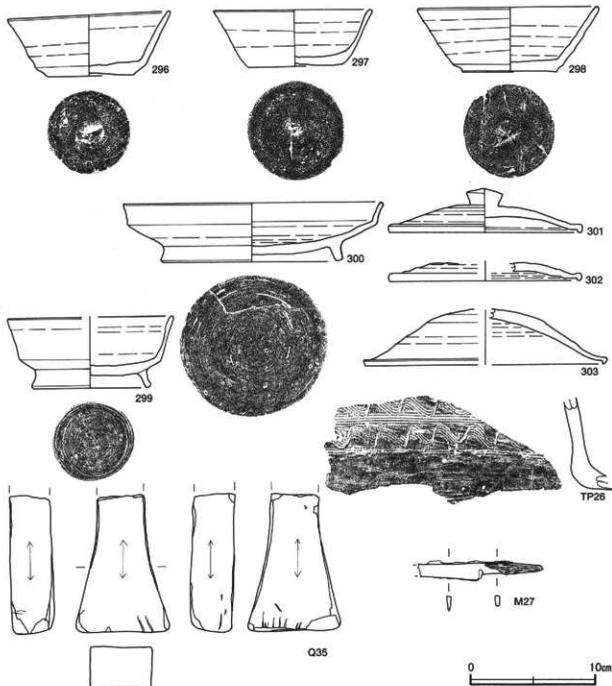
ピット 確認されなかった。

覆土 5層からなる。第5層は粘土層で、第1～4層は含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

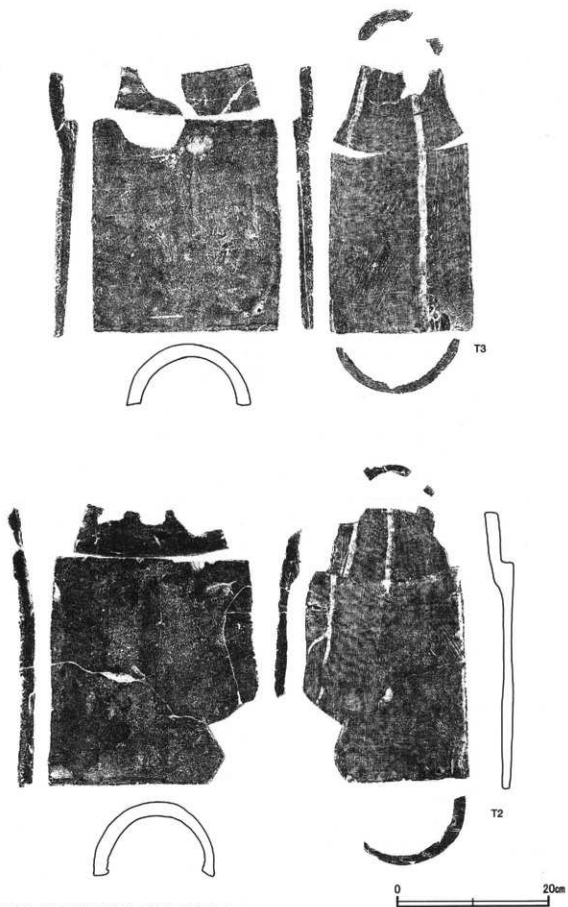
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
 3 暗褐色 ロームブロック少量

- 4 褐色 ロームブロック中量
 5 褐色 粘土粒子中量



第133図 第16号住居跡出土遺物実測図(1)



第134图 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 土師器片149点(環類21・甕類128)、須恵器片62点(環類48、甕類14)、石製品1点(砥石)、石材2点、鉄製品1点(刀子)、瓦片11点、石材2点の他、埋没する過程で混入した瓦質土器片1点が出土している。出土した遺物は大きく2群に分かれ、296・301は正位の状態で、297は逆位の状態で北東部の床面から出土している。298は正位の状態で、299・300は逆位の状態で南壁寄りの床面上からそれぞれ出土している。竈からはT2・T3が軸部の芯材として使用され、303が左軸から内部に落ち込んだような状態で出土している。床面上から石材が出土しているが、用途は明らかではない。

所見 本跡の竈に使用された瓦は、新治院寺や周辺の窯跡などから持ち込まれたものと考えられる。時期は、出土土器などから9世紀前半と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表(第133・134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
296	須恵器	環	12.8	5.0	6.8	石英・長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	73% 堀ノ内* PL95
297	須恵器	環	12.6	4.6	7.3	長石・白色粒子	灰ナリーブ	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	73% 益子 PL96
298	須恵器	環	14.6	5.1	7.6	石英・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	床面	70% PL96
299	須恵器	高台付環	[13.1]	5.6	8.9	石英・長石	灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	50%
300	須恵器	壺	20.6	4.7	14.1	長石・黒色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	60% 堀ノ内* PL102
301	須恵器	壺	15.3	3.5	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	70% 益子* PL100
302	須恵器	蓋	15.0	(15)	-	石英・長石	灰	普通	ロクロナデ	覆土下層	43% 堀ノ内*
303	須恵器	蓋	19.0	4.1	-	長石・黒色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	竈	40% 堀ノ内

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T126	須恵器	蓋	-	-	-	長石・石英・黒色粒子	黄灰	良	外国タシ書き装文	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q35	砥石	(11.0)	7.4	3.1	(374.0)	凝灰岩	砥面4面	覆土上層	
M27	刀子	(10.0)	(1.4)	0.4	(10.4)	鉄	刀身断面三角形、基部木片付着	覆土上層	
T2	丸瓦	36.6	15.9	2.0	(2480.0)	土	下縁式、凸面ナデ、四面布目直、吊縁直	竈右軸	被蒸飯有り PL107 被熱飯有り PL107
T3	丸瓦	(35.0)	(16.3)	1.7	(2250.0)	土	玉縁式、凸面ヘラナデ、四面布目直、吊縁直	竈左軸	

第17号住居跡(第135図)

位置 調査区西部のK15g0区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第16・140号住居跡、第180号土坑を掘り込み、第18号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南側は第18号住居に掘り込まれ、全容は不明である。規模は東壁2.6mが確認でき、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-0°である。壁高は6~18cmで、ほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、西側が若干下がる。西側にロームを主体とした貼床が施されており、中央部付近が踏み固められている。溝は確認されなかった。

竈 2か所確認されている。竈1は北東コーナーに構築されている。規模は、焚き口部から煙道部先端まで128cm、袖部幅は132cmである。煙道部は壁外へ65cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は、崩落しており、第3層がその土層と考えられる。袖部は、砂質粘土で構築されている。火床部は地山をわずかに掘り込み、火床面が赤変硬化している。

竈1土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

竈2は東壁に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで63cm、竈の掘り込み幅41cmである。煙道部は壁外へ39cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、袖部も残存していない。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。

竈2土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|---------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 灰黄褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子微量 | | |

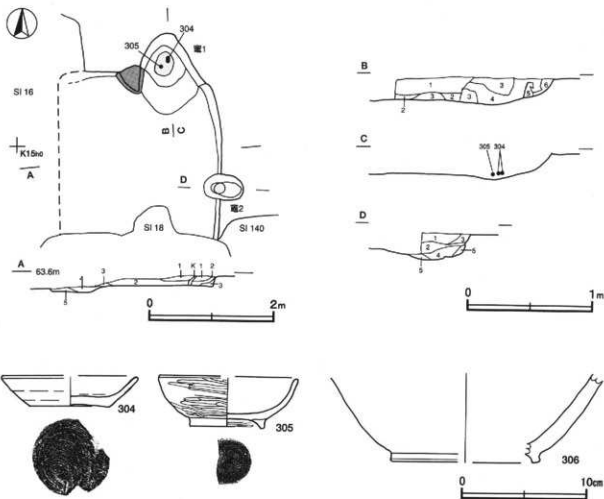
ピット 確認されなかった。

覆土 5層からなる。第4層は貼床の土層で、これより上面は含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量、粘性弱 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| | | 5 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片36点（坏類12、甕類24）、須恵器片2点（坏類）、灰釉陶器片1点（瓶）、石材3点が



第135図 第17号住居跡・出土遺物実測図

出上している。304・305は竈の内部から、正位の状態を出土している。

所見 2基の竈が確認されているが、竈2の残存状況が良好ではなく、遺物も見られないことから竈1に先行するものと判断される。時期は、重複関係と出土土器から第18号住居跡に先行する10世紀前半と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表 (第135図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
304	土師器	皿	[10.5]	2.4	6.1	赤色粘土・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	竈	40%
305	土師器	高台付甕	[11.0]	4.0	5.8	長石・雲母	赤褐	普通	体部外面へラ磨き	竈	40%
306	灰胎	瓶	-	(7.1)	[11.6]	長石	灰黄	良	体部外面下部へラ磨り後ナデ	覆上土層	5%

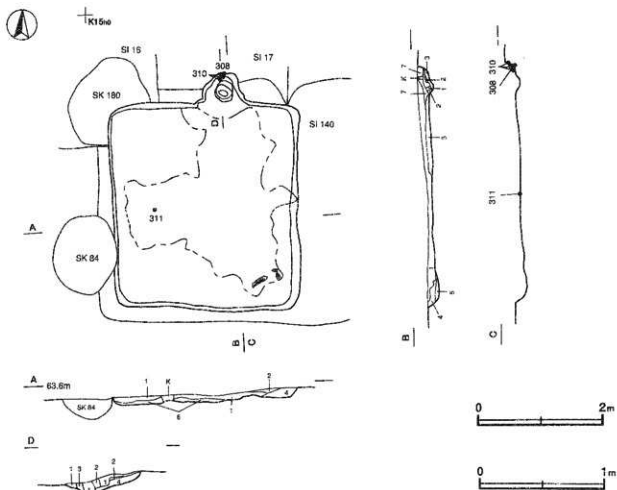
第18号住居跡 (第136・137図)

位置 調査区西部のK15h0Kに位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第16・17・140号住居跡、第180号土坑を掘り込み、第84号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.0mの方形で、主軸方向はN-3'-Eである。壁高は12~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 若干起伏があり、竈の前面から中央部にかけて炭化物混じりのロームによる貼床が施され、若干踏み固められている。壁溝は確認されなかった。



第136図 第18号住居跡実測図

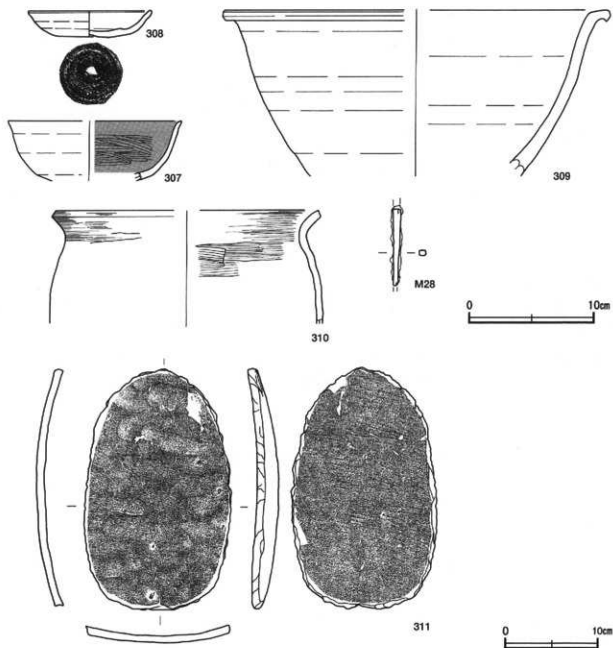
竈 北壁の東寄りに構築され、袖部はすでに失われている。規模は焚き口部から煙道部先端まで45cm、竈の掘り込み幅は83cmである。竈は壁を掘り込んで設けられ、煙道部は緩やかに外傾して立ち上がっている。天井部は確認されず、対応する土層も見られないことから、破壊されたと考えられる。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変している。第4層は、火床部から煙道部にかけて補修のために貼られた粘土と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|----------|--------------------|
| 1 灰黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量 | 3 明黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 明褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子微量 | 4 に近い黄褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 |

ピット 確認されなかった。

覆土 7層からなる。ブロックを含む層が多いことから、人為堆積の可能性が考えられる。第3・6層は、貼床の土層で、第1層からは炭化物が出土している。



第137図 第18号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1	黒褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量	5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	6	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック・粘土粒子微量	7	黒褐色	焼土粒子中量、炭化物少量、ロームブロック・粘土粒子微量
4	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片142点（環類55, 変類87）、石製品2点（砥石）、鉄製品1点（釘カ）、瓦片1点、石材4点の他、埋没する過程で混入した縄文土器片2点（胴部）、須恵器片33点（環類18, 変類11, 鉢4）が出土している。308は正位の状態、310は破片の状態それぞれ室内から出土している。311は床面上から逆位の状態で出土し、内部が摩滅していることから転用碗と考えられる。

所見 時期は、重複関係と出土土器から第17号住居跡に後出する10世紀後半と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表（第137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
307	土師器	環	13.7	(4.8)	--	長石・赤色粒子・炭粉	にじみ濃	普通	内面ヘラ磨き	焼土上層	25%
308	土師器	皿	9.7	2.2	4.9	石英・長石・赤粉	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	甕	100% PL99
309	須恵器	鉢	30.6	(13.2)	--	長石	灰	普通	口縁部外反	覆土上層	20%
310	土師器	甕	129.8	(9.0)	--	石英・長石	橙	普通	律部内面ハケ目	甕	10%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
311	須恵器	碗	25.3	15.4	0.8	石英・長石	黒褐色	普通	裏転用、底部片を長楕円形に整形	床面	100% 逆位。PL101

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M28	釘カ	(6.1)	0.65	0.45	(7.55)	鉄	断面内角形、両端欠損	覆土中	

第19号住居跡（第138図）

位置 調査区西部K15j0区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第112号住居跡と重複している。

規模と形状 南側は調査区域外に延びており、全容は不明である。規模は、調査された範囲で長辺4.1m、短辺1.8mで、方形または長方形と推定され、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は22~45cmで、ほぼ直立している。

床 若干起伏があり、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は、東壁の一部を巡っている。

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は吹き口部から煙道部先端まで172cm、袖部幅は162cmである。煙道部は壁外へ87cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第2・4・7・11層がその土層と考えられる。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は第13層の上面に形成されている。

土層解説

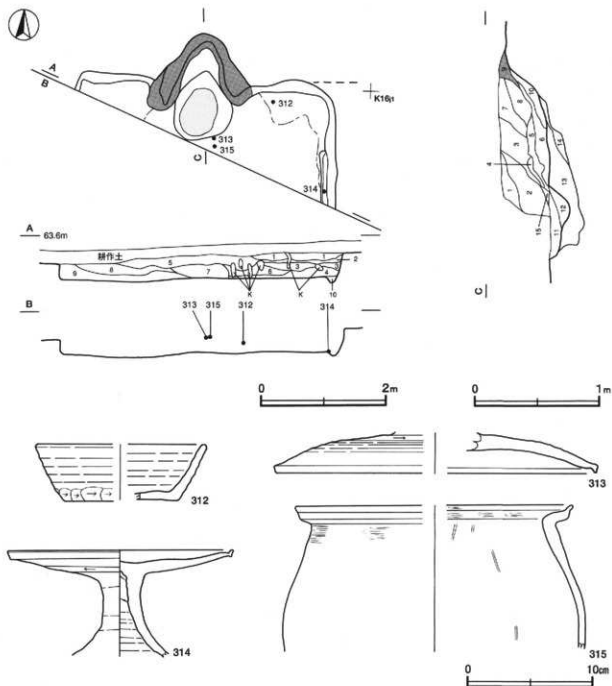
1	にじみ褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	8	暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、炭化物微量
2	褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量	9	褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3	褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	10	褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
4	褐色	粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	灰褐色	粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	赤褐色	焼土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	12	褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
6	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	13	暗赤褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
7	にじみ黄褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量	14	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
			15	にじみ黄褐色	焼土粒子・粘土粒子微量

ピット 確認されなかった。

覆土 10層からなる。ロームブロック・粘土を含む層が多く、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7	褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量	9	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量
4	褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	10	褐色	ローム粒子中量
5	褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量			
6	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量			



第138図 第19号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片112点（坏類6，甕類106），須恵器片43点（坏類36，甕類6，高盤1），鉄製品1点（不明），瓦片1点，石材14点が出土している。312は竈東側の壁際から，313・315は竈前面の覆土下層付近からそれぞれ出土している。314は東壁際の壁溝上から倒れた状態で出土している。

所見 時期は，出土土器などから8世紀後半と考えられる。

第19号住居跡出土物観察表（第138図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
312	須恵器	坏	[13.4]	4.4	[9.2]	石英・長石	黄灰	普通	体部下端・底部手持ちヘラ削り	覆土下層	30% 胎ノ内カ
313	須恵器	蓋	[25.4]	(3.2)	-	石英・長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	40%
314	須恵器	高盤	17.9	(8.4)	-	石英・長石	灰	普通	盤部外面回転ヘラ削り	壁溝	80% 胎ノ内カ P1.12
315	土師器	甕	[22.0]	(11.4)	-	石英・長石・雲母	にぶい黒	普通	内外面ナデ	覆土下層	30%

第21号住居跡（第139図）

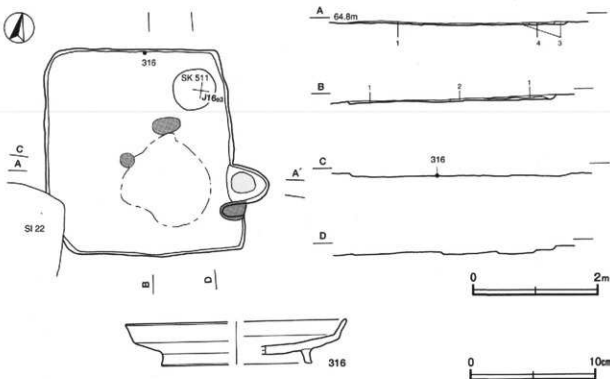
位置 調査区西部のJ16e2区に位置し，尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第22号住居，第511号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m，短軸3.0mの長方形で，主軸方向はN-85°-Eである。壁高は2～6cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は，焚き口部から煙道部先端まで68cm，袖部幅は94cmである。煙道部は壁外へ58cmほど掘り込まれ，緩やかに立ち上がっている。天井部は削平され，袖部は右袖の基部が残存している。袖部は砂質粘土で構築されている。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ，緩やかに立ち上がっている。火床部は床面とほぼ同じレベルに構築され，火床面が赤変している。



第139図 第21号住居跡・出土遺物実測図

ピット 確認されなかった。

覆土 4層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。第3・4層は、窓の土層である。また床面に接して粘土が堆積している。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量 | 4 | 赤褐色 | 焼土ブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片22点(坏類5, 甕類17)が出土している。316は北壁際から高台を上に向け斜位の状態で出土している。

所見 時期は、第22号住居跡との重複関係や出土土器などから9世紀前半と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表(第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
315	須恵器	鉢	17.5	3.4	11.8	石灰・長石	灰	普通	底部回転ヘラ有り	床面	30%

第22号住居跡(第140図)

位置 調査区西部のJ16e2区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第21号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.8m, 短軸2.8mの長方形で、主軸方向はN-91°-Eである。壁高は12~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、窓の前面から中央部にかけてが踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで86cm, 袖部幅は61cmである。煙道部は壁外へ36cmほど掘り込まれており、緩やかに立ち上がっている。天井部は失われており、袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は地山を若干掘り込んで構築され、火床面が赤変している。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|--------------|---|------|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | 5 | 褐色 | 焼上粒少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子少量 | 6 | 暗赤褐色 | 焼上粒少量, 炭化粒少量 |
| 3 | 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子微量 | 7 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 粘土粒少量 |
| 4 | 褐色 | 焼上粒少量, 炭化粒微量 | | | |

ピット 4か所。P1~P3は深さ27~42cmで、主柱穴と考えられる。P1に対応する南東側の柱穴は確認されなかった。P4は深さ26cmで、南壁に接していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

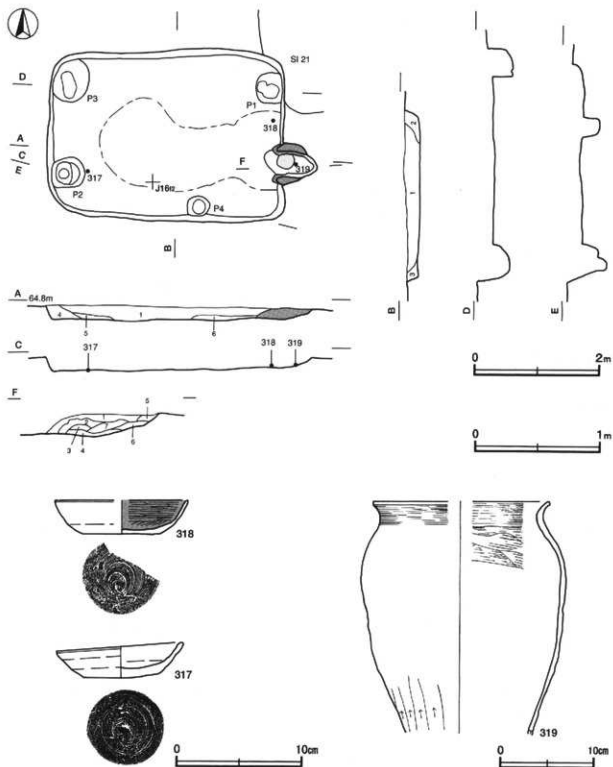
覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片103点(坏類27, 甕類76), 鉄製品1点(釘か), 瓦片2点, 石材2点の他, 埋没する過程で混入した須恵器片20点(坏類16, 甕類3, 壺1)が出土している。317はP2付近の床面から逆位の状態で、318は東壁際から正位の状態で出土しており、319は竈内から11線部を煙道部壁に向けて横位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器などから10世紀前半と考えられる。



第140図 第22号住居跡・出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
317	土師器	皿	10.0	22~27	6.1	長石・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ヘラ削り	床面	100% PL99
318	土師器	皿	[11.6]	3.2	5.2	長石・雲母	にぶ・黄橙	普通	内面ヘラ磨き、底部回転糸切り	床面	60%
319	土師器	甕	[18.4]	[24.7]	-	石英・長石	にぶい・藍	普通	体部外面下部ヘラ削り、内面ナデ	竈	40%

第23号住居跡 (第141～143図)

位置 調査区西部のJ16e5区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第24号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.4m、短軸5.2mの方形で、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は28～34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、ピットの内側が踏み固められている。壁溝は北東コーナー及び南壁中央部を除いて通っており、断面はU字形である。

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで130cm、袖部幅は143cmである。煙道部は壁外へ55cmほど掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。天井部は崩落しており、第1・5・18・20層が対応する土層と考えられる。袖部は砂質粘土で構築されており、内側は火熱を受けている。火床部は第11層の上面と考えられ、火床面が変染している。土師器の甕を転用した支脚が煙道部寄りから出土し、被熱している。第10・11・15層より下は竈の掘り方と考えられる。

竈土層解説

1 褐 灰 色	粘土粒が多量、焼土ブロック微量	18 灰 黄 褐色	粘土粒子多量、焼土粒子微量
2 褐 色	ローム粒子少量、粘土ブロック微量	19 灰 褐色	粘土粒少量、焼土ブロック微量
3 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	20 灰 色	粘土粒子中量
4 暗 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	21 黒 褐色	焼土ブロック少量
5 灰 褐色	粘土粒子多量、粘性・しまり強	22 暗 褐色	焼土粒少量、ローム粒微量
6 褐 灰 色	ローム粒少量、焼土粒微量	23 灰 褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量
7 暗 赤 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	24 暗 褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
8 暗 赤 褐色	焼土粒少量	25 灰 赤 色	焼土粒・粘土粒少量
9 黒 褐色	焼土粒少量、炭化粒微量	26 暗 褐色	ローム粒子微量
10 灰 褐色	粘土粒子少量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	27 灰 褐色	焼土粒・粘土粒少量、ロームブロック微量
11 灰 褐色	焼土粒少量	28 灰 褐色	粘土粒子中量
12 褐 色	ローム粒少量、炭化粒子微量	29 褐 灰 色	粘土粒中量、小礫少量
13 褐 色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	30 灰 褐色	粘土ブロック中量
14 黒 褐色	焼土粒・粘土粒少量	31 褐 灰 色	粘土粒少量
15 灰 褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック少量	32 灰 褐色	粘土粒中量
16 灰 褐色	焼土粒・粘土粒少量	33 黒 褐色	粘土粒中量、焼土粒子少量
17 灰 黄 褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量	34 黒 褐色	焼土ブロック・ローム粒少量

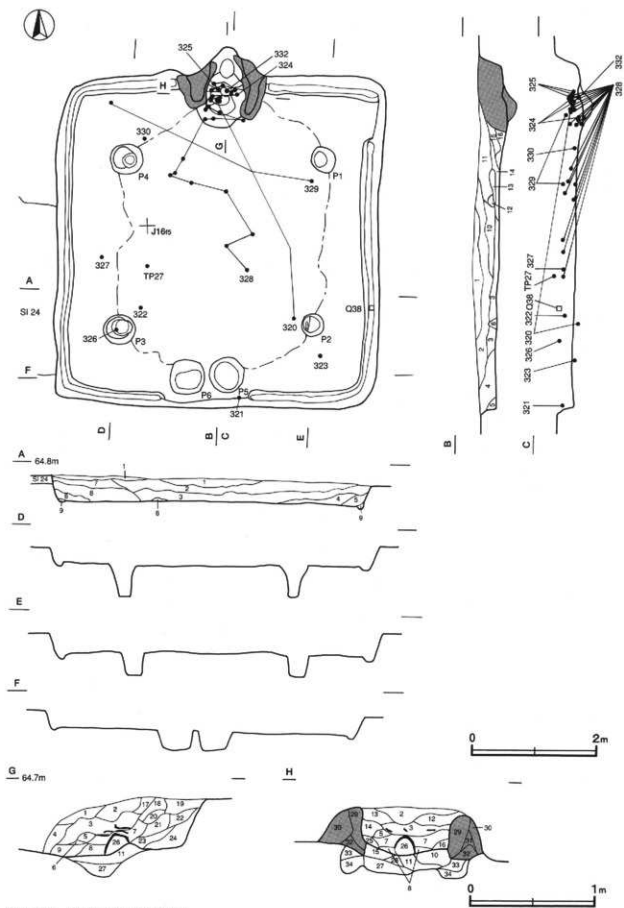
ピット 6か所。P1～P4は深さ33～50cmで、主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ31～33cmで、南壁寄り中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 16層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

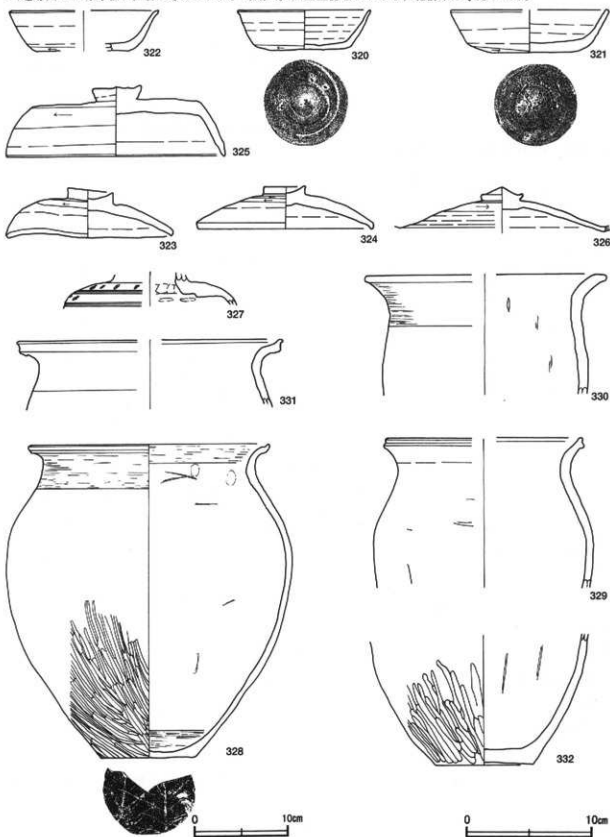
1 褐 色	ローム粒少量	9 褐 色	ローム粒中量
2 褐 色	ローム粒少量、炭化粒微量	10 暗 褐色	ローム粒中量、粘土粒微量
3 暗 褐色	ローム粒少量、炭化粒微量	11 褐 色	粘土粒少量、焼土粒子・炭化粒微量
4 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	12 黒 褐色	ローム粒少量、粘土粒微量、粘性強
5 褐 色	ローム粒少量	13 褐 灰 色	粘土粒中量、焼土粒子微量、粘性強
6 にぶい褐色	ローム粒中量	14 褐 色	粘土粒少量、ロームブロック・炭化粒微量
7 褐 色	ローム粒少量、赤色粒微量	15 灰 褐色	粘土粒多量、焼土粒少量
8 暗 褐色	ローム粒中量、焼土粒微量	16 暗 褐色	焼土粒・炭化粒微量

遺物出土状況 土師器片565点(坏類139, 甕類426), 須恵器片52点(坏類41, 甕類10, 蓋1), 石製品1点(砥石), 鉄製品3点(釘1, 不明2), 銅製品1点(帯先金具), 石材5点の他、埋没する過程で混入した縄文土器片1点(胴部), 石器1点(石鏃)が出土している。竈内からは須恵器3点, 土師器3点が出土している。320は正位の状態, 324は斜位の状態, 325は破片の状態それぞれ出土している。竈内の土師器はすべて甕で, 332は竈の煙道部寄りから逆位の状態で出土し, 支脚に転用されていたと考えられる。324は332付近から焚き口部にかけて, 328は竈内から中央部付近の覆土中層からそれぞれ破片の状態で出土している。竈以外では南寄りから比較的遺物が多く見られ, 321は南壁際の確認面付近から住居内に落ち込んだような状態で,

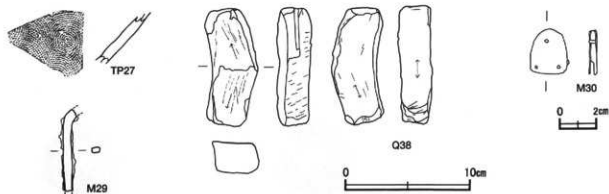


第141图 第23号住居跡実測図

323は南東コーナー付近の床面付近から正位の状態出土している。M30は南東部の覆土下層から出土している。
 所見 下野産（益子窯か）と考えられる須恵器（323・324）が2点出土している。また、帯先金具の存在から
 当遺跡内では有力者の住居と考えられる。時期は、出土土器などから8世紀前葉と考えられる。



第142図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



第143図 第23号住居跡出土遺物実測図(2)

第23号住居跡出土遺物観察表 (第142・143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
320	須恵器	環	10.6	3.2	7.0	長石	灰	普通	体部下部回転ヘラ削り、 底部回転ヘラ削り後ヘラ削り	床面	80% PL96
321	須恵器	環	[12.6]	3.4	8.7	長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	覆土上層	60%
322	須恵器	環	[12.0]	3.2	[7.9]	長石・白色砂子	ナリーブ灰	普通	体部下層・底部回転ヘラ削り	覆土上層	30%
323	須恵器	蓋	11-13	3.9	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	100% 自然種 PL100
324	須恵器	蓋	13.8	3.4	-	長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	甕	55% PL100
325	須恵器	蓋	17.4	5.6	-	石英・長石 赤色砂子	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	甕	65%
326	須恵器	蓋	[17.2]	(3.7)	-	石英・長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	20% 磁子カ
327	須恵器	蓋	-	(2.9)	-	長石	灰	良	刺突文を?脱輪し、 土条上座位の沈着で区画	覆土上層	10%
328	土師器	甕	25.2	33.0	10.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下部ヘラ磨き、 底部木葉痕	甕	60%
329	土師器	甕	[15.7]	(11.9)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ磨き	覆土上層	15%
330	土師器	甕	[18.8]	(9.6)	-	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	内外面ナゲ	覆土下層	10%
331	土師器	甕	[21.0]	(5.5)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	内外面ナゲ	覆土中	5%
332	土師器	甕	-	(10.3)	7.8	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面下部ヘラ磨き、 底部ヘラ削り	甕	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP27	須恵器	甕	赤色砂子・雲母	灰白	普通	外面円形叩き	覆土上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q38	砥石	9.4	4.2	1.8	151.8	粘板岩	砥面4面、くの字形	覆土中	
M29	釘	(6.5)	0.8	0.35	(9.7)	鉄	断面四角形	覆土上層	
M30	帯金具	2.0	2.4	0.45	6.4	銅	刷地金銅カ、鉄3ヶ所	覆土下層	PL106

第24号住居跡 (第144図)

位置 調査区西部のJ16F4区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第23・139号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東壁は第23号住居跡に掘り込まれており、全容は不明である。規模は長辺3.0m、短辺2.8mの方形または長方形と推定され、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は8~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁溝は確認されなかった。

竈 北壁に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで73cm、竈の掘り込み幅は41cmである。煙道部は壁外へ60cmほど掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。天井部は削平され、袖部も第139号住居によって

破壊されたと考えられる。火床部は地山を若干掘り込んで構築され、あまり熱を受けていない。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|--------|-------|----------|
| 1 灰褐色 | 粘土粒子少量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量 | 5 褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子少量 | | |

ピット 床面を精査したが確認されなかった。

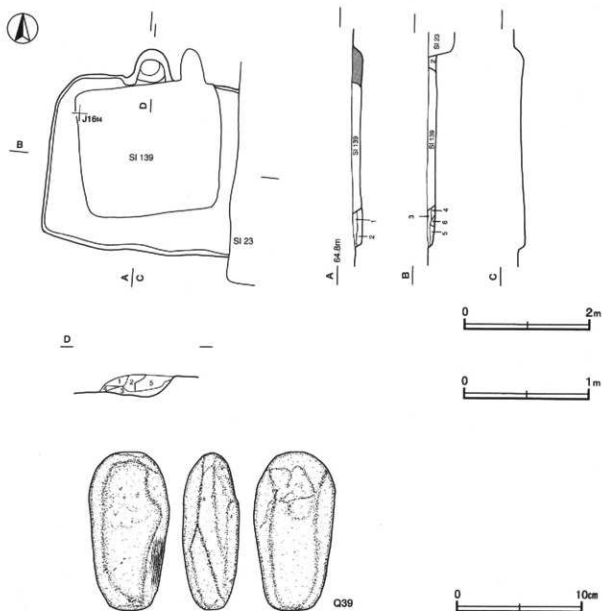
覆土 6層からなる。ローム粒子を含む層が多く、人為堆積の可能性がある。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|----------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 に近い黄褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 石器片1点（磨石）が出土している。Q39は覆土上層から出土している。

所見 時期は、第23号住居跡との重複関係などから8世紀以前と考えられる。



第144図 第24号住居跡・出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 (第144図)

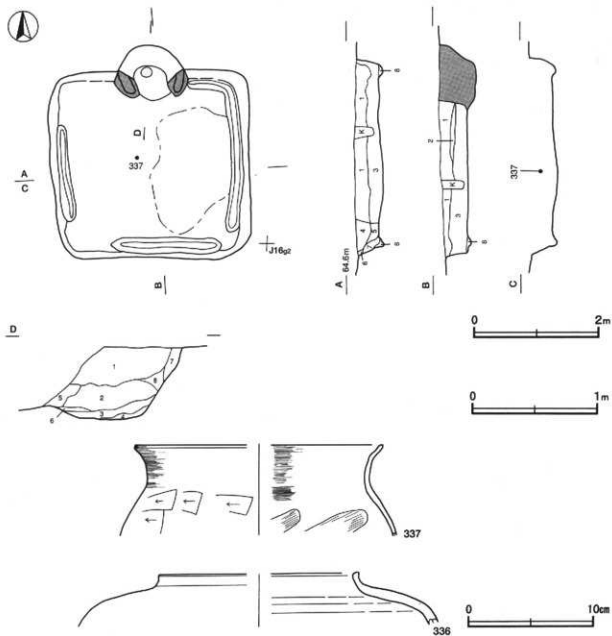
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q39	磨石	12.6	6.9	4.5	507.0	安山岩	端部に磨り痕	覆土上層	

第26号住居跡 (第145図)

位置 調査区西部のJ16f1区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸3.2m、短軸3.0mの方形で、主軸方向はN-3'-Eである。壁高は36~42cmで、北壁・東壁・南壁はほぼ直立しており、西壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、東側が踏み固められている。壁溝は、竈の東側から西壁にかけて巡っており、南東コーナー・南西コーナー付近で途切れている。断面はU字形である。



第145図 第26号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁の中央部に構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで88cm、袖部幅は115cmである。煙道部は壁外へ55cmほど掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。天井部は失われており、対応する土層も確認されなかった。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は地山を掘り込んでおり、火床面が赤変し硬化している。

竈土層解説

1	褐	褐色	ローム粒子少量	5	褐	褐色	ロームブロック微量
2	暗	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	6	暗	褐色	ローム粒子少量
3	黒	褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	7	褐	褐色	ローム粒子少量
4	暗	褐色	焼土粒子少量	8	暗	褐色	ローム粒子少量

ピット 確認されなかった。

覆土 8層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗	褐色	ローム粒中量、焼土ブロック・炭化物少量	5	暗	褐色	ロームブロック微量
2	黒	褐色	ローム粒子少量	6	暗	褐色	ローム粒子中量
3	に	黒い黄褐色	ロームブロック・炭化物微量	7	に	黒い黄褐色	ローム粒子少量
4	暗	褐色	ロームブロック少量	8	褐	褐色	ローム粒中量

遺物出土状況 土師器片48点（坏類9、甕類39）、須恵器片12点（坏類7、甕類4、壺1）、石材2点の他、埋没する過程で混入した縄文土器片8点が出土している。337は第3層中から破片の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器などから9世紀代と推定される。

第26号住居跡出土遺物観察表（第145図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
336	須恵器	短頸壺	10.8	(4.2)	-	灰石・白・黒色粒子	暗灰青	普通	ロクロナテ	覆土上層	20% 自然胎
337	土師器	甕	118.1	(7.2)	-	石英・長石	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	覆土中層	20%

第27号住居跡（第146・147図）

位置 調査区西部のJ16g4区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第140号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.8m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-8'-Eである。壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。

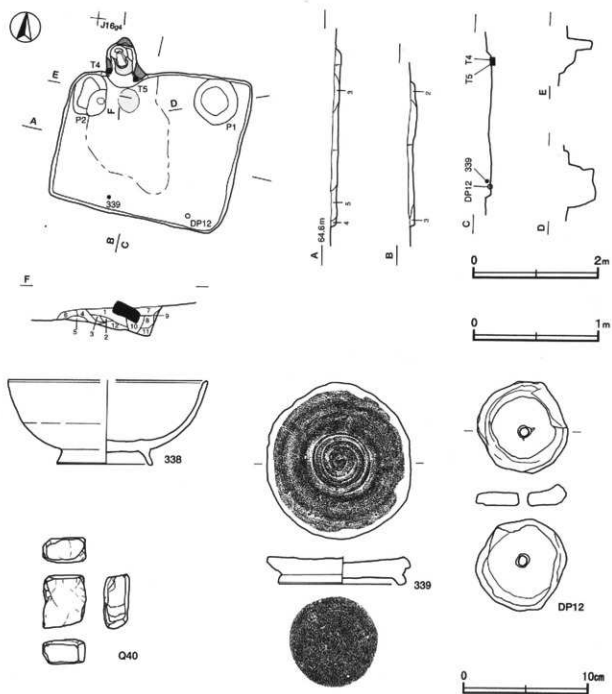
床 平坦で、竈の前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁の西寄りに構築されている。規模は焚き口部から煙道部先端まで81cm、袖部幅は57cmである。竈は壁外へ65cmほど掘り込まれ、煙道部は外傾して立ち上がっている。天井部は失われており、構築材と考えられる石材が倒れ込んでいる。袖部は砂質粘土で構築され、平瓦を補強材として使用している。火床部は地山を若干掘り込んで構築され、火床面が赤変している。

竈土層解説

1	褐	灰色	粘土粒子少量、焼土粒子微量	7	黒	褐色	焼土粒子少量
2	褐	灰色	粘土粒子微量	8	暗	赤褐色	焼土粒子少量
3	黒	褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	9	暗	赤褐色	焼土粒子少量
4	灰	褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	10	暗	赤褐色	焼土粒子少量
5	黒	褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗	赤褐色	焼土粒子微量
6	褐	灰色	粘土粒子少量、炭化粒子微量	12	暗	赤褐色	焼土粒子少量

ピット 2か所。P1・P2は深さ38~40cmで、柱穴と考えられるものの、対応する南側の柱穴は確認されていない。



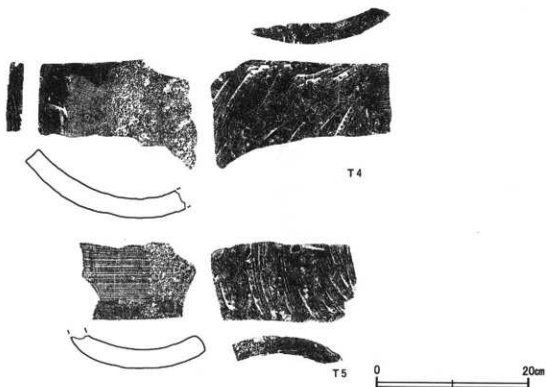
第146図 第27号住居跡・出土遺物実測図

覆土 5層からなる。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。竈の前面に若干焼土が堆積している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片93点（環類42，甕類51），須恵器片4点（環類2，甕類2），石材11点が出土している。339は南壁付近から逆位の状態で、DP12は南東コーナー付近の床面上からそれぞれ出土している。T4・T5は竈の袖部から出土している。



第147図 第27号住居跡出土遺物実測図

所見 竈に使用された瓦と同様の叩きを持つ瓦は、新治庵寺からも出土しており、新治庵寺あるいは周辺の瓦窯跡からもたらされた瓦を転用したと考えられる。時期は、出土土器などから9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表 (第146・147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
338	土師器	高台付椀	[15.8]	6.7	7.5	雲母	に白い赤褐色	普通	底部内面へろ磨き	覆土中	30%
339	須恵器	硯	11.3	2.1	10.1	長石・白色粒子	灰	普通	高台付坏転用、破断面研磨整形	床面	100% 益子 PL101

番号	器種	直径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
D P 12	紡錘車	7.2	1.7	1.0	65.4	長石・雲母	高台付坏底部転用、高台脱落部研磨整形	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 40	砥石	4.3	(3.4)	1.9	(44.9)	粘板岩	砥面3面	覆土中	
T 4	平瓦	(12.2)	(21.0)	2.5	(1150.0)	土	凸面瓦当范による叩き、凹面布目痕	竈袖	PL107
T 5	平瓦	(10.5)	(17.8)	2.6	(760.0)	土	凸面瓦当范による叩き、凹面布目痕	竈袖	PL107

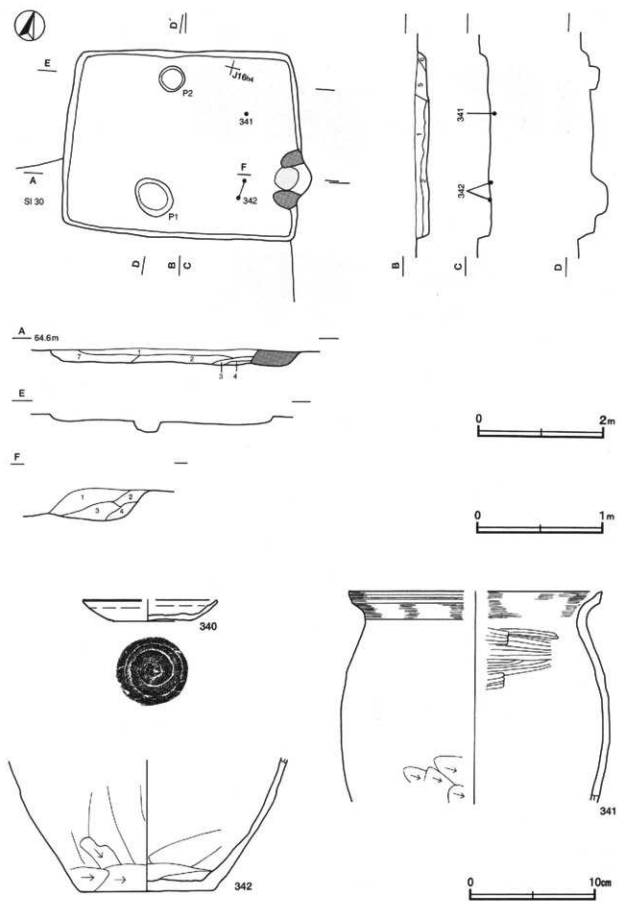
第28号住居跡 (第148図)

位置 調査区西部のJ 16h3区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第30・150号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.8m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-81°-Eである。壁高は12~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 若干起伏があり、やや軟弱である。壁溝は確認されなかった。



第148图 第28号住居跡・出土遺物実測図

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口から煙道部先端まで58cm、幅は95cmである。煙道部は壁外へ35cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。天井部は失われており、対応する土層は確認されなかった。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は地山を若干掘り込んで構築され、火床面が赤変している。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	3 暗赤褐色	焼土ブロック微量
2 灰褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック微量	4 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ25cm、P2は深さ18cmで、性格は不明である。P2内から石材が出上している。

覆土 7層からなり、第3・4層は竈から流出した土層である。含有物を均等に含んでいることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子中量
3 暗赤褐色	炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片274点（環頸88、甕類186）、石材11点の他、埋没する過程で混入した縄文土器片1点、須恵器片18点（環頸15、甕類3）が出上している。341・342は床面付近から、破片の状態で出上している。

所見 時期は、出土土器などから10世紀後半以降と考えられる。

第28号住居跡出土遺物観察表（第148図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
340	土師器	甕	10.6	1.6	5.5	長石・安母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土上層	60%
341	土師器	甕	20.2	16.8	-	石英・灰石・赤母	にぶい赤黒	普通	外周縁部のヘラ削り、内面一部ハケ目	床面	30%
342	土師器	甕	-	10.4	10.6	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	底部外面下端ヘラ削り	床面	20%

第29号住居跡（第149図）

位置 調査区西部のJ16h2区に位置し、尾根上の平坦面に立地している。

重複関係 第30号住居跡を掘り込み、第58号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.0m、短軸2.6mの長方形で、主軸方向はN-91°-Eである。壁高は15-23cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈の前面から中央部付近にかけて踏み固められている。壁際は南東コーナー付近から竈の左袖部まで巡っており、断面はU字形である。

竈 東壁の南寄りに構築されている。規模は焚き口から煙道部先端まで87cm、竈の掘り込み幅は80cmである。竈は壁外へ70cmほど掘り込まれ、煙道部はほぼ直立している。天井部と袖部は失われており、対応する土層も確認されなかった。火床部は床面と同じレベルで、火床面が赤変している。石製支脚が煙道部寄りに設置されている。

竈土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	4 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	5 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	6 暗赤褐色	焼土ブロック微量
		7 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ18cmで、主柱穴と考えられるが、対応するその他の柱穴は確認できなかった。P2は深さ12cmで、ピット内に石塊が置かれている。P3は深さ43cmで、性格は不明である。